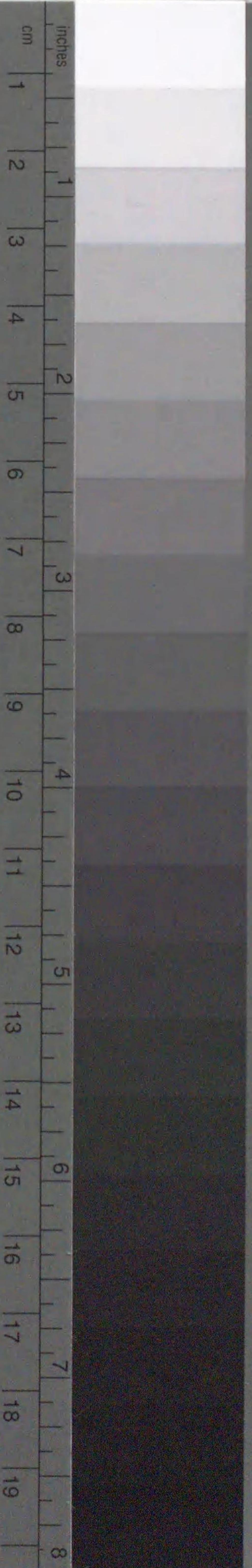


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

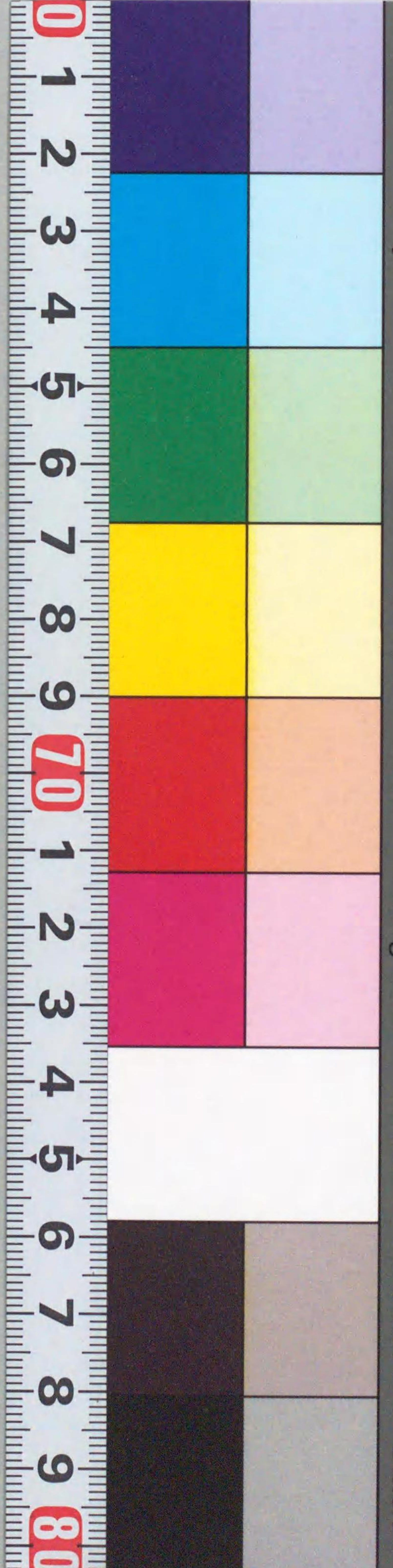


Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



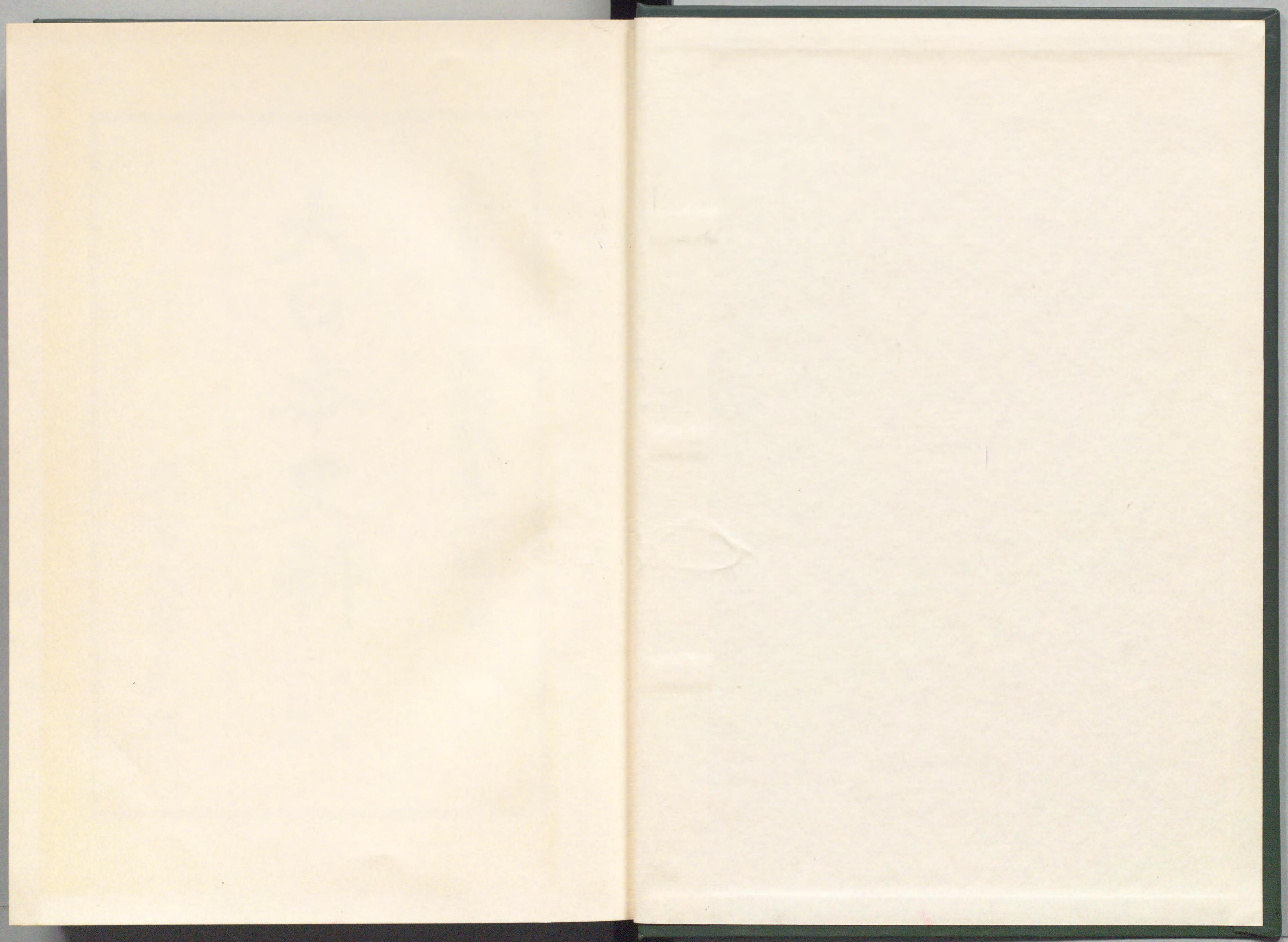
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80

GB22

7



00735713



東京大學史料編纂所編纂

大日本史料

第十二編
之四十四

東京大學藏版

8

2/10.08
To 456d

GB22
7



735713

大日本史料

第十二編之四十四目次

後水尾天皇

元和八年

正月

一日 四方拜・節會アリ、 <small>公家衆・門跡等ノ年頭祝儀</small>	一
幕府、歳首ノ儀アリ、 <small>諸大名ノ年頭祝儀</small>	二四
二日 幕府、謠始アリ、	二九
目次 元和八年正月	一

五日 千秋萬歳アリ、……………三〇

諸社寺ノ千秋萬歳、

敍位、内大臣從二位一條康道ヲ正二位ニ敍ス、……………三一

幕府、茶湯始アリ、……………三二

七日 白馬節會、……………三三

幕府、鐵炮始アリ、……………四五

八日 太元護摩ヲ修ス、……………四五

九日 親王・公家衆・門跡以下、參内シテ、歳首ヲ賀シ奉ル、……………四七

十日 江戸城北丸修築ニ依リ、甲斐甲府城主徳川忠長、假ニ上野館林城主榊原忠次ノ江戸ノ亭ニ移ル、……………四九

十一日 神宮奏事始、……………五一

皇大神宮及ヒ豐受大神宮禰宜補任、

除目、左近衛少將北畠親顯ヲ左近衛中將ニ、侍從岩倉具

起ヲ右近衛少將ニ任ズ、……………七三

幕府、常陸古渡ノ丹羽長重ノ封ヲ陸奥棚倉ニ移シ、五萬石ヲ與フ、……………七四

十六日 踏歌節會、……………七九

十七日 舞樂御覽アリ、……………八六

十八日 小三毬打アリ、……………八七

春日社以下三毬打、

十九日 和歌御會始、……………八八

コノ後本年中ノ月次和歌御會、

二十日 幕府、具足祝及ビ連歌アリ、……………一〇二

廿二日 秀忠、大澤基宿ヲ遣シテ、歳首ヲ賀シ奉ル、……………一〇三

伊豫松山城主加藤嘉明ノ江戸ノ亭、火災アリ、……………一〇四
秀忠、放鷹シテ獲タル鶴ヲ、出羽久保田城主佐竹義宣、

陸奥仙臺城主伊達政宗等ニ與フ、……………一〇五

廿三日 秀忠ノ世子家光、武藏川越ニ放鷹ス、……………一〇八

廿六日 秀忠、美濃大垣城主松平^久、忠良ノ女ヲ養ヒテ、筑前福岡城主黒田長政ノ嗣子忠之ニ嫁セシム、……………一〇九

廿八日 中和門院、參内セラル、……………一一四

是月 豊前小倉城主細川忠利ノ父三齋^{忠興}、江戸ニ新亭ヲ營ム、……………一一四

末次政直^{平藏}、商船ヲ呂宋島ニ派ス、……………一一七

攝津國武庫郡瓦林ノ住人毛利重能、京都ニ於テ、割算書ヲ刊行ス、……………一一八

二月

六日 春日祭延引、尋デ、之ヲ追行ス、……………一四〇

安藝廣島城主淺野長晟・肥後熊本城主加藤忠廣・播磨姫路城主本多忠政ノ嗣子忠刻、江戸ニ參觀ス、是日、長晟、江戸ニ著ス、……………一四二

十日 幕府、喧嘩口論ノ場・罪人處刑ノ場及ビ失火ノ地等ニ集リ見ルコトヲ禁ジ、又、傳馬・撰錢ニ關スル制ヲ定ム、……………一四三

是ヨリ先、越前北莊城主松平忠直、疾ニ依リ江戸ニ參觀セズ、幕府、近藤用可ヲシテ、忠直ノ疾ヲ問ハシム、是日、用可、歸途相模大磯ニ於テ、落馬シテ卒ス、……………一四七

若狹小濱城主京極忠高ノ代官多賀越中守、物成・夫子米・浦方ノ魚等ニ就キテノ條規ヲ定ム、……………一五二

十二日 幕府、江戸參觀中ノ肥後熊本城主加藤忠廣ヲ、江戸城ニ饗ス、……………一五六

十四日 權中納言日野資勝ヲシテ、後陽成天皇宸筆源氏物語ヲ書

寫セシメラル、……………一五六

幕府、徳川家康ノ七回忌祭儀ヲ下野日光山ニ修セントシ、
堂塔以下ヲ増建シ、又、公家衆・門跡等ノ之ニ會センコ
トヲ奏請ス、……………一五七

十八日 新上東門院三回忌御法會ヲ、京都般舟三昧院ニ修ス、……………一六〇

幕府、江戸城主臺及ビ諸口ノ石壘ヲ築カントシ、先弓
頭阿部正之ヲ普請奉行ト爲シ、越後高田城主松平忠昌・
肥後熊本城主加藤忠廣・安藝廣島城主淺野長晟・上野
高崎城主安藤重長等ヲシテ、助役セシム、是日、事始ア
リ、……………一六一

京都四條河原ニ勸進能アリ、……………一七六

十九日 幕府、前下野天明城主佐野信吉ノ罪ヲ許シ、配所信濃松
本ヨリ江戸ニ召還ス、尋デ、信吉、江戸ニ卒ス、……………一七六

廿二日 水無瀬宮法樂和歌御會、……………一八四

伊豫松山城主加藤嘉明、江戸ニ參觀セントシ、京都ニ入
ル、……………一八四

廿四日 皇大神宮々々司河邊辰長・豐受大神宮禰宜度會辰彦等、伊
勢二見浦御鹽殿神人ノ供御懈怠ヲ訴フ、神人等、亦、入
京シテ、志摩鳥羽城主九鬼守隆ノ不法ヲ訴フ、……………一八五

廿五日 北野社法樂和歌御會、……………一九五

コノ後本年中ノ北野社法樂和歌御會、
秀忠、陸奥仙臺城主伊達政宗ニ物ヲ贈リテ、其病ヲ問
フ、……………二〇一

廿九日 秀忠、放鷹ス、尋デ、獲タル鶴等ヲ、出羽久保田城主佐
竹義宣・陸奥仙臺城主伊達政宗等ニ與フ、……………二〇三

是月 山城・大和、伊勢躍流行ス、……………二〇五

目次 元和八年二月……………七

三月

二日 對馬府中城主宗義成、江戸參觀ノ途次、山城伏見ニ著ス、……………二〇八

三日 鬪鷄延引、明日、之ヲ追行ス、……………二〇九

諸社寺上巳ノ節句、

五日 秀忠、下總矢作郷ノ邑主土井正次ヲ遣シテ、伊勢桑名城
主松平^久松、定勝ノ疾ヲ問ハシム、……………二二〇

越前北莊城主松平忠直、江戸ニ赴カントシテ、北莊ヲ發
ス、尋デ、美濃關ヶ原ニ淹留シ、遂ニ國ニ歸ル、……………二二一

六日 中和門院ト共ニ、禁苑ニ花ヲ賞セラル、……………二二三

幕府年寄下總佐倉城主土井利勝ノ京都堀川ノ亭、火災アリ、仍リテ、權大納言轉法輪三條公廣・同日野資勝等、

禁中ニ參内ス、……………二二三

七日 紀伊高野山奥院、火災アリ、燈爐堂・骨堂火ク、尋デ、
再興ス、……………二二四

十五日 廷人等、月食ヲ録ス、……………二二六

伊豫大洲城主加藤貞泰ノ室、江戸ニ移ル、……………二二八

十六日 下野日光山東照社奉幣使發遣日時定、……………二三八

京都ノ商人灰屋紹由歿ス、……………二四一

十八日 甲斐甲府城主徳川忠長ノ江戸城内北丸ノ新亭竣ル、是日、
忠長、之ニ移ル、……………二六〇

廿一日 京都相國寺ノ鹿苑院顯暲^叔、ヲ召シテ、錦繡段ヲ進講セシ
メラル、……………二六一

勅使武家傳奏前内大臣廣橋兼勝・同權大納言三條西實條
等、下野日光山東照社ノ祭儀ニ臨マントシ、江戸ニ之ク、

公家衆・門跡等モ亦、之ニ赴ク、是日、兼勝、京都ヲ發ス、……………二六二

廿五日 女御徳川和子ノ御所ニ臨マセラル、山城醍醐寺三寶院義
演、蜜柑ヲ獻ズ、……………二六八

義演、禁中竝ニ中和門院・女御徳川和子等ニ物ヲ獻ズ、

廿七日 肥前佐賀城主鍋島勝茂、室岡部氏ト共ニ、江戸ニ參觀セ
ントシ、佐賀ヲ發ス、……………二六九

廿八日 幕府、常陸水戸城主徳川頼房ニ歸國ノ暇ヲ與フ、明日、
頼房、江戸ヲ發ス、……………二七三

是月 御所車役人ノ法度ヲ定ム、……………二七四

四月

二日 秀忠ノ世子家光、武藏池上ニ騎乘ス、……………二七五

五日 前大徳寺住持宗印^月岑、寂ス、……………二七五

圖版 月岑宗印畫像

八日 下野日光山東照社ノ徳川家康七回忌祭儀ニ參向ノ爲メ、
公家衆・門跡等、江戸ニ至リ、秀忠ニ謁ス、是日、下野
日光ニ之ク、……………二九〇

九日 美作津山城主森忠政、江戸ニ參觀ス、……………二九五

十一日 丹後宮津城主京極高知病ム、是日、幕府、高知ノ子高廣
ニ暇ヲ與へ、歸國シテ之ヲ看シム、……………二九五

十三日 曼殊院良恕親王ヲシテ、七佛藥師法ヲ禁中ニ修セシメラ
ル、……………二九七

秀忠、下野日光山東照社ノ徳川家康七回忌祭儀ニ臨マン
トシ、是日、江戸ヲ發シ、尋デ、下野日光ニ至ル、諸大
名、扈從ス、……………二九九

十六日 阿波徳島城主蜂須賀千松、忠英、鹽田ニ關スル定書ヲ下ス、……………三二四

十七日 幕府、下野日光山東照社ニ於テ、徳川家康ノ七回忌祭儀ヲ修ス、奉幣使參議西洞院時慶・宣命使同柳原業光及ビ公家衆・門跡等、之ニ臨ム、秀忠竝ニ尾張名古屋城主徳川義直・常陸水戸城主同頼房モ亦、之ニ列ス、……………三二七

十八日 下野日光山東照社ノ徳川家康七回忌祭儀授戒、明日、曼陀羅供、尋デ、法華萬部經ヲ行フ、勅使武家傳奏前内大臣廣橋兼勝・同權大納言三條西實條及ビ權中納言正親町三條實有・梶井最胤親王・妙法院堯然親王・青蓮院尊純・武藏仙波喜多院ノ南光坊天海等、之ニ臨ム、秀忠、之ヲ聽聞ス、……………三三三

筑前福岡城主黒田長政、江戸ノ亭ニ能ヲ張行シ、出羽久保田城主佐竹義宣等ヲ饗ス、……………三三九

二十日 秀忠、遽ニ下野日光ヲ發シ、同國王生ヲ過リ、明日、江戸ニ歸ル、……………三三〇

廿一日 一條兼遐、禁中ニ聯句會ヲ催ス、……………三五五
コノ後本年中ノ一條兼遐ノ禁中聯句會、

勅使武家傳奏前内大臣廣橋兼勝・同權大納言三條西實條、下野日光ヲ發シ、江戸ニ赴ク、……………三五六

秀忠ノ世子家光、播磨姫路城主本多忠政ノ江戸ノ亭ニ移ル、……………三五七

廿七日 出羽久保田城主佐竹義宣、下野日光山東照社ニ參詣ス、安藝廣島城主淺野長晟・土佐高知城主山内忠義・筑後久留米城主有馬豊氏ノ嗣子忠頼等モ亦、之ニ參詣ス、……………三五九

廿八日 勅使武家傳奏前内大臣廣橋兼勝・同權大納言三條西實條

是月 因幡鳥取城主池田幸隆、光政、江戸ニ參觀ス、……………三六二

五月

一日 秀忠、江戸城中ニ能樂ヲ張行シ、公家衆・門跡等ヲ饗ス、……………三六三

三日 幕府、薩摩鹿兒島城主島津家久ヲシテ、在國セシム、是日、幕府奉行人井上正就、書ヲ家久ニ遺リテ、之ヲ賀ス、……………三六四
五日 幕府、端午節供ノ儀アリ、……………三六五

家光、島津家久ノ端午祝儀ニ答フルコト、及ビ諸家ノ端午祝儀贈遺、勅使武家傳奏前内大臣廣橋兼勝・同權大納言三條西實條及ビ公家衆・門跡等、江戸ヲ發シテ、京都ニ歸ル、幕府、

之ニ物ヲ贈ルコト、各、差アリ、……………三六七

土佐高知城主山内忠義、江戸ニ病ム、秀忠、高木正次ヲ、尋デ、又、永井直之ヲ遣ス、……………三七一

九日 穴山梅雪君信、ノ後室見性院武田氏、歿ス、……………三七一

十一日 阿波徳島城主蜂須賀千松、忠英、同國持明院ニ寺領替地ヲ寄進ス、……………三八三

十五日 今宮祭、……………三八五

十七日 山城醍醐寺ニ寶院義演、楓葉ヲ獻ズ、……………三八五

十九日 秀忠、江戸城西丸ニ移ル、……………三八六

是月 是ヨリ先、對馬府中城主宗義成、家臣同智順等ヲ朝鮮ニ遣シ、聘禮ニ答フ、是ニ至リ、智順等、復書・方物ヲ得

テ歸ル、……………三八九

秀忠、伊勢安濃津城主藤堂高虎ノ江戸ノ亭ニ臨ム、……………三九二

六月

七日 祇園御靈會、……………三九四

十四日 所司代板倉重宗、江戸ヨリ京都ニ歸ル、……………三九四

十六日 御嘉定、……………三九五

女御徳川和子、御深曾木ノ儀アリ、……………三九五

二條康道脇塞

十八日 梶井最胤親王、攝津有馬温泉ニ入湯セララル、……………三九八

(目次終)

大日本史料

第十二編之四十四

後水尾天皇

元和八年壬戌

正月小 盡 戊戌朔

一日、戊戌四方拜・節會アリ、

〔公卿補任〕二十

權大納言正二位藤同資胤、五十元日内辨、
(中御門)

〔資勝卿記〕

元和七年十二月卅日、丁酉、晴、今日早々、元日節會可爲外辨之旨、
(正親町季俊)頭中將一通來、内辨
中御門大納言由、申來候也、資胤略

〔御湯殿上日記〕○天理圖書館所藏

元和八年正月一日

内辨 外辨

元和八年正月一日

二

四方拜

正月一日、はるく、雪ふる、御ひるにて御てらすまいる、御きやうすいにならします、こくけんのかちんまいる、四はうはいあり、御ふくゑもんのすけ、よし、御まへしやうそく中の御かど大納言（正親町季俊）、すけたね、御れん御きよ頭中將（勸修寺經廣）、あつそん、御さうかい權左少辨（堀河康胤）、ひろ、きよけんほり川中將（堀河康胤）、あつそん、しそくいし〜三てうに見えたり、ひしはなひらにて御いわぬまいる、女御の御かた御しやうはん也、女院の御所より御たる五かう五かまいる、女御のかたよりも五色十かまいる、かうたい院殿より御たる代五百疋まいる、女院の御所へ銀子十枚まいる、御つかい長はし也、女御の御かたへならします、銀子十枚まいらせらるゝ、（二條兼光）、八てう殿（八條宮智仁親王）、たかつかさ大納言殿御禮になる、（伏見宮貞清親王）、ふしみ殿（伏見宮貞清親王）もなる、つねの御所にて御たいめん有、こんゑ殿より御たちおりかみまいる、一てう殿・八條殿・ふしみ殿・たかつかさ大納言殿よりハ御たるまいる、御さか月二こんまいる、二こんめに御てんしやくにてまいらせらるゝ、女中へハこんゑ殿御しやくにて御とをり有、夕かた御さかつき三こんまいる、御こわく御もまいる、女中おとこたちおとをりあり、御うけとり上らふ・なかハし・いよ殿、大御ちの人よりまいる、御さかつき二こんまいる、御うけとりのしゆう御さか月いたゝきあり、御こわく御上らふへすへる、あさかれるこんすけ殿・中のないし・いよ殿、御すわりあり、せ

節會

出御ナン

ちゑあり、しゆつきよハなし、ふ行頭中將（すへと）とし、内辨、

〔涼源院記〕三

内侍所御神樂例ノ如シ

正月元日、戊戌、雨降、辰剋時分、夕雨降出、寅剋朝參、先參内侍所、御神樂如例年也、御神前御盃予頂戴之、外ニ又一ツ予不存候内ニ、誰とも不知持來候也、一段ト神慮ニ被加爵之義、珍重之義候間、則令懷中候也、中御門大納言父子三人・予父子三人（資勝・光慶・弘宣）・四辻中納言（高倉永慶）・藤右衛門佐・柳原辨（業光）・東坊城等參會候也、則參内候て、四方拜御供仕候也、

四方拜雨儀

今日四方拜雨儀、奉行勸修寺辨經廣、御劍役飛鳥井中將雅胤朝臣、御裾御簾頭中將季俊朝臣、重役御草鞋頭辨光資朝臣、脂燭之衆七人、出御階間、御拜長橋也、内之ノ番所にてノ御祝義如例年、則退出、○中略、廣橋總光・同兼賢等、年頭、相公節會之外辨にて、愚亭ニテ裝束、三條三位中將亦裝束候也、廣橋亞相も禮ニ御出候也、予も外辨之裝束候て參候由候也、

元日節會

元日節會、雨儀、出御、内辨中御門大納言、奉行頭中將季俊朝臣、外辨予・三條中納言（實有）・阿野中納言（實顯）・清閑寺中納言（共房）・右大辨宰相（兼賢）・三條三位中將實秀卿（少納言長坊城）・維朝臣、次將、（マ、）脂燭、（マ、）御裾、（關白）殿、剋限、（戊剋）先内辨著輿座、（資胤卿、元日節會初度）次奉行、（季俊）朝臣、至輿座、仰内辨、次内辨移端座、次諸卿

元和八年正月一日

三

著仗座、予、宣仁門入時、南ノ方ニ副テ、右ノ足ヨリ入、出時ハ北ニ副テ、右ノ足ヨリ出陣ノ座ニ昇時、左ノ足、下時ハ右ノ足ヨリ下る也。阿野中納言實顯卿・左大辨宰相兼賢卿・正親町三條中納言實有卿・清閑寺中納言共房卿・三條三位中將實秀卿著殿上座、

國栖
外任奏

次召官人、仰軾沓、次以官人召外記大外記之參進、經柱ノ内、問諸司・國栖・外任奏、次外任奏モテ參レト仰、次外記持參外任奏、今度少外記、入筥、有禮紙、内辨笏置於奥方、引寄筥、少副袖開禮紙、置筥底乍管内覽之、高不取上、見了、如元卷之、加禮紙、置之、取笏、外記退、次以官人、召奉行職事、頭中將著軾、雨儀、經柱内裾ヲカク、以左手筥ヲ押出、職事ニ氣色奏、諸司ノ奏ハ内侍所ニト仰ス、職退事、

次職事奏了、返下外任奏、内辨置笏、引寄筥、上覽、内辨カタネ申時、職事仰云、列ニ、辨脱カ内微唯、如元卷之、取笏内職事退、

次内辨召官人、召外記、今度少外記歟、返下外任奏、仰云、列ニ候ハシメヨ、外記退、

次内辨、外辨ノ上首ニ目、次下臈ヨリ起座、

次内辨起座、宣仁門ノ外於陣後、著靴、

次諸卿出、外辨諸司已下幄ニ著了、外辨ノ上首召之使、二音、予史外記召セト仰、史來時、

出御

仰云、國栖酒上也、次申候由、次ニ候ハシメヨ、次式ノ筥ヲ下セト仰、其時式ノ筥ニ手ヲカケテ退、次地下役人幄ヲ起、幄へ中納言御酒を被持候也、案以史當外記歟、

次之將引陣、日花門ノ下、花門ノ下、

天皇出御、次内辨著宜陽殿兀子、今度次將不引陣已前ニ被著兀子了、内侍臨西檻、次内辨起座、深揖、内侍歸入ル、揖而更起兀子、南へ練行、東ニ向テ一揖、良ニ向テ二拜、宜陽殿壇上ヲ北へ練、作合ニテ練止、軒廊中央ノ間ヲ入、南ニ向カヘリミル也、其後堂上、

開門

次開門、陣官人申子細、

次圍司著、イシハ罷リヨ、官人イシ著座ト答、次召舍人、二音、少納言就版、次宣、大夫達召せ、尋常之版、月花門ノ軒下、北向ニ著也、

此間諸卿月花門ノ西ノ軒ノ下、北上東面ニ雁列、無揖、次少納言稱唯、出召、第一ノ外辨ニ揖ス、則答揖、

立標

次諸卿參列、立標宜陽殿壇上、北上東面、異位重行、有揖、正二位大納言ニ、從二位中納言ヲメリテ立、大納言ノ後三位宰相立標也、次官人公卿御參列ト申、

元和八年正月一日

次内辨宣云、敷尹、

次造酒正授空蓋於外辨上首退、此時群臣再拜、

又造酒正來時又再拜、此時蓋ヲ造酒正ニ返テ、後一拜ニ、上首乍居一拜ヲ合了、

次外辨著堂上座、宜陽殿壇上軒下ヲ經テ、軒廊西第一ノ間ヲ入、階下有揖上ル時ハ南ニ副下時ハ北ニ副也

次内辨御臺盤ノ把トレヤト仰、仰詞一段トヒキシ、頭中將内辨一(忠)今度采女遅ニナリ、ニテ度々奉行ツケシラスル也

次仰云、コセンハマイリヌルカ、奉行告知

次仰云、次第ノヲモノハマイリヌルカ、奉行采女ニ告、又マイリテ後内辨ニ告來也、度々如此

次仰云、昆屯ハマイリヌルカ、

次賜臣下昆屯、仰參議、詞左ノチカキマモリノツカサ藤原朝臣昆屯モヨヲサシメヨ、三位中將下殿ノ催、内豎役之

次内辨候天氣起座、御帳ノ方ニ向敬折、(露下同シ)諸卿立座前敬折、御箸鳴、臣下應之、箸ヲ立、

次羹、詞、ヲアツモノハ、同前、次御飯御物、詞、ヲモハマシ所ハマイ同前、次進物所、御厨子所、詞、進物

次賜臣下飯汁物、仰三如昆屯之儀、下殿催之、詞、臣下ハ

次内辨候天氣、如昆屯ノ義、

飯汁物ヲ賜

餛飩ヲ賜

御箸鳴

一獻

次御箸鳴、臣下應之、箸ヒヲ立、

次三節、詞、三節ハマイリヌルカ、酒ノカスノヤウナルモノヲ供ス、眞ハ甘酒ノ由也

次供一獻、詞、一コンハマ參由告來、

次賜臣下、詞、左ノチカキマモリノツカサ藤原朝臣、臣下ニ一獻、乍座

參議内豎ヲ召、一コン催サシメト仰ルカ、チウサハ、二音、内豎來、則仰ス、

造酒正端、内豎與、

次國栖、内辨下殿ノ催之、

次二獻、如一獻也、

次御酒勅使内辨召參木、左ノチカキマモリノツカサ藤原朝臣實秀卿

先内辨起座、立御帳ノ方ニ向敬折ノ、マチキンタチニ御酒タマハン、勅許之後(禮)傲唯、如

元居兀子、召三木、マチキンタチニ御酒給ヘ、ミキタウベ、三木唯、下殿、取

交名、召仰如例、

次三獻、如一獻、

次賜臣下、仰三木、

元和八年正月一日

二獻

御酒勅使

三獻

立樂
宣命

次立樂、内辨下殿ノ催之吹調子、次奏二曲、次内辨吹調子ヲ、シハシ聞、堂上立樂、了テ後、下殿ノ著陣、召内記、見宣命、召外記、已見參祿法了、宣命・見參祿法挿文杖、持外記、堂上階下ニテ文杖を取ル也、北ノ妻戸ニ入、北ノ間ヲ東へ行、屏風にソイ、内侍ニツケテ奏ス、被返下時請取、經本路テ、又下殿ノ、杖ヲ外記ニ返し、堂上ノ、著几子、奏聞ノ間、北ノ障子ニソウテ、妻戸ノトヲリマテシリソキ立也、

次召參木、左大辨 兼賢卿、宣命・見參祿法ヲ給、則下殿シテ作合ノ邊ニ佇立、
次内辨已下之殿、軒廊ニ異位重行、北上東面、

正二位大納言ノ列ニ、從二位中納言ヲメリテ立、三位中將大納言ノ後ニ立、

群臣舞踏

宣命ノ版、軒廊東第一ノ間、次宣命使版ニ著、一揖シテ笏ヲ指、宣命ヲ披、右ヘカタルヌル時、宣制一段、群臣再拜、又一段、群臣拜舞、宣命使後ノ拜ヘ一揖ヲ合、

次宣命使右ヘ廻歸、又作合佇立、

次内辨已下堂上、離列ノ 揖有、

入御

次入御、諸卿立座前敬折、次内辨以下之殿ノ、向祿所退出候也、祿所月花門ノ下也、祿所奉行南ニ長障子ニ腰ヲ懸、召使北薦之上ニテ、緒ヲ笏カケテ後、良ニ向一揖ノ退出候也、

元日節會ノ
觸

〔時慶卿記〕 五十

元和七年十二月廿七日、天晴、一元日節會ノ觸、頭中將ヨリ在之加奉、

廿八日、天晴、一陽明(近衛信尋) (三條西)ヘ實隆卿ノ文三通懸御目、又予外辨ニ元日可參歟否ノ義御尋候、所

勞ノ旨申入、

卅日、天晴、一小内記禮ニ門迄來、節會元日ノ内辨ハ中御門由候、予方ヘ元日ノ一通ハ頭

中將ヨリ取返ニ來、

〔孝亮宿禰日次記〕 七

正月小一日、戊戌、雪降、四方拜、出御、奉行權左少辨(勸修寺)經廣、御劔飛鳥井中將、(堀川)脂燭康胤

朝臣・(高倉)副良朝臣・(清水谷)忠定・(小倉)公根・(花園)公久・(油小路)隆經・(藏人)小槻忠利、

元日節會、(雨儀)出御有之、御裾關白殿、(九條忠榮)脂燭兼俊朝臣・(竹内)孝治朝臣・(團)基音朝臣・(西坊城) (河津)遂長・(鷹尾)基秀・(泰吉)倉橋差次藏人、

隆量・(兼尾)倉橋差次藏人、

内辨中御門大納言(資胤)卿・外辨日野大納言(資勝)卿・正親町三條中納言(實有)卿・阿野中納言(實顯)卿・

清閑寺中納言(共房)卿・廣橋宰相(兼賢卿、宣命)使・(三條)轉法輪三位中將(實秀卿)・(東坊城)少納言長維朝臣、次將爲

賴朝臣・元親朝臣・親顯朝臣・(季福)爲尙・高有、奉行頭中將季俊朝臣、四位大外記、

内辨
外辨
次將

元日節會
雨儀

元和八年正月一日

一〇

三節會下行
米

師生朝臣、左大史孝亮(小徳)、少外記生職、右少史亮春、少内記安倍盛勝、内豎右康、史生孝昌、
官掌左氏行・同氏房、右(マ)、召使生行、亮行、主殿兩大夫、官人兩人、櫛田將監、戸嶋、
二月十一日、丁丑、晴、○中略、度會辰彦加級ノコトニカ、ル、本月十一日神宮奏事始ノ條ニ收ム、節會訴訟大概相濟、諸司參傳
奏、申御禮云々、○中略、二條康道方違ノコトニカ、ル、年末雜載信仰・土俗ノ條ニ收ム、

三節會御下行米之事

合二石者、官務殿、
中輔大輔、
務力

右槌ニ御渡可有之、

二月十一日

大外記

清水左衛門尉

○公家衆・門跡等、年頭祝儀ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔涼源院記〕三

正月元日、戊戌、雨降、辰刻時分、○中略、禁中四方拜、元日節會、
夕雨降出、等ノコトニカ、ル、上ニ收ム、晚ニ中納言兩人・侍從禮ニ來
臨也、中納言ヨリ三種三荷、若上ヨリ杉原五束、廣橋(總光)亞相ヨリ兩種二ツ、同相公ヨリ兩種
二ツ、○下略

年玉

野間玄琢
能通

三日、庚子、晴、○中略、德や道有參候也、次ニ侍共如例年盃ヲタヘサセ申候也、中納言所へ參
候也、藤向、又三條殿若上も同心申候也、中納言へ三か三種、若上ノ御方へ同三種三か也、
藤向ノ年頭内衆へノ遣申候物、別ニ日記有、先三ツ盞、其後御カン吸物ニテ御酒給、令沈
醉候也、其後夜ニ入、三條中將殿へ禮ニ參候也、中納言も跡ヲ禮ニ被參候也、サウニ吸物
ニテ御酒有、若上へ年タマワスレ候て、持合候金子一分マイラセ申候也、何も年玉共別ニ
日記有、

四日、辛丑、雪霰降、廣橋前内府へ三か三種遣申候、同大納言殿、同宰相殿へ二か二種遣
申、書狀遣候也、晚ニ前内府ヨリ樽返有、三か三種、寶慈院來臨也、中納言へ禮遣申候、
若上ノ御方へ杉原十帖・綿卅は、中納言兩種、指樽一ケ、玄琢(野間)法眼年頭ニ延齡丹二貝・金
ノモミハクノ扇子二本持參、能通禮ニ來候也、

五日、壬寅、晴、近衛殿へ御禮、侍從同道ニテ伺公、御參内にて新藤三郎左衛門ニ申置、
歸候也、(兼退)一條殿へ中納言・侍從同道申候、是も御參内にて、申置候也、(兼道)二條殿へも兩人同
道申候、御對面、御盞有、(九條忠榮)關白殿へも同道申、則御對面有、(岩倉具兼)木工殿も伺公にて候、御吸物
にて御盞頂戴仕、退出候也、(聖秀)曇花院殿へ御樽進上候處ニ、舊冬ヨリ御咳氣ニ而、靜ニ伺公

元和八年正月一日

一一

元和八年正月一日

一一一

可仕由也、今日朝飯過て、大福庵禮ニ來臨也、扇子五本持參候也、藤向へ手燭ニ、扇子持參候也、光西堂扇子上、五本箱ニ入持參、申置被歸候也、

六日、癸卯、晴、○中略、公家衆・門跡以下參内シテ、歳首ヲ賀シ奉ルコトニカ、ル、本月九日ノ條ニ收ム、曇花院殿ヨリ御樽拜領、御文

御返事申入候也、檜山宮内、出雲名代ニ禮ニ來候也、手燭一ツ持參候也、奈良東北院殿ヨ

リ大門様御祈禱之御禮、御筆・兩樽參候、則御初尾銀子十六匁遣申候也、拙子所へ油煙五

挺給候、返ニハ木棉踏皮三足遣申候也、ゑかき清十郎短冊五枚・色紙五枚持參、主水扇子

五本、冷泉中將殿(爲類)より三色三ツ來申候也、

七日、甲辰、雨降、○中略女御様より御樽三ツ三種拜領、權中納言殿より御文有、二ツ橋六

兵へと申者御使也、則令對面、御酒申、御返事申候也、○下略、白馬節會ノコトニカ、ル、本月七日ノ條ニ收ム、

八日、乙巳、巳刻迄雨降也、相國寺暁長老(所叙顯暁)禮ニ來臨也、杉原十帖・扇子五本持參、海藏院

筆三對持參、雜煎吸物にて御酒を申候也、

女院御所ヨリ御樽三か三種拜領、則御使ニ對面申、盞を申、歸申候也、飛鳥井中將殿(雅也)より

女御様へ御樽之事尋來、予毎年御番始ニ進上之由返事申候也、菊亭殿(今出川喜季)へ一樽遣申候也、

九日、丙午、晴、○中略、公家衆・門跡以下參内シテ、歳首ヲ賀シ奉ルコトニカ、ル、本月九日ノ條ニ收ム、多賀不動院より年頭ニ使僧上候

繪師清十郎

小倉寂如

也、御札、樽代百疋、奈良松林院殿ヨリ年頭ニ兩種樽一上申候也、夜ニ入、大門様より御

樽三か三種拜領、了甫御使、則自分ノ禮ニ扇子五本トイも扇五本持參候也、

十日、丁未、晴、雪霰微ニ降也、小倉寂如禮ニ來臨、杉原十帖・扇子五本持參、令對面、雜

煎吸物にて祝儀申候也、日野西殿禮來臨、御樽兩種二か、吸物御酒ヲ申候也、菊亭殿ヨリ

結樽一か三種到來、今日松林院殿昨日之返禮申候也、扇子廿本祝儀ニ遣申候也、安樂光院

扇子五本持參、中島主水、大門様より江戸への御書持參也、廣前内府よりも江戸への書狀

到來、暁長老より養福院さま唯心様(日野輝賢)へ御年筮今朝見せに給候也、披見候て則返申候、晚ニ

又江戸への書狀・七度燒之鹽持給候也、すゝの棗ニ五ツ取寄候也、重而使、中納言より江

戸へ書狀共來候也、

十一日、戊申、晴、○中略、太元御修法ノコトニ、南御所隨花院禮ニ來臨、持參三色二ヶ也、カ、ル、本月八日ノ條ニ收ム、

十二日、己酉、晴、弓氣多攝津守(昌吉)へ禮ニ參候也、樽代百疋、中納言同道申候、留守にて、

申置候也、夜前勸修寺間ノ壁を破り、赤犬一疋來、惡事共仕旨、椽ノ下を狩出し、繩ヲカ

ケ候へとも、カイ道追放候也、三條之玉や和泉禮ニ、スキヤコトク一ツ持參候也、三條殿

若上來臨候也、及晚歸申候也、對面にて歸申候也、○下略

元和八年正月一日

一一三

十三日、庚戌、辰刻ヨリ雨降、多賀へ返札申候也、年頭之通杉原十帖・油煙五挺遣申候、同宿ニ扇子十本、下ノ衆ニ同三本遣申候也、三條殿若上裏にて積善院振舞ニ付、若上も御ヨヒ候付て、積善院へ返談合來候、皮踏皮二足遣申候也、晚中納言來臨候也、

十四日、辛亥、朝曇、少雨ソ、キ、晴候也、午刻以後雨ソ、ク也、瑞花院へ樽返遣申候也、

○下略、和歌御會始ノコトニカ、ル、本月十九日ノ條ニ收ム、

廿四日、辛酉、晴、○中略、法樂和歌ノコトニカ、堺御姫より年頭ニ人上り申候、御姫ヨリシユロハウキ二本、長兵へとのより木棉をひこそく、

廿六日、癸亥、曇、微之雨降、晚ニ晴、大福庵ヨリ高木宗本小刀一本・埋忠一本、左大夫

ニ持給候、則禮狀を遣申候也、晚ニ大福庵へ年頭ニ參候也、福庵へ樽代百疋、左大夫、壽

錢ニ木棉たび一足ソ、遣申候、則内ニ被居候て、雜煎ニテ御酒有、令沈醉罷歸候也、

二月八日、甲戌、晴、午剋過雨降、晚晴、○中略、了甫被參候間、振舞候而返申候也、直ニ三

條殿へ參候也、又夜ニ入、相國寺暁長老へ年頭之禮ニ參候也、濃州紙三束・大鈴一雙、長

老へ持參、玄西堂へ同紙二束、海藏院へ扇子五本、久次同五本遣候也、

三月五日、辛丑、晴、對州へ年頭書狀遣申候、中納言所ヨリ薦ツ、ミを、此方ヨリ三ツ、

(宗義成)

以上四ツ足立所へ持遣候也、又彦山へ返札年頭之返書遣申候也、木棉踏皮二足、こさまの紐付申候、

十二日、戊申、○中略、對州御袋ヨリノ年頭之祝儀、松尾七右衛門江戸へ持て下候とて、今日

江戸ヨリ上申候也、御袋ヨリ方糸絹三端、

〔時慶卿記〕五十

元和七年十二月卅日、天晴、一元日所之へ御樽ノ目錄ヲ書認候、

〔孝亮宿禰日次記〕七

正月三日、庚子、晴、所之參年始御禮、

〔義演准后日記〕二十

正月朔日、雪、寅初剋沐浴、次洗手、次著淨衣、次護身法、次入道場、次後夜念誦作法、

次愛染護摩兩座相續、但去夜開白、當流故實也、次歡喜天浴油兩座相續、次理趣三昧、新

門主、其外金剛王院賢昌禪師、演光律師、演慶、一、定順法師等助音、次仁王經一部讀誦、

諸神法施、次出道場、於常御所、早參祇人不斷衆對面、則餅受用、次盃、不殘召出被下之、

依爲内之、下様ノ者迄召出、盃賜之、近年嘉例也、次齋、新門主并金剛王院相伴、次拜殿

出仕、乘手輿、新門主ニハ荷輿也、力者前行、坊官侍數多共奉、笠袋持等如例、扈從金剛王院諸衆、動座如恆、新門主ニハ構半疊、御著、悉重衣也、供養法演賀法印、調聲定増法師、新調聲也、聲之也、山上ハ三ヶ日如說、於山下者聲之先例也、准后御記其通也、次例時、尤報入逢鐘後可行事也、雖然近年以略儀相續、後年可改之耳、次入堂、良家不殘入堂也、學侶ハ拜殿ニテ節供アリ、仍相殘傾數盃、嘉儀云々、次節供、予・新門主著御座、松橋僧(楚圓)正附弟兄(友)、理性院大僧都・報恩院、金剛王院禪師相伴、三獻如嘉例、出世演賀法印、於下壇相伴、次開經藏、報恩院僧正憲御筆秘抄寶生尊帖第一披覽、代之慶儀也、○中略、盜ノ三寶院ニ入りシコトニカ、ル、初夜護摩如常、年末雜載法制ノ條ニ收ム、

二日、晴、後夜沐浴已下勤行無異、拜殿出仕、門跡節供等如昨日、但理性院・報恩院故障、今日三盃、召出不殘賜之、嘉例也、至披官悉出仕、皆似相ノ音物持參申、召出、於常御所盃被下之、試筆書大日經七卷之文、

三日、晴、勤行三ヶ日更無異、拜殿出仕如常、節供、良家輩悉出仕、智積院來、召出一獻被下之、三ヶ日大師御膳進之、手自奉供之、

四日、晴、後夜沐浴略之、後夜念誦并護摩兩座・浴油兩座・理趣三昧等如例、拜殿出仕無之、○下略

試筆

片桐貞隆

五日、護摩天供如昨日、智積院後住長存爲禮來、杉原十帖・扇、(兼定)新門へ扇箱ニ入進上、二獻賜之、昨日片桐主膳正樽遣之、初寅鞍馬詣群集云々、

六日、晴、勤行如昨日全無異、尊師御精進供手自奉供之、錫杖理趣三昧、新門并出世共行、當郷番匠共不殘列參、御樽進上、酒傾數盃及音曲嘉例也、弥皇寺留主來、扇進上、於御次一獻被下之、新門御對面盃賜之、

大住村・笠取・西岡・上之野村庄屋來、振舞及數盃珍重々々、

飯田同名共御禮、盃賜之、長尾宮修正學侶出仕饗膳、御陵保ヨリ出之、每役儀也、○下略、千秋萬歲ノコトニカ、ル、本月五日ノ條ニ收ム、

七日、愛護摩并歡喜天浴油今曉結願、御供養御星共納箱返進、用意羹服、出世坊官悉出仕賞翫、團隨門・觀門・松橋・理性院遣之、(觀助)

十五日、粥祝儀、出世坊官以下不殘出仕賞翫、次節供如三ヶ日、○下略、盜ノ三寶院ニ入りシコトニカ、ル、年末雜載法制ノ條ニ收ム、

廿四日、從二條殿御使青銅二百疋・椎茸五袋、年頭御返禮、并新門へ引合十帖・扇二本敷、愛宕護參詣、群集如例云々、(ツ)

粥祝儀

二月六日、寶輪院來、杉原十帖・扇進上、新門へ扇一包進上、年頭ノ由也、

〔鹿苑日録〕二十

正月元日、自曉雪降、及晨猶未已、祝如常、又赴慈照有祝（有節瑞保）、當院勤行如常、赴常住勤行、祝聖、開山諷經、上堂、下座禮、諸堂燒香、日中大般若、紛冗不記、禮者賀資亦不錄、在別紙、後又効之、

八日 齋了、赴禮、赴日亞相（日野實勝）、呈杉原壹束・扇子二本、奈良雜紙一（束力）呈于內儀、次赴日黃門、

呈杉原一束・扇子二本、杉原一束呈于內儀、香包二ヶ呈于侍中殿（日野弘光）、帶壹筋呈前內府公、帶

壹筋・盃二ヶ呈坊城殿（後光）、帶一筋呈于廣橋亞相公、帶壹筋呈于日野西殿（總盛）、帶壹筋呈于廣宰相

殿、間錯一ヶ呈于平松殿、到片桐主膳正殿、呈帶壹筋、對談、出盃有羹而伸祝、

九日、南禪正（英岳景洪）因庵光駕、賜香合壹ヶ、留而勸晚炊點茶、道有來、獻染付鉢、留而勸晚炊、

東福龍眠（合老）剛外和尚來臨、賜木綿踏皮一足、半井三位賜杉原一束・龍腦丸五十粒、

十日、松岩舜岳（玄光）西庵來臨、惠黃紙一束・踏皮一足、日黃門公來儀、賜踏皮五足、侍中殿賜

濃紙五束、御內儀惠兩樽・肴一折、

十二日、常光院（友竹紹益）・靈洞院來駕、赴富春之次也、常光和尚惠唐紙十枚（見還去）・五明五本、大

令柔剛外
半井成忠
舜岳玄光

寧院來儀、賜青帶壹筋、

織田有樂遺
族

十三日、齋了赴東福之次、先到南禪、赴正因庵伸禮、呈履一足、到大寧、呈皮踏皮一足・

手燭臺一ヶ、到聽松院、空手伸禮而已、到慈聖院（周求）再叔西堂、還五明五本、皮踏皮一足呈久

右衛門、出南禪而赴有樂老（平出政秀女）內儀并孫御猿公、白皮踏皮一足呈內儀、香包貳ヶ呈御猿、々々

對面、出盃有吸物、然而赴惠日、先到玉峯、遣帶壹筋・扇子二柄、到雲裔、遣帶壹筋・便

面一柄（御影）、到龍眠和尚（剛外合老）、呈木綿踏皮一足・墨一挺、留而出盃、見出示拈香法語、次到曹

源（禮格）越溪和尚、呈唐紙十枚、赴南昌棠陰、呈帶壹筋、木綿踏皮一足遣堅首座、帶壹筋呈湘雪

西庵、香合一ヶ呈善惠侍者、木綿踏皮一足呈宿坊正覺・聃叔（玄下同之）、然而有晚炊、々々以後

赴宿忌、燒香院主、行道位頭（瑞保）有節老師引之、宿忌了、則令袈裟、留而以温麵吸物有酒、宿

忌以後嚙金來、黃衣銀子百目、聽叫三十目、下物鳥目三十疋也、西堂銀子二枚、下物二百

紫衣銀子三枚云々、宿坊入夜設藥石、午後雨降、入夜浪々不罷、

十七日、到松岩寺伸禮、呈濃紙一束・襪子一備、到俊甫西庵、呈盃一ヶ・筆三對、午刻到

一閑翁、呈杉原一束・帶壹筋、正覺・聃叔・云首座來臨、惠扇子五本、

廿五日、廣橋大納言殿賜雜紙三束・扇子五本、宰相殿賜木綿踏皮一足・扇子十本、

元和八年正月一日

二〇

廿六日、○中略午刻詣玉林院月岑和尚伸禮、呈引合壹束、木綿踏皮一足遣吉首座、和尚雖病中、對談丁寧、強爲挽留、及黃昏而歸軒、○月岑宗印寂スルコト、四月五日ノ條ニ見ユ、

〔舜舊記〕二十

正月小一日、戊戌、大雪降、早且行水、入鹽、當院勤行祝聖、予・瑛藏主動之如常、

次當社齋場所參詣、乘輿、神供之時分神樂巫女兩人、今度始而在所者爲本所役者申付也、

次唯神院殿・吉田兼右豐神院殿參詣祈念祝之、

次當社春日大明神參詣、心中祈念祝之、神龍大明神令祈念、依雪麓祝之、今度社頭御橋已

下再與繁昌萬喜也、次當庵へ禮衆、鈴鹿采女佑、納豆一ツ、左京助、扇三、九内、二、小

三郎、筆二對、小二郎、扇二、甚三郎、豆腐五、小介、扇三、彌兵衛、串柿一把、各、扇

一本宛、也、修理豆腐十丁、來也、

二日、晴、豐國大明神へ以名代令參詣也、

次忌日豐神院殿、次萩原兼從へ罷、三十疋、御内義へ指樽一荷・肴・豆腐・牛房、局へ圓柿

二袋、御大へ筆三對、鈴鹿藤四郎、差帶萬三郎、扇二、左衛門佐、同、其外内衆、扇二本

ツ、遣之、次法泉院殿、杉原十帖・水引五十把、次瑛藏主令同道、萩原殿へ扇五、御女中、

引合十帖、法泉院殿へ引合申狀之由也、次神樂加平次油煙一包、持來也、次壽等來、鏡餅二、

錫雙、朝食令相伴也、次相模扇二、來也、

次當庵ヨリ禮返ニ久次ヲ遣、鈴鹿采女佑、扇五、鈴鹿伊豆、濱名納豆、左京助、串柿一把、

小三郎、扇三、小二郎同、遣也、次淨勝院殿へ指樽一荷・肴・串柿二把・豆腐令持參也、次

予禮返ニ修理、錫雙・肴、左京助母方へ錫雙・肴添遣之由也、次水口之御厨へ圓柿二袋令持

參也、

三日、晴、早且勤行如常、行水、大眼藥、

次宗源行事一座執行、次常齋也、次吉井久内柿二把・扇二、禮ニ來、依指相ツキハニテ酒

ニテ祝也、次藤岡勝左衛門串柿一把持來也、次豐國之下被官共彦兵衛・源七兩人來也、年

玉持來也、羹酒羞、次粟田口之豆腐屋十丁、持來也、次萩原兼從來、五十疋、女中ヨリ杉原

十帖、藤四郎、盃三ツ、萬三郎、扇二、左衛門佐、八、三條衣棚町勝遊、トク、ピコン次與左

衛門、白砂糖、神左衛門、扇一、次壽命院奉公夏女、柿一把、萩原へ如例年羹御酒已下羞、

次白川宗貞女房、依煩脉能也、次善右衛門、白箸五十、久内兄、持來也、

四日、晴、於當庵羹餅御酒、瑛藏主同小者已下彌兵衛來、藏主依指相今朝祝儀也、次智福

元和八年正月一日

二一

元和八年正月一日

二二

鞍馬寺

院之本尊虛空藏大菩薩へ三拜禮也、次サン物屋久右衛門、柿一把、塵斗桐一ツ、持來也、九條之甚四郎、扇二、次午刻微雪、五日、微雪降、例年之被官共ニ節食、〔藏脱カ〕瑛主方申付也、次鞍馬寺へ參詣也、輿人足五人本所へ申入也、次四條又兵衛來、扇三、八幡之又右衛門來、牛房一把、休齋ヨリ名代也、清次入來、扇三、次五條之神明之宮内少輔、茶批抄一ツ・扇二、右馬助、扇二、次兩替町九兵衛、砂糖白、次豊後姉來、小盃一、持來也、次於當院晚食節用意也、予罷也、次祇園在所理右衛門、扇三本、持來也、

〔古澗慈稽和尚口水集〕上

元旦、祝香、元和第八壬戌、

陳皇太子丁正月設千僧會、新年佛法益昌、賈至舍人於早晨朝太明宮、祇今聖化無極、闔國懷万民和樂之惠、四海迎三元下降之辰、

索話

新歲緣髮柳、垂之櫛東風、万花亦至來日、枝之葉之盡皆同、○脱ア
ルカ、

結座

建仁寺元旦
上堂住持慈
稽ノ法語

正月梨花、時節難論、

元日芍藥爲之作累葉、奇夏木栖爲之作同根、

善哉々々、抽長老枝則帶甘露雨、希有々々、結自然果則茂清淨園、

千億化身梅花亦、昨夜阻深雪臥前村、海岸孤絕處不得到、則雖有觀音老人堅坐底山巒、只

這一抹香雪、目擊道存者也、這個且置、今日雞旦祝贊一句、如何宣言去、聖恩沾万里、喜

色動千門、又曰、言未訖、床角木上人出來曰、今日山河大地、卉木叢林、逢聖代雨露繁、

因祝贊一句宣言云、三草一木普潤其恩、

〔大谷本願寺日記〕○山城

元和八年壬戌年、正月二日、松拍子、

〔華頂要略〕六十六御吉書 多武峯緣起

九野安泰之春、八埏清平之時、慶賀雖事舊候幸甚々々、抑公武之崇敬、偏仰神威之加護、〔編素カ〕紹練之倚賴、倍添社中之榮光、自他之祝篇、非所覃筆耕之由、可相觸滿山者也、

正月十一日元和同八年

〔春日社記錄〕

○大和慶長廿乙卯年已來檀那之記

元和八年壬戌正月以來之記

元和八年正月一日

一三三

烏丸本願寺
松拍子

多武峯吉書

興福寺大乘
院信尊

元和八年正月一日

二四

〔正月〕
二十一日、大乘院様御社參之式如例之、
一十七日、御祈禱、日中飯二伺公了、延通・時昌・祐長・延倫・延種御能有之、金剛新太郎沙汰之、四番見物了、

〔高野春秋〕 十四

元和八年壬戌春正月朔日、第二百十七世寺務檢校執行法印大和尚位俊圭朝拜、

幕府、歳首ノ儀アリ、

〔東武實錄〕 八下

正月朔日、江戸ノ城、歳旦ノ賀儀例ノ如シ、

〔本光國師日記〕 三十

一正月三日、公方様へ御禮申上ル、

〔梅津政景日記〕 十一

同二日、一如毎年、御本丸へ御出仕有、ほいにて御供仕候、一天氣吉、
○義宣、コノ時江戸ニ在リ、

正月三日、一昨日御禮ありきの御供致候へ、足筋はり候て、立居不自由の間、御前へも不罷出候、一天氣よし、

高野山

金地院崇傳

佐竹義宣江
戸城ニ參賀
ス
梅津政景扨
從ス

上杉景勝

徳川義直同
頼宣ハ在國
徳川頼房
松平忠明
松平忠昌

諸大名

同五日、〔家光〕一大納言様へ御出仕被成候、ほいにて御供仕候、一天氣吉、
正月六日、〔徳川忠長〕一二ノ丸宰相様へひる御出仕被成候、御進上御太刀折帛持御供致候、御太刀折帛不納、一天氣吉、
〔上杉年譜〕 五十
景勝三十
同八年壬戌春正月、公江府ニ在テ、新陽ヲ迎へ玉ヒテ、恆例ノ如ク、登城有テ、賀詞ヲ宣玉フ、

〔参考〕

〔元和年録〕 坤

正月朔日、大雪降、當年者尾張殿・紀伊殿御在國、水戸殿計御在江戸之間、明六ツ水戸殿御登城、其次松平下野守殿・同伊豫守殿御出仕、其次御譜代大名衆也、

早天水戸殿御出仕、〔御〕御かり於上檀、初獻、御盃水戸殿御頂戴之時、吳服御拜領、御座之方以向御禮、

松平下野守・松平伊与守、其外御譜代大名、御盃頂戴、吳服拜領、

一二日、諸大名御禮、
○下略、幕府諸始ノコトニカ
ル、本月二日ノ條ニ收ム、

元和八年正月一日

二五

元和八年正月一日

二六

證人衆

一三日、證人衆御禮也、

代官衆

一四日、代官衆御禮、

世子家光歳首ノ儀

一四日、於西丸、大納言様家光御禮、御盃之次第、

一初獻御盃水戸殿頂戴、御前へ上、松平下野守頂戴盃、御前へ上、御盃松平伊与守頂戴、

御前へ上納、二獻御盃水戸殿頂戴、御前へ上、御盃下野守頂戴、伊与守納、三獻御盃伊与

守頂戴、水戸殿へ其御盃下野守頂戴納、

社家僧侶山伏町人等

一六日、社家・諸出家・山伏等御禮、

一七日、町人等御禮、○下略、幕府鐵炮始ノコトニカ、ル、本月七日ノ條ニ收ム、

〔視聽日録〕乾

正月小朔日、大樹秀忠上壇御著座、水戸宰相殿、賴房爲年始之御祝儀登城、初獻御盃被

召上、水戸殿被遣、御服拜領之節、台際被立寄上段向御禮被申上、夫段御規式

相添

同日、西丸、若君家光御平安、

〔元寛日記〕三

一正月朔日、天快晴、御禮如例年、

○諸大名年頭祝儀ノコト等、便宜左ニ合敘ス、

〔活所遺藁〕二七言

元和八年壬戌元日遇雪、

雪隨世事正紛紛、閑座認間東武春、諸葛青蓮開隻眼、笑而不答當時人、

〔伊達山治家記録〕二十九

元和八年壬戌、公御年五十六、

正月壬寅小元日、戊戌、江戸御屋形ニ於テ御祝儀アリ、倭歌ヲ詠シ玉フ、

豊ノ年降ツム雪トツタヘキテコトノ葉シルキケフノ春カナ

年始御禮トシテ、御出ノ方數多アリ、略シ不記、末皆此ニ倣ヘ

〔梅津政景日記〕十一

正月朔日、一朝御祝餅・御飯（麴子）・めんす、御刀飯過候て、御召出有、一夜ニ入候て、御相手

衆白鳥にて御振舞、我等式も被召出、御飯被下候、其上御嘉例之御香會有、（土）つ、（天）太窪五郎

八判金壹枚・御小袖壹ツ被下候、（種下同シ）八首二人銀八枚、七首四人銀七枚ツ、六首六人銀六枚

元和八年正月一日

二七

江戸雪降ル

伊達家年頭祝儀

佐竹義宣

香會

ツ、其外五首と下ハ如毎年何にても不被下候、我等も七首之人數ニ罷成候、一朝天氣吉、四ツ時分と雪ふる、夜ル直、一若キ衆二三三人振舞致候、○義宣、コノ時江戸ニ在リ、同二日、一御年寄衆を始、大名衆、其外御知音衆へ、御禮ニ御出被成候、太刀折帛之役にて御供致候、一天氣吉、一五三人年頭振舞致候、

正月三日、一天氣よし、一五三人年頭振舞、

同四日、一天氣吉、一五六人年頭振舞、

同五日、一天氣吉、一五六人年頭振舞、

正月六日、一細川内記殿へ朝御茶被進候、一天氣吉、一五六人年頭振舞、

〔後編舊記雜錄〕七十六 古御文書廿六卷中 家久公御譜中ニ在リ

正月廿八日之御書拜見申候、仍爲年頭之御祝儀、御太刀一腰・御馬代銀子拾枚被下候、別而忝奉存候、次ニ晴母かたへもひさや五端被下候、是又忝存候、然は唐津へも爲御見廻御使者被遣候由、重疊忝次第二御座候、就中又八郎殿一段御息災被成御成人候、折之御見廻申上、得御意申候事候、○中略、秀忠、西丸移徙ノコトニカ、ル、五月十九日ノ條ニ收ム、當年は被成御在國様ニと御旋之旨、御年寄衆より被仰入之由、目出度奉存候、何も爰許之様子、鳴津下野守殿へ可申談候、恐

寺澤廣高歳首ヲ島津家久ニ賀ス

惶謹言、○幕府奉行入井上正就、島津家久ノ在國ヲ賀スルコト、五月三日ノ條ニ見ユ、

朱カキ元和八年

卯月廿二日

寺澤志摩守

廣高判

(薩州様カ) 松□□人々御中

〔天和の御使者記〕 尚豊様御代

(朱カキ)〔同八〕 一同二年壬戌、年頭御使者、
(天啓)

毛氏兼城親雲上、榮

〔公室年譜略〕十四 高山公十一

正月小朔日、(藤堂高虎)公何國ニテ越年シ賜フヤ、分明ナラス、六十七歳ニ成ラセ玉フ、(藤堂)高次公ハ東

府公館ニテ青陽ヲ迎ヘ玉フ、

二日、己亥幕府、謠始アリ、

〔元和年録〕坤

(正月) 一、二日、○中略、諸大名、江戸城ニ歳首ヲ賀スルコトニカ、ル、本月一日ノ條ニ收ム、同晩御謠初也、六ツ時分、水戸殿御登城、御長袴、御上檀(檀)ニ御座、初獻御盃水戸殿御頂戴被成、とを二獻御盃水戸殿御頂戴、とを三獻ふ

琉球王尚豊

藤堂高虎

元和八年正月五日

の御盃水戸殿御頂戴、とを、其次御家門、

〔參考〕

〔視聽日録〕乾

正月小二日、大樹爲御謠初、御祝儀、上壇御著座、次間へ水戸殿出座、初獻二獻路臺、御盃水戸殿に被遣、各御通成、夫より水戸殿敷居之内著座、上段、向縁頼猿樂共並居、御規式如例年相濟、

五日、壬千秋萬歲アリ、

〔孝亮宿禰日次記〕七

正月五日、壬寅晴、○中略、太元護摩ノコトニカ、禁中千秋万歲樂、忠利參之、

○諸社寺ノ千秋萬歲ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔義演准后日記〕二十

正月六日、晴、○中略、長尾宮修正ノコトニカ、歸ニ千秋万歲門跡に來、申祝言、酒肴并少下行之、

〔春日社司祐範記〕元和八年壬戌年記

三寶院

春日社

一十三日、(正月)大神主殿千壽万歲如例、日中飯、惣社參會也、予雨降故不參、膳送給了、御懇意也、

〔春日社司延通記〕元和八年社頭御神夏記

一十三日、於神主□□壽万歲ノ規式、中飯在之ニ付、一社參會、

敘位、内大臣從二位二條康道ヲ正二位ニ敘ス、

〔公卿補任〕五十

内大臣從二位同康道、(藤)十六、右大將、正月五日、叙正二位、

〔公卿補任〕五十二

參議正四位下藤季吉、(滋野井)四十同八、正五、正四下、三十七歲、

參議正四位下源親顯、(北畠)五十同八、正五、從四上、二十七歲、

非參議從三位同爲賴、(藤)三十同八、正五、正四下、卅一歲、

〔公卿補任〕五十二

非參議從三位藤兼俊、(水無瀬)三十同八、正五、正四下、三十歲、

〔公卿補任〕五十三

元和八年正月五日

水無瀬兼俊

冷泉爲賴

北畠親顯

滋野井季吉

堀河康胤

東坊城長維

戴嗣孝

元和八年正月五日

非參議從三位藤康胤、(堀河)三十、同八年正月五日、正四位下、

〔公卿補任〕五十三 寬永八年

非參議從三位菅長維、(東坊城)三十、同八、正五、從四上、廿九 歲、

〔公卿補任〕五十四 慶安元年

參議正四位下藤嗣孝、(戴)三十、同八、正五、叙爵、四歲、

〔涼源院記〕三

正月七日、甲辰、雨降、○中略、白馬節會ノコトニカ内辨(兼道)、二條内大臣、兼右大將、今夜加役正二位、

○下略、白馬節會ノコトニカ、ル、本月七日ノ條ニ收ム、

〔二條家譜〕

康道 (元和) 同八年正月五日、敍正二位、

〔諸家傳〕十三 下

戴嗣孝 (元和) 同八年正月五日、從五位下、四歲、

幕府、茶湯始アリ、

〔元和年錄〕坤

(正月)五日、御茶之湯始、

○幕府茶湯始ノ日、未ダ詳ナラズ、今姑ク元和年錄ニ據リテ、玆ニ掲グ、

七日、辰、甲白馬節會、

〔公卿補任〕五十 二

内大臣從二位同康道、(藤)十六、白馬内辨、(二條)

〔涼源院記〕三

正月七日、甲辰、雨降、○中略、年頭祝儀ノコトニカ(日野光慶)中納言今夜之役者にて、愚亭にて裝束

候也、

白馬節會、無出御、雨儀、終夜雨降也、

内辨(二條)、兼右内大臣、大將今夜加役正二位、則著陣、先奥座、中ノ柱ト等同ニ著座也、上ルニハ

次端座ニ移、次召官人、仰軾查、次職事時長、(甘藷寺)官方ノ吉書持參也、ツギ文は端ノ方ニタ

、ミ、右ノ手ニ持、奥まで披見シテ、如元卷テ、辨ニ下、辨披見シテ、目ヲ請テ退、下

史、次藏人方ノ吉書參仕辨持參、則如恆披見ノ、カタネ、參仕ノ辨ノ仰詞ヲ聞、則卷、

辨ニ下、辨作法如恆、披見了退、床子ノ座ノ前にて、史ニ下了、

元和八年正月七日

雨儀

官方吉書

藏人方吉書

元和八年正月七日

三四

次上卿召官人、仰軾退去、
次內辨著奧座、次奉行并右中辨^(竹屋)光長、內辨ノ後ニ至テ、內辨ヲ仰、次內辨移端座、次召官人、仰軾沓、

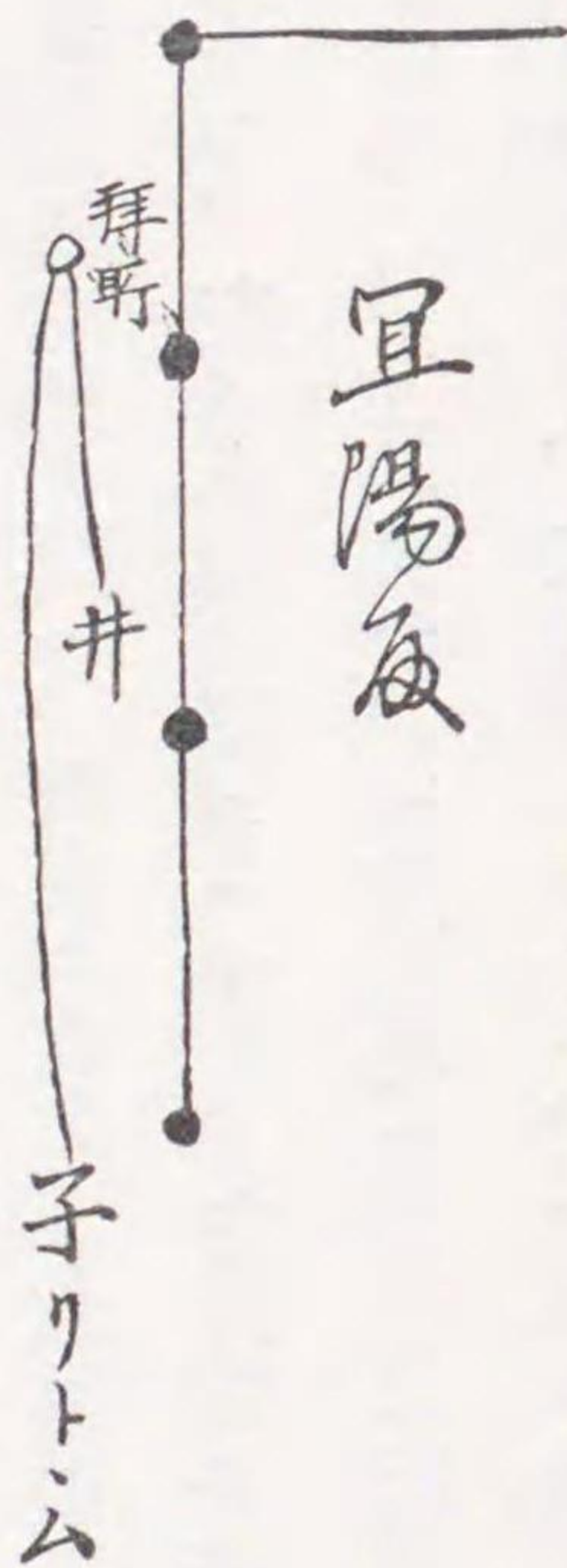
外任奏
次外辨著伏座、三條大納言^{公廣}・日野中納言^{光慶}・花山院宰相中將^{定好}、殿上ノ座ニ著申衆、西園寺大納言^{公益}・同宰相中將^{實晴}等也、次以官人召外記、大外記參進、問諸司、外記退、更又召外記、^{雨儀ニ依テ、何も}仰外任奏、外記退、外任奏持參、次內辨乍笏持、左ノ手ニテ、笏ヲ引寄テ後、笏ヲ置テ、乍管内辨取上テ披見ノ、則卷、懸紙ヲ加テ、置管内、取笏目外記、々々退、

次以官人召奉行辨、々參進、外任奏ヲ押出、^{虫損}奏聞畢、外任奏ヲ內辨ニ返下、次內辨披禮紙、外仕奏上覽ノ、カタネテ仰詞ヲ聞テ、如元卷之、職事退、次內辨、^(符之)以官人召外記、返下外任奏、仰詞如職事、次裝束司ノ辨ヲ召テ、雨儀ノ御裝束ヲ仰ス、辨退則仰史、

次內辨居向奥方合目、外辨上首、自下臈起座、參木居殘、
次內辨起座、^{仰軾}沓、三木ノ座ノ邊ニテ、三木平伏、出宣仁門代、著靴、令押笏紙、

次近衛引陣、南殿ノ階ノ軒下、^{雨儀}

次內辨入宣仁門代、宜陽殿着几子、北ヨリ二間ノ中ノ北ヨリ敷、
次諸卿向外辨、^{幄屋月花門ノ南ノ廊ノ内也、北上西面也、}



內侍臨西檻、

次內辨深揖、內侍歸入、內辨揖、几子立テ、宜陽殿壇上ヲ南ヘ練、第三間ノ中央ニ至リ練留、向東一揖、良ニ向二拜、次又一揖、^{淺面々}次練歸、軒廊ノ軒ノ時分ニ至テ練留リ、中央ノ間ニ入、南面ニ立テ、カヘリミテ後堂上、

次開門、^(團)次圍司、次召舍人、^{二音}次少納言參入就版、
^(五條)爲^{版ハ月花門ノ東方}適朝臣也、^{軒下、北ニヨリテ立}

少納言版位
ニ就ク

元和八年正月七日

三五

元和八年正月七日

三六

次内辨宣、刀禰召セ、

此間外辨、月花門ノ西、軒ノ下ニ雁列、北上東面、

次少納言、外辨上首ニ出合一揖、外辨上首答揖、次外辨宜陽殿ノ土間ニ異位重行、北上東面、

次陣官人、上卿御參列ト申也、

次内辨宣云、敷尹、

上卿參列

群臣再拜

白馬奏

次造酒正授空盞於外辨上首、次群臣再拜、次造酒正取空盞ヲ、又群臣再拜敷、次諸卿堂上、

次内辨下殿、白馬奏ヲ取、内辨軒廊中央ノ間ニ、南向ニ立テ、先右馬寮ノ奏ヲ見る、右大將殿也

次將(信孝)樋口取次、懸紙ヲ披キ押合テ、左ノ小指ノ間ニハサミ、左馬寮ノ奏ヲ披見ル也、次外

記ニ硯ヲ召テ、加書有也、如元卷之、杖ニ插テ、次將ニ持セ、次又左馬寮奏ヲ召見了、則

持來、次將堀川中將康胤朝臣持參披見了、又杖ニハサミテ、次將ニ持せて、陣ノ後ニて奏

聞、中央ノ間、中程ニ内辨立留給也、タヨリノ所にて、一杖ニハサミ給候哉らん、左右馬

寮奏一杖ニテ奏聞也、次堂上更下殿、白馬ノ渡ヲ見給て、堂上此時軒廊休息ノ兀子ニ著テ

見給、今度兀子軒廊中央東ノ方ノ柱ソヒテ、柱ノ内北ニ兀子ヲ立ト也、休息ノ兀子揖ナン、

白馬ノ渡

臣下ニ餽飽ヲ賜フ

國栖

次賜臣下餽飽、仰三木催之、西園寺宰相中將下殿催之、今度飯汁物、前後相違之由如何、餽ニ此時不見也

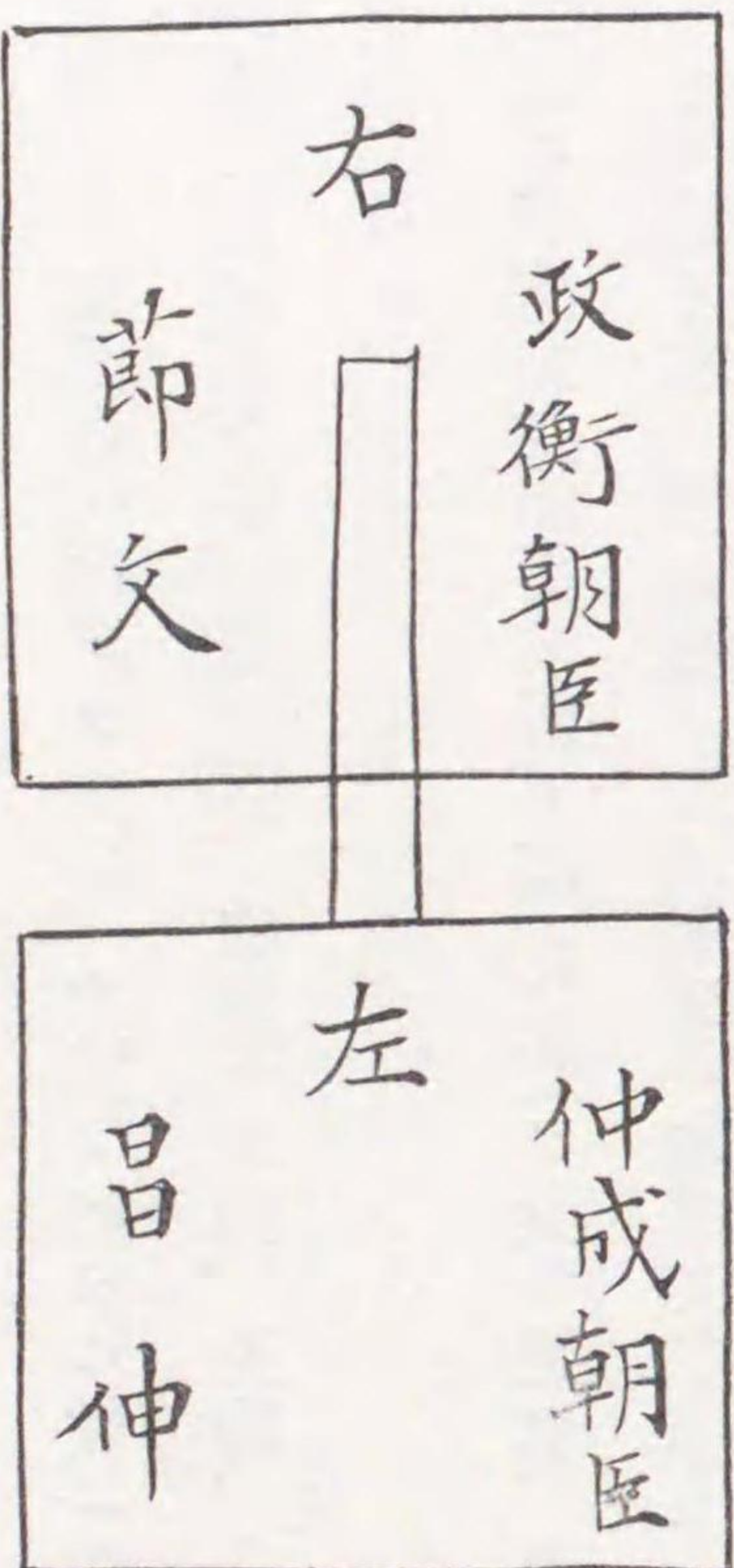
次賜飯汁物、仰三木催之下殿

次一獻、仰三木催之、乍座

次國栖、内辨下殿催之、軒廊ノ兀子ニ著、無揖、調子ヲ吹ヲ聞テ歸畢、

次二獻、如一

次御酒勅使、内辨中納言光慶ヲ召、内辨ノ後ニ參進之時、マチキンタチニミキタウヘト仰、光慶下殿取交名、作法如恒、經本路復座、



串夕ケ也
左ノ交名右ノ下ニ重テ串ニサス也

次三獻、如一

元和八年正月七日

三七

元和八年正月七日

三八

坊家奏

次内辨下殿ノ坊家ノ奏ヲ取、軒廊ノ中央ノ間ニ立、柱ト平等也、次將奏杖を取次、坊家ノ奏懸紙有、カケ紙ヲハ、左ノ小指ノ間ニ折テハサミ、圖ヲ披、奥マテ右ノ手ニクリタメテ、披見畢テ、如元卷、懸紙ヲ加テ、次將ノ持タル杖ニ挿テ、陣ノ後ニテ奏聞、次將相隨、次内辨堂上ノ更下殿、催立樂、吹調子ヲ聞、昇殿、立樂了テ、内辨以下ニ殿ノ、舞妓ノ拜有、

立樂

此已前ニ、舞妓内侍所ノ南ノ廊ニ筵道ヲ設テ廻也、内辨以下ニ殿ノ、軒廊ニ位異重行、軒廊第一ノ間ノ北ノ柱ノ西ノ方ノキワニ内辨立、

拜舞

内大臣正二位、同列ニ、間中計ヲメリテ、正二位大納言立、從二位ノ中納言、又少ヲメリテ列立、從三位宰相内大臣ノ後ニ立也、拜舞有、西園寺大納言下殿以前ニ、西園寺中將サキヘ下殿ノ、列ニ立定、有敬折也、是父子ノ禮義也、

宣命

次内辨直ニ著陣、外辨昇殿、次見宣命、以官人内記ニ宣命ヲ仰、内記持參、披見了、右ノ方ヘ寄テ置、目ヲ請テ退、次以官人、外記ニ見參祿法ヲ仰ス、杖ヲヌキ取テ、カケ紙ノサキヨリ見テ、右ノ宣命ト同所ニ置、又カケ紙ノアルヲ見テ、カケ紙ヲ加テ少卷殘、カケ紙ノナキヲ卷籠テ、宣命ト二通

ヲ押出テ、外記ニ杖ニ挿セ、陣ノ後ニテ奏聞、作法如恆、奏畢テ、階下ニテ二通ヲヌキ取テ、笏ニ取ソヘ堂上也、

次内辨上、宣命使給宣命、花山院宰相中將定好卿、内辨後ニ進テ、給テ復座、

見參祿法

次祿所奉行西園寺宰相中將、實勝進召テ給見參祿法、内辨ノ後、進テ給テ復座、

舞妓拜

次内辨以下ニ殿、位異重行、列立如舞妓ノ拜、今度兩段再拜也、

次列立了、宣命使下殿ノ西第一ノ間ヲ出テ、東第一ノ間宣命ノ版ニツク、先一揖、次ニ宣命ヲ披、次右ノ方ヘ結ヌル時、群臣再拜、又披テ結ヌル時、群臣再拜、宣命ヲ拜ノ内ニ、卷テ懷中ノ笏ヲ取出、後拜ニ一揖ヲ合、更一揖ノ歸テ、作合ニ佇立、拜了テ祿所奉行祿所ニ向、祿所月花門下也、

次内辨以下、向祿所退出了、

〔孝亮宿禰日次記〕七

正月四日、辛丑、晴、

白馬節會、任例可被催沙汰之狀如件、

正月三日

竹屋光長右中辨判

元和八年正月七日

三九

元和八年正月七日

四位史殿

○下略、太元護摩ヲ修スルコトニカ、ル、本月八日ノ條ニ收ム、

七日、甲辰、雨降、白馬節會、雨儀、出御無之、

内辨二條内大臣殿、康通公、今夜正二位御勅許云々、御著陣有之、官方吉書有御覽、

内辨
外辨

外辨轉法輪大納言公廣、西園寺大納言公益、日野中納言光慶、花山院三位中將定好、西園寺

宰相實時、少納言爲適朝臣、次將康胤朝臣、元親朝臣中山、爲賢朝臣兼倉、信孝樋口、公景如小路、有純天條、奉行右

中辨竹屋光長、四位大外記中原師生朝臣、左大史小徳孝亮樂前、六位外記所力俊久、史亮盛、史生左右官

掌、召使同元日、

〔弘誓院孝亮記〕二

正月七日、甲辰、雨降、白馬節會、雨儀、無出御、奉行藏人右中辨光長、公卿内大臣、康通、權

大納言公廣、西園寺大納言公益、日野中納言光慶、花山院三位中將定好、西園寺宰相中將晴實、

少納言爲適朝臣、辨、次將康胤朝臣、元親朝臣、爲賢朝臣、信孝、公景、有純、散狀内

卿補任元和七、正、十四、一任權中納言云々、可考、

〔官公事抄〕十三

正月七日、甲辰、雨降、

白馬節會、雨儀、無出御、奉行職事右中辨光長

公卿

内大臣 康道公 權大納言 公廣公

西園寺大納言 公益卿 日野中納言 光慶卿

花山院宰相中將 定好卿 西園寺宰相中將 實晴卿

少納言

爲適朝臣

辨

次將

康胤朝臣 元親朝臣

爲賢朝臣 信孝

公景 有純

〔勢多文書〕

元和八年正月七日

元和八年正月七日

元和八年正月七日、
戊戌

白馬節會北陣催、治興、

姉小路判官從五位下左衛門少志大石久弘初參、長弘男、大石直弘卒去、其跡ヲ相續メ、
號姉小路、去辛酉年八月十九日、依敘位任官也、
(元和七)

〔白馬節會并下行古文書〕

○宮内廳書
陵部所藏

下行米

白馬節會御下行米之事

五斗者、
合 看督長

五斗者、
使廳

右槌ニ御渡し可有候、

元和八二月十一日

清水左衛門

〔(裏書)右槌ニ請取所如件(花押)〕

(中原節生)
大外記

黒印

三節會御下行米之事

合參石者、
主殿司

右槌ニ御渡し可有候、

元和八二月十一日

清水左衛門

〔(裏書)右うけとり申候、

大外記

黒印

ともつかさ(花押)〕

白馬節會御下行米之事

合參石者、
看督長四人

右槌ニ御渡し可有候、

元和八二月十一日

清水左衛門

〔(裏書)右請取申候、
藤井(花押)〕

大外記

黒印

元和八年正月七日

元和八年正月七日

白馬節會御下行米之事

五石者、内貳石者獻料、勢多判官

三石 堀川判官

三石 姉小路判官

三石 町口判官

右合拾四石者、

右槌ニ御渡シ可有之、

元和八年二月十一日

〔裏書〕右之通、槌ニ請取申候也、

〔成〕戊二月十九日

大外記 黒印

勢多 黒印

白馬節會御下行米之事

合貳石者、使廳四人

右槌ニ御渡し可有候、

元和八年二月十一日

清水左衛門

〔裏書〕右之通、貳石請取、

幕府、鐵炮始アリ、

〔元〕〔元和年録〕坤

〔正月〕一七日、○中略、町人等、幕府ニ歳首ヲ賀スルコトニカ、ル、本月一日ノ條ニ收ム、御鐵炮初、

○幕府鐵炮始ノ日、未ダ詳ナラズ、今姑ク元和年録ニ據リテ、茲ニ掲グ、

〔附録〕

〔小笠原忠眞年譜〕二

〔元和〕八年壬戌 公二十七歳

正月四日、公弓初、

八日、〔乙〕太元護摩ヲ修ス、

〔孝亮宿禰日次記〕七

正月四日、辛丑、晴、○中略、白馬節會ノコトニカ、ル、本月七日ノ條ニ收ム、

元和八年正月八日

小笠原忠眞
弓始

大外記 黒印

〔使廳四人之内
祐益(花押)〕

元和八年正月八日

太元法可爲護摩、任例可被致沙汰之狀如件、

正月四日

(小槻孝亮)
四位史殿

(勸修寺)
權左少辨經廣

五日、壬寅、晴、

太元法秋篠寺之役、塗壇土・香水之事、早可被下知之由候也、仍執達如件、

正月五日

左少史判

一官掌殿○下略、千秋萬歳ノコトニカ
ル、本月五日ノ條ニ收ム、

〔涼源院記〕三

正月十一日、戊申、晴、醍醐理性院、禁裏紫宸殿にて、(天)大元御修法被行付て、兩種ニカ樽遣

申也、○下略

十二日、己酉、晴、(性)略、理勝院殿ヨリ昨日之樽返候也、

〔官公事抄〕十三

正月八日、乙巳、晴、

太元帥法、奉行職事權左少辨(勸修寺)經廣、

職事

奉行勸修寺
經廣

大和秋篠寺
ノ役

惣禮

院家
醫師

日野資勝女
御徳川氏ニ
參賀ス

〔眞諸寺院記〕一

理性院

(朱書)
第十五
觀助代

(元和)同八年正月八日、於紫宸殿、太元小法參勤宣旨賜之、

九日、(丙)親王・公家衆・門跡以下、參内シテ、歳首ヲ賀シ奉ル、

〔涼源院記〕三

正月六日、癸卯、晴、來九日、禁裏御惣禮ニ候間、(大覺寺尊性親王)大門様へ申可遣由也、則中嶋主水ニ申

渡候也、相番衆之事ハ、中納言へ申遣候也、○下略、年頭祝儀ノコトニカ
ル、本月一日ノ條ニ收ム、

九日、丙午、晴、禁裏ハ惣禮也、朝飯過テ、伺公申候也、大覺寺御門跡・(覺深親王)仁和寺御門跡・

竹門様・妙門様ハ長橋より御參内にて、奥にて御禮有、御攝家衆・二條殿、奥にて、御禮、

(曼殊院良恕親王)妙法院然親王、(義演・覺定)隨心院殿・(寛海)勸修寺門跡・(相)實性院殿・(常尊)圓滿院

殿・(下脱力)九條忠孝、(九條忠榮)大納言殿計議定所御伺公也、三寶院(泰重)子・(義尊)隨心院殿・(實性)實性院殿・圓滿院

殿、何も清凉殿にて御對面、(各對面)各對面已前ニ、(土御門)土御門御身かため進申候也、次外様衆各御禮有、非藏人まで御禮有、

御禮北、次院家衆・(智)知積院僧止、其後諸寺之御禮有、其後御學問所にて醫師御禮有、其後御

指筵にて予・万里小路入道・(桂哲)光慶・(日野)光賢・(鳥丸)業光・(柳原)弘資御禮、クミツケラスユ、六位藏人陪膳、

申次勸修寺辨、(經廣)主上之御陪膳正親町三條中納言、御手長勸修寺辨也、其後女御様御禮ニ伺

元和八年正月九日

元和八年正月九日

四八

中和門院ニ
參賀ス

公申候也、予父子三人・冷泉中將(爲積)・飛鳥井中將(雅也)・柳原・万里小路・中御門中納言(宣德)・四辻中納言(季俊)・正親町等アマタ公家衆有、弓氣多攝津守庭へ出候て、御禮申候て、退出、予(日野弘實)侍從ハ女院さまへ御禮ニ伺公申候也、又八條様へ伺公申候へハ、御沈醉にて、無御對面、同若宮ノ御方へ、初而御禮ニ寄、太刀進上申候也、○下略年頭祝儀ノコトニカ
ル、本月一日ノ條ニ收ム、

〔孝亮宿禰日次記〕七

正月九日、丙午、晴、禁中諸家中御禮、忠利參之、○下略神宮奏事始ノコトニカ
ル、本月十一日ノ條ニ收ム、

〔義演准后日記〕二十

正月八日、明日參内觸、共奉人等相觸畢、

九日、晴、辰剋參内、新門同道(覺定)、於鬼間數剋奉待了、御内之衆御禮已後、清冷殿出御、三條大納言申次、先九條御方(九條忠孝)・大納言御對面、對予三條大納言次第被尋、先九條可然之由申、仍如此、次予御加持申退出、次隨心院大僧正、次新門、次勸修寺權僧正也、新門ハ未無官也、權僧正ノ先ニ御禮申段如何、但將軍御法度ノ故也、清華門跡ハ不構官位、攝家門跡ノ可爲次由御定、仍如此、勸門ハ花山ノ息也(花山院定憲)、次女御ニ參賀、執事弓氣多攝津守參向申、於庭上申渡、不及昇殿、各退去、次女院ニ參賀、予ハ女御ヨリ直ニ歸坊、新門・九條殿ハ御

御禮ノ先後
ルハ法度ニ據

義演二條康
道ニ參賀ス

幼少ノ間御對面、一獻被下之云々、女院へ杉原十帖・薄帶新門進上、予ハ御樽進上、結句被遮御樽拜領申、過分ニ、女御へハ杉原十帖・扇一包、權中納言中殿へハ杉原十帖・扇遣之、二條殿參賀、御樽如嘉例進上、至下ニ不殘被召寄、曆ニ御振舞被下、御嘉例也、朝ハ於鷹司殿御振舞、御樽以下進上目錄在別、九條殿・同政所(豐臣氏)・禪閣(鷹司信房)・鷹司大納言殿(教平)・同女三親王(龜然親王)・梶井宮(殿胤親王)・廣橋前内府以下方ニ拜領、返禮在別候、

〔梅津政景日記〕十一

同日、一天氣よし、一二ノ丸宰相様、榊原殿屋敷へ御移被成候、

同日、二ノ御丸宰相様、榊原殿屋敷へ御移ニ付、白鳥五ツ・鮭ノ鹽引三拾・諸白壹荷被進候、爲御使持參仕候、鳥居士佐殿(成次)・朝倉備中殿(宣正)へ、田代大膳を以、様子申上候へハ、私をも宰相様御前へ被召出候、一朝曇ル、ひる過よ雨氣、夜ルふる、○義宣、コノ時

佐竹義宣徳
川忠長ニ白
鳥等ヲ贈ル

元和八年正月十日

四九

元和八年正月十日

五〇

〔天英公御書寫〕中

○上略、江戸城普請ノコト、家光、川越ニ放鷹ノコト、御城御作事ニ付而、公方様西丸へ、二月始ニカ、ル、二月十八日、正月二十三日ノ條ニ收ム、御城御作事ニ付而、公方様西丸へ、二月始御移被成候、甲斐之宰將様者、榊原式部殿之屋敷へ御移被成候、是ハ佐渡殿屋敷カ御屋敷ニ成候、其作事出来候間之事ニ而候、○中略、江戸城普請ノコト、秀忠ノ養女松平氏、黒田忠之ニ收ム、全文ハ二月十八日ノ條ニ收ム、

元和八年 正月廿日

御名乗御居判

〔越後高田榊原家譜〕坤

式部大輔忠次 (元和) 同八壬戌年、江戸天守臺石垣普請ノ節、秀忠殿西丸へ移ラセ給フニヨリ、家光殿ニハ本多美濃守宅へ移ラセラレ、甲斐參議忠長ニハ忠次宅へ、營作ノ間居住セラル、

〔參考〕

〔御當家記年録〕五

(元和八年) 今年改築江城殿主臺石壁、○中略、幕府、諸大名ヲシテ、江戸城ヲ修築セシムルコト、家光、本多忠之ノコトニカ、ル、二月十八日、四月二十一日、正月二十三日、五月十九日ノ條ニ收ム、

甲斐參議忠長卿、營作之間、被移于松平式部大輔忠次宅、(稱原) 忠長卿住所在本丸ノ東北梅林坂邊、也、住所

○幕府、江戸城修築ノコト、二月十八日ノ條ニ、徳川忠長、同城内新亭ニ移ルコト、三月十八日ノ條ニ、家光、本多忠政ノ江戸ノ亭ニ移ルコト、四月二十一日ノ條ニ、秀忠、西丸ニ移ルコト、五月十九日ノ條ニ收ム、

十一日、戊申、神宮奏事始、

〔孝亮宿禰日次記〕七

正月九日、丙午、晴、○中略、公家衆、門跡等、參内シテ、歳首ヲ賀シ、來十一日奏事始之由、自烏丸頭辨内ニ有示、構神事、

十日、丁未、晴、奏事始目錄用意、令付頭辨光賢朝臣、

太神宮

造替事、

神領再興事、

社中繁昌事、

元和八年正月十一日

五一

奉行烏丸光賢

元和八年正月十一日

左大史孝亮

五二

奏事始之事三ヶ條目錄

右進上如件、

正月十日

大史孝亮

進上 頭左中辨殿

自奉行付給一通
來十一日奏事始目錄、早之可付給之狀如件、

正月十日

光賢奉

四位史殿

自傳奏付奉行折幣
神宮奏事始事、明日早之可申沙汰候、然者目錄明日所望候、調給候者可爲祝著候也、

正月十日

(中御門)
資胤
(神宮傳奏)

頭辨殿

神宮傳奏中
御門資胤

自奉行付傳奏
神宮奏事始目錄、内之寫進入候、可然様可得御意候、恐惶謹言、

正月十日

光賢

進上 中御門大納言殿

十一日、戊申、晴、今日神宮奏事始也、

〔弘誓院孝亮記〕二

正月十一日、戊申、神宮奏事始、傳奏中御門大納言、資胤、奉行頭左中辨(鳥丸)光賢朝臣、

○皇大神宮及ビ豐受大神宮禰宜補任等ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔孝亮宿禰日次記〕七

正月廿二日、己未、晴、○中略、秀忠ノ使大澤基宿參内シテ、歳首ヲ賀シ奉ルコトニカ、ル、本月二十二日ノ條ニ收ム、自勢州、本職之事申

之間、自昨夜構神事、書調本職補任廿通、

廿三日、庚申、晴、伊勢藤波治部少輔飛脚、今日本職廿通附遣之、本職補任料到來、

廿六日、癸亥、晴、伊勢玉串五位任料・同玉串役人補任料等、貧家之由申之間、過半免之、

成遣之、

本職補任料

元和八年正月十一日

五三

元和八年正月十一日

五四

二月三日、己巳、雪降、自勢州本職之事申之、構神事、書之、
四日、庚午、雪、本職百通書之、

五日、辛未、晴、神宮就禰宜職之事、(神九)參傳奏中御門大納言、奉行頭(烏丸光賢)左中辨言談之、

六日、壬申、伊勢禰宜職之事、調一通、相副款狀、令付進頭左中辨、

權禰宜補任書認之、下遣經顯、入夜急雨、

七日、癸酉、雨降、禰宜職之事、勅許之由、自神宮傳奏中御門大納言被告之、

八日、甲戌、晴、自昨夜構神事、權禰宜補任書認之、十五通也、(內經廣任料免之、是依申貧家之由也、)

本職壹通、附遣高向與三大夫、○下略

九日、乙亥、晴、參中御門大納言、權禰宜申敍爵之事言談、

十一日、丁丑、晴、自昨夜神事、

進上

度會辰彦申加級

荒木田經貞・同盛國・同經晨・度會貞昌・同滿彦等申敍爵之事、副小折番款狀五通、

右進上如件、

禰宜職勅許

二月六日

大史(小德)孝亮

進上 頭左中辨殿

廿一日、戊子、晴、○中略、伊勢二見浦御鹽殿神人、小槻孝亮ヲ訪フコトニカ、ル、二月二十四日ノ條ニ收ム、自神宮傳奏中御門大納言使

者、云、去元和六年以來、神宮禰宜加級敍爵等勅許之由有示、即參中御門亭、次參九條關

白殿、敍爵加級等勅許之事、謝申之、○下略、九條忠象子息出生ノコトニカ、ル、年末雜載諸家ノ條ニ收ム、

廿三日、己丑、晴、自中御門、元和六以後三ヶ年間加級敍爵款狀小折番留有之者、可持參

旨有命、即持參之、烏丸頭辨有入來、加級敍爵等十九通口宣可被調下候也、賜晚炊、○下略

廿四日、庚寅、晴、神宮奉行自烏丸頭左中辨禰宜職并敍爵口宣十一通、兩宮加級八通以上廿通到來

也、

廿五日、辛卯、晴、加級敍爵等勅許之間、高向與三大夫早可參洛之旨、飛脚遣勢州、

三月六日、壬寅、晴、神事、內宮二方物忌補任調之、

依請以件權禰宜從五位下荒木田神主弘尚、補任前宮守物忌弘綱闕替職如件、宮司宜承知、

因准先例、令勤職掌、以下、

元和八年三月六日

元和八年正月十一日

五五

內宮二ノ方
物忌補任

元和八年正月十一日

從四位上左大史小槻宿禰判

外宮二禰宜
替病ニ就キ闕

十五日、辛亥、晴、○中略、下野日光山東照社奉幣使發遣日時定ノコトニカ、ル、三月十六日ノ條ニ收ム、伊勢外宮二禰宜就病事、闕替之事、爲彦願申狀内ニ到來也、○下略、月食ノコトニカ、ル、三月十五日ノ條ニ收ム、

四月七日、癸酉、晴、自勢州飛脚到來、外宮檜垣内膳二禰宜闕替所望之事也、於此地難沙

汰、先遣返事令還了、○コノ時、孝亮、日光ニ赴ク途、江戸ニ在リ、

五月廿三日、戊午、晴、伊勢佐久目佐馬・高向與三大夫來、外宮二禰宜闕替、禰宜職三人相論有之、

二禰宜闕替
ニ就キ禰宜
職三人ノ相
論アリ

廿四日、己未、晴、內宮禰宜職（中略）經晨任料、米八石五斗令請取之、

廿七日、壬戌、雨降、內宮禰宜中川新之丞經晨宣旨一通成遣之、口宣達而令懇望之故、同遣之、

廿八日、癸亥、晴、高向與三大夫禰宜職相論之目安持參、

六月小三日、戊辰、晴、上部半兵衛、禰宜職相論之申狀持參、○下略、伊勢二見浦御鹽殿神人ノコトニカ、ル、二月二十

四日ノ條ニ收ム、

四日、己巳、晴、外宮檜垣内膳目安持來、其外佐久目・上部・高向等來、

五日、庚午、晴、外宮一ノ方物忌補任、

外宮一ノ方
物忌補任

禰宜職相論
ノ申狀

內宮禰宜職
任料

度會弘隆

依請以件權禰宜從五位下度會神主弘隆、補任前太物忌弘政闕替職如件、宮司宜承知、因准先例、令勤職掌、以下、

元和八年六月二日

從四位上左大史小槻宿禰判

內宮三ノ方
物忌補任

依請以件權禰宜從五位下荒木田神主弘末、補任前床祭物忌弘久闕替職如件、宮司宜承知、

因准先例、令勤職掌、以下、

元和八年六月二日

從四位上左大史小槻宿禰判

高向與三大夫來、敍爵二通・弘隆太物忌補任渡之、佐久目・上部等來、檜垣内膳・高木來、明日勢州可罷下云々、

六日、辛未、伊勢宮司遣飛脚、

八日、癸酉、晴、○中略、伊勢二見浦御鹽殿神人ノコトニカ、ル、二月二十四日ノ條ニ收ム、外宮高向與三大夫來、度會弘隆敍爵

元和八年正月十一日

元和八年正月十一日

五八

料冊文目到來、

十日、乙亥、雨下、(河邊辰長)外宮長官使來、遣大宮司、并兩宮長官飛脚歸來、遂穿鑿、關東_江可注進之旨、返答也、

十二日、丁丑、晴、○中略、下野日光山東照社宣旨副使料伊勢大宮司辰長飛脚到來、

十三日、戊寅、雨降、入土用、參中御門大納言、伊勢禰宜職相論之事言語、勢州檜垣内膳上洛、

十五日、庚辰、伊勢佐久目左馬助來、先日外宮輩連著之時、(署力)三禰宜不書載、令迷惑由有斷、

廿三日、戊子、午後有雨、入夜風雨、伊勢澤田・佐久目・高向・檜垣等來、

七月二日、丙申、晴、伊勢前三禰宜雄彦之妻、授目安、高向申次之、

三日、丁酉、晴、就禰宜職相論、自勢州證人二人出洛之由、高向所申也、

七日、辛丑、晴、○中略、前田利常室德川氏歿スルコトニカ、ル、七月三日ノ條ニ收ム、高向并外宮前神主使等來、

八日、壬寅、晴、自外宮二禰宜全彦今朝寅剋款狀京著、第一前四禰宜貞城闕替、外宮常勝款狀今夜寅終著、

九日、癸卯、晴、外宮四禰宜貞城闕替款狀到來之由、令申神宮傳奏中御門大納言、

四禰宜貞城ノ闕替

廿六日、庚申、晴、○中略、客星現ハル、コトニカ、ル、禰宜職三人相論之事、參鳥丸頭辨、年未雜載、天文氣象災異ノ條ニ收ム、言談之、

八月四日、戊辰、雨下、伊勢禰宜職于今延引之故、傳奏奉行申之處、奉行依所勞、不致沙汰、被快氣者、傳奏・奉行・官務等一同可被沙汰云々、

七日、辛未、晴、○中略、女御徳川和子深曾木祝儀ノコトニカ、ル、六月十六日ノ條ニ收ム、高向與三大夫敍爵款狀持來、

八日、壬申、晴、於神宮奉行頭左中辨亭、鳥丸傳奏中御門大納言來臨、予參之、神宮禰宜職相論之事被沙汰、議定旨者、禰宜闕替之事、三禰宜男以貞晨可被補之歟云々、

九日、癸酉、晴、入夜雨下、高向明日勢州罷下云々、○下略

十日、甲戌、自高向、五位二通來、○下略

十二日、丙子、雨下、伊勢上部半兵衛來、至要集云、

後花園院御宇、

享德三甲戌年、外宮一禰宜顯久替職ヲ、同男康久雖懇望申、依爲禁忌中、不被補之、以雅貫任之、于時祭主清忠、

右顯久ハ、松木ノ禰宜顯彦ト申也、其子ヲ康彦ト申也、然共後花園院諱ヲ彦仁ト申奉

元和八年正月十一日

五九

元和八年正月十一日

ル故ニ、恐テ顯久、康久ト名乗ヲカヘシ也、

元和八年八月八日

三禰宜常晨

藤波治部少
輔上洛ス

十三日、丁丑、晴、伊勢藤波治部少輔參洛、

十九日、癸未、晴、入夜高向與三大夫來、神宮禰宜忌中間、禰宜職望申先例、自內宮十
一ケ度、自外宮十四ケ度勘例到來之由、高向持來之、即令付進中御門大納言、

廿一日、乙酉、晴、雨降、禰宜職二人款狀・敍爵三人款狀、今日披露之處、有勅許之由、
自中御門有示、信濃小路淡路守、就禰宜職之事來臨、

廿二日、丙戌、晴、上部・高向・外宮長官使等來、

廿八日、壬辰、晴、佐久目左馬助來、就禰宜職之事、敍爵事、同申上度旨申之云々、仍款
狀之事等令言談、

廿九日、癸巳、晴、貞晨禰宜職并敍爵之事、款狀今日令付烏丸頭辨、敍爵之事者、重而可
申上旨有示、仍被返之、

度會貞晨禰
宜職任料
度會全彥禰
宜職任料

伊勢禰宜職貞晨任料米八石五斗代、今日沙汰渡之、令請取者也、傳奏廿五石、奉行五石、
九月小一日、甲午、晴、外宮全彥禰宜職任料八石五斗代令請取之、傳奏分廿五石、奉行五石、

度會貞晨ノ
補任

三日、丙申、晴、自頭辨使者云、自今日五日迄神事、禰宜職之事可沙汰云々、
四日、丁酉、晴、就禰宜職之事、構神事、

貞晨者三
禰宜男也

五日、戊戌、晴、伊勢禰宜職之事一通、并口宣二枚、敍爵口宣三通來、

應以豐受太神宮權禰宜度會神主貞晨〔轉〕令傳補同宮禰宜故彥〔中御門〕闕替職事、

右左中辨藤原朝臣光賢〔高九〕傳宣、權大納言藤原朝臣資胤〔中御門〕宣、奉勅、以件貞晨宜令轉補者、

元和八年四月十一日

左大史小槻宿禰判奉

度會全彥ノ
補任

應以豐受太神宮權禰宜度會神主全彥宜令轉補同宮禰宜貞城闕替職事、

右左中辨藤原朝臣光賢傳宣、權大納言藤原朝臣資胤宣、奉勅、以件全彥宜令轉補者、

元和八年八月廿一日

左大史小槻宿禰判奉

貞晨禰宜職宣旨今日遣之、口宣依懇望同遣之、佐久目左馬助・上部半兵衛等來、

六日、己亥、晴、高向與三大夫來、全彥禰宜職之宣旨渡遣之、口宣又依懇望、同遣之也、

敍爵口宣三通同遣之、

自中御門大納言使者云、今度禰宜職就出入之事、目安等可寄置、可聞食之由、有仰之間、
示之、云々、即令持向之處、稱他出之由、仍不及面謁、

元和八年正月十一日

元和八年正月十一日

六一

七日、庚子、禰宜貞晨任料、傳奏分并宣旨料、合三十三石五斗、侍駒井內藏丞秀清遣請取狀、八月四日日附、宛所佐久目左馬助也、奉行料五石者被免之。

中御門大納言使者云、今度三人禰宜相論目安可持參云々、即令持參之、三禰宜重服、輕服忌中禰宜職補任之例、被留置之也、

十二月三日、甲子、晴、自伊勢申本職之事、構神事、調之、

太神宮司 左大史下

右人補任官掌大內人職如件、官司宜承知、因准先例、令勤職掌、以下、

元和八年十二月 日

從四位上左大史小槻宿禰

四日、乙丑、雪下、○中略、內侍所臨時御神樂ノコト、勢州自高向與三大夫許申本職補任之事、
ニカ、ル、十二月六日ノ條ニ收ム、本職補任卅枚調下之、補任料百廿二文目到來、殘廿八文目未進濟、

八日、己巳、曇、雨降、外宮五禰宜闕替望申四人款狀四通到來之由、申中御門大納言之處、被命云、件四人中服者無之哉、(康道)慥可聞定云々、

廿日、辛巳、晴、於二條殿亭、中御門大納言相逢、言談禰宜闕替之事、中御門被命云、於

服者者不可相叶、第二滿彥可舉申云々、第一常勝者爲服者之間、不可執之也、明日可附款狀之故、自今夜構神事、

廿一日、壬午、晴、調一通、令附烏丸頭辨、相副款狀、

度會神主滿彥申禰宜職之事、款狀副之、

右進上如件、

十二月廿一日

大史孝亮

進上 頭左中辨殿

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲八 十二

上卿 中御門大納言

元和八年二月六日 宣旨

皇太神宮權禰宜從五位下荒木田經晨

宜轉補同宮禰宜守定 闕替

藏人頭左中辨藤原光賢

元和八年正月十一日

六三

元和八年正月十一日

六四

太神宮司 左大史下

正六位上荒木田神主經晨

右人補任皇太神宮權禰宜職如件、宮司宜承知、因准先例、令勤職掌、以下、

元和八年正月十一日

從四位上大左史小槻宿禰判

元和八年五月廿三日、外宮左久目左馬・檜垣内膳來申云、二禰宜闕替ニ付、禰宜職三人相論有之由申理、

同廿五日、長橋御殿より仰云、外宮三禰宜申上、禰宜職之事有様ニ沙汰事之御使給、

同廿六日、廣橋前内府より速水安藝様仰候而、(良念)松木新太郎申上、禰宜職之事有様可申付之由仰給、

同卅日、檜垣内膳禰宜職相論書付持參可申由申也、又佐久目左馬來、是も禰宜職相論之書付可上由申歸也、

同六月三日、佐久目左馬・上部半兵衛來、禰宜職相論書物令持參、

外宮禰宜職
ハ有様ニ沙
汰スヘシ

大宮司ヘノ
使者歸ル

同四日、檜垣内膳來、目安持參、

同日、佐久目左馬・上部半兵衛三人相論之目安上也、

同十日、大宮司方へ進飛脚今日歸、穿鑿仕、江戸へ注進可仕之由申來、

同十二日、大宮司より飛脚來、

同十三日、中御門大納言へ參、伊勢禰宜職相論令談合、

同廿一日、伊勢禰宜職相論之事ニ付、高向與三大夫召連、速水安藝所へ參、禰宜職相論出入物語申入、前内府可申入由也、

同廿四日、伊勢佐久目左馬來、六禰宜より書上申、三禰宜款狀ハ三月十七日、夜鳥(マ)より前ニ持テ、伊勢出申候由申、

同七月八日、外宮二禰宜(度會)全彦より款狀、七月八日ノ夜寅刻ニ著、第一番前四禰宜貞城闕替、同常勝款狀、七月八日ノ夜寅終ニ著、

同九日、神宮傳奏中御門大納言へ參、外宮四禰宜闕替ニ付、款狀上申之由申入、

同廿六日、神宮奉行烏丸頭(光賢)左中辨へ參、禰宜職三人相論之談合申入、神宮傳奏へ同道可申入由申入處ニ、今日用之義有之間、延引可申由被仰、

四禰宜闕替

元和八年正月十一日

六五

度會貞晨

同八月四日、禰宜職相論ニ付、様子御聞被成可然之由申入處ニ、病中ニ候間、傳奏次第之由返事被仰、則傳奏へ申入處ニ、三人御聞可有間、奉行御出候への由、返事被仰、此旨又奉行ニ申入處ニ、病中之理被仰入、以書狀之理被仰入處、快氣之時三人御聞可有由返事也、同六日、中御門大納言參、奉行可有御出談合申入、明後日八日頭辨へ傳奏にも可有御出由被仰、

松木顯彦同
康彦御名ヲ
恐レテ改名
ス

同八日、烏丸辨へ中御門大納言御出、予參、禰宜職相論之事、三禰宜子貞晨ニ可被仰付之由被仰、
同十二日、伊勢上部半兵衛來、至要集ニ云、後花園院御宇、享德三甲年、外宮一禰宜顯久替職ヲ、同男康久雖懇望申、依爲禁忌中、不被補之、以雅責任之、于時祭主清忠、右之顯久ハ、松木ノ禰宜顯彦ト申也、其子ヲ康彦ト申也、然トモ後花園院諱ヲ彦仁ト申奉ル故ニ、恐テ顯久、康久ト、名乗ヲカヘシ也、

元和八年八月八日

外宮三禰宜常晨

同十九日、夜入高向與三大夫來、忌中之内ニ禰宜職望申先例、内宮より十一勘來、依外宮十四勘來、則神宮傳奏中御門大納言へ令持參處、他出、申入置候、夜入神事、

外宮禰宜職
任料

同廿一日、神事禰宜職二人款狀、敍爵三人款狀令披露、烏丸辨ハ一匣之調樣指南頼度候之由被仰、則予參談合申入、同日烏丸辨、中御門大納言ハ勅許之由仰給、
同廿九日、貞晨禰宜職任料傳奏廿五石代、奉行五石代、予請取分八石五斗代、今日請取、
同九月一日、全彦禰宜職傳奏貳十五石、奉行五石、予八石五斗代請取、
同十月五日、貞晨・全彦禰宜職宣旨遣之、
同六日、神宮傳奏中御門大納言ハ使者給、今度禰宜職出入可聞召之由、内ニ仰候間、目案ナ〔安カ〕ト取出、持參可申由仰給、則持參申處ニ、他出、申置歸也、
同七日、中御門ハ使者給、禰宜職三人相論、書物可有御覽仰之間、持參可申由也、三禰宜狀ハ忌中重服、輕服之内ニ、禰宜職補任申請書物例可上之由候間、御止置候也、
一十二月七日、外宮五禰宜、十二月七日朝卯刻、闕替注進之處、七日之亥下刻著、檜垣兵庫常勝第一、松木雅樂滿彦第二、松木新太郎爲彦第三、款狀來也、
同八日、中御門大納言へ禰宜職四人望申由申入處、服者之處聞可定由被仰、
同廿日、中御門大納言、二條殿ニテ參會、〔康道〕物語申入、二年服之者禰宜職望申事、成間敷義也、二番目ニ來款狀仁、不非服者可成トノ義也、則松木雅樂ニ可申付也、檜垣兵庫服者之

元和八年正月十一日

間不成、夜入神事、

同廿一日、滿彥款狀一通、奉行烏丸辨傳、

同廿四日、勅許、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲八

兩宮補任禰宜職事

(元和)
一同八年二月六日、

荒木田經晨補禰宜、

孝亮言上、

一元和八年四月十一日、

度會貞晨補禰宜、

孝亮言上、

一同八年八月廿一日、

度會全彥補禰宜、

孝亮言上、

一同八年十二月廿一日、

度會滿彥補禰宜、

孝亮言上、

皇太神宮權禰宜從五位下荒木田神主經延申、

勘例外宮之

略○中

一當二禰宜(荒木田)經晨、去元和八年、母服中補任之由、被載勘例歟、此條不審、非一候、元和七

年、神宮御役人中御僉議之上、被禁服中補任之儀畢、然處壬生官務殿知重服之人、而爭被

舉奏哉、但隱服氣而掠給宣旨歟、彼經晨之母儀者、在京之人、而死去之年月、於當官、無

知之人、今及忌服之御沙汰之刻、卒爾之勘文難得其意、若有支證者、可被相尋之候歟○中

以前條之依聽裁、所勘申如件、

寬文元年六月日

皇太神宮權禰宜從五位下荒木田神主經延申文

神宮惣御中

元和八年正月十一日

元和八年正月十一日

七〇

(包紙)
〔內宮〕神宮御中 守相

皇太神宮權禰宜從五位下荒木田神主守相者、父守隆就闕替職、雖上款狀一番、於五旬禁忌者、難望禰宜職之旨、經延父三禰宜經盛支申之由承畢、夫兩宮補任禰宜職之例、所載至要集并先規錄等明鏡也、故先度古今勘文一通令獻覽者也、然禁忌重服中、任禰宜職事、神宮規範也、何況守相被妨所望禰宜職條、不可有其理運、此度之御尋者、非讓職之禰宜之儀、只禁忌重服之中、被任禰宜勘例之事也、依之舊例近例所載左之勘文如此、

勘例

略〇中

近例

忌服中被補禰宜事、

內宮

略〇中

一當二禰宜(荒木田)經晨 元和八年二月六日任、守定替也、去年二月六日母死去、服中補任也、

兩宮禰宜職
ニ於テハ禁
忌中モ補任
妨ナシ

略〇中

右近例證文分明也、

元和年中比、神宮御役人中、禁忌服中之輩不可望禰宜職由、神宮使仁被仰付之由、不得其意、此旨於神宮口實無之者也、但經盛一家仁如何様之證文候哉、勘文尤難信用者歟、不審、非古今定例者、何以可證據哉、

略〇中

右數箇條之勘文者、二宮禰宜等規範習用所如件、

內宮 蘭田五禰宜

寬文元年六月廿一日 皇太神宮從五位上荒木田神主守清(花押)

內宮

神宮御中

(包紙)
一進上祭主殿 政所

內宮 氏富
禰宜中

元和八年正月十一日

七一

元和八年正月十一日

七二

今月五日之御飛札、同六日到來、各致拜閱候、仍者元和中時分、假服中之輩被補任禰宜職事、堅停止ニ被仰出之旨、今度經延方方勘例差上申ニ付、於神宮慥成證文在之哉、具ニ可申上之由、從御傳奏御意之由被仰下候、則神宮遂吟味候處、證文所持申方も無之、元和遺老之輩稀ニ御座候、當時禰宜禰宜等覺悟仕候者無御座候、此等之趣、宜預御披露候、誠恐謹言、

禰宜中

內宮 一禰宜

氏富(花押)

(寬文元年)
八月十七日

進上 祭主殿 政所

去六月四日、前二禰宜守隆、從率闕以後、其男權禰宜從五位下荒木田神主守相雖爲禁忌重服中、任傳錄鏡書之表面、指上款狀一番、所令臨望禰宜職、經延父經盛任及筆跡、可被妨紛守相禰宜成之底意、甚無道之至也、○中略
其一云、今月四日仁從上卿就有之御尋之儀、被遣飛書人、其意趣各所勘見之、去元和中

比、自京都被課渡神宮江禁忌重服之輩者、被補任禰宜職間敷旨制法有之由、於一禰宜里宿神宮中寄合雖沙汰之、其子細知人更莫之、被知覺三禰宜經盛一人儀、何哉、不審也、次從禁忌重服中補任禰宜、雖有繁多新古之例、依經盛支狀、守相禰宜成遲延歟、粵當二禰宜經晨男經見雖爲當時服假中、被任舊近例、彼替職所望之上者、禁忌服中之族、不可有、云不臨禰宜、殊以元和年中比、當二禰宜經晨、前三禰宜經員等者、自父母之重服、任禰宜其證據分明也、口宣案頂戴有之云云、○中略

內宮 蘭田五禰宜

寬文元年八月 日

皇太神宮荒木田神主守清(花押)

進上

祭主殿 御政所

除目、左近衛少將北畠親顯ヲ左近衛中將ニ、侍從岩倉具起ヲ右近衛少將ニ任ズ、

〔公卿補任〕五十二
寬永四年

參議正四位下源親顯、北畠
二十 同十一日、左中將、

元和八年正月十一日

七三

元和八年正月十一日

七四

岩倉具起

〔公卿補任〕五十三 寬永十九年
非參議從三位源具起、四十 同八正十一、少將、

小倉公根

〔公卿補任〕五十三 寬永十七年
非參議從三位藤公根、七十 同八正十一、右少將、卅九 歲、

楠笥隆朝

〔公卿補任〕五十三 寬永十三年
非參議從三位藤隆朝、三十 同八正十一、左少將、

正親町三條
公高

〔公卿補任〕五十三 寬永十六年
正四位下藤公高、二十 同八正十一、侍從、

花園公久

〔岩倉家譜〕
具起 具堯男、母園頭 同八年壬戌正月十一日、任右近衛權少將、二十 歲、
左中將基繼女、
〔諸家傳〕十三 下
花園公久 同八年正月十一日、右權少將、卅二 歲、

幕府、常陸古渡ノ丹羽長重ノ封ヲ陸奥棚倉ニ移シ、五萬石ヲ與フ、
〔東武實錄〕八

棚倉ハ新城

元和八年 是年、丹羽五郎左衛門長重、常陸國古渡采地二萬石ヲ轉シテ、奥州棚倉ノ城當代、食邑五萬

石賜ル、

〔寬永諸家系圖傳〕百十 丹羽

長政

長秀ひで五郎左衛門尉

長重ながしげ五郎左衛門尉

長重 同八年古渡をあらため奥州棚倉にをひて五萬石の地をたまふ、

〔寬政重修諸家譜〕六百九 十九

丹羽長重加賀、八年正月十一日、三萬石を加賜せられ、封地をあらため、陸奥國棚倉赤楯

をたまひ、すへて五萬石を領す、上 略

〔譜牒餘錄〕三十七 丹羽若狹守 丹羽五郎左衛門長重系譜傳略書

長重初名 鍋丸、同八年壬戌、改古渡、賜奥州棚倉五萬石、以成城主、此又益召褒舊士、中 略

覺

一元和八壬戌年、從台德院様、五郎左衛門三萬石御加増拜領仕、奉得上意、奥州棚倉赤楯

元和八年正月十一日

七五

赤楯ノ城

元和八年正月十一日

七六

之城取立申候、略○下

〔丹羽歷代年譜〕三長重

元和同七年、辛酉、五十一歳

或記ニ、今年正月十一日三萬石御加恩、棚倉城拜領ニ記有ト云、併家傳以前書呈ニモ、元和八年壬戌ト有之、何レニモ公呈ヲ用ル事故、今年ハ信用セス、翌年ニ載ル、

同八年、壬戌、五十二歳

月日、家傳不知、正月十一日カ被爲召於御前、重懇ノ命ヲ以テ、三萬石御加恩、都合五萬石、陸奥國

棚倉城地拜領之、因テ常州古渡ヨリ、今春、棚倉ニ移封ス、本文棚倉城ハ、長重、公應ヲ伺奉テ城築ス、

但棚倉ニ移封ノ處、先領主立花左近將監宗茂ニ御預ノ高橋將監事、光種宗茂本領ニ移封ニ因

テ、此將監ハ棚倉所附トナシ差置ル處、長重此度拜領ニ付、則所附ノ將監、長重ニ引渡

サル、因茲預置之、尤後年長重言上ニ付、將監、長重ニ被下置ニ因テ、小知ヲ授ケ家土

トス、

〔岩代丹羽家譜〕三長重

元和同八年、陸奥國棚倉ノ城ヲ賜ヒ、所領ノ地加ヘラル、三萬石ヲ加ヘ賜ヒテ五萬石

高橋光種

補同八年壬戌某月日、家傳未タ詳カナラス、或ハ正月十一日ト云、奥州棚倉ノ城地ヲ賜フ、直チニ常州古渡ヨリ移

ル、初メ立花左近將監宗茂棚倉城ノ主タルヤ、公命ヲ受テ、高橋將監ト云フモノヲ預ケラル、宗茂移封ニ當リ、高橋棚倉ニ留ル、今茲長重此地ヲ賜フヤ、復タ公命ヲ承テ之レヲ預

ケラル、後年長重官ニ請

テ、祿ヲ授ケ家土トナス、

〔丹羽家譜傳〕三長重譜傳

元和同八年壬戌 五十二歳

公奥州赤楯城ニ封セラル、五萬石ノ地ヲ領ス、

〔丹羽家譜傳〕四長重年譜

元和同八年壬戌 賜奥州棚倉五萬石、

〔丹羽系譜并年譜〕長重卿年譜

元和八年壬戌 五十二歳

拜賜奥州棚倉赤楯城、且加倍采地三萬石、都五萬石、
○幕府、長重ニ陸奥棚倉五萬石ヲ與フルコト、年月未ダ詳ナラズ、姑ク寛政重修諸家譜ニ據リテ、茲ニ掲グ、ナホ、秀忠、長重ノ沈淪ヲ憫ミ、常陸古渡ノ地一萬石ヲ與フルコト、慶長八年十一月是月ノ條ニ、幕府、長重ニ同國江戸崎ノ地一萬石ヲ加増スル

元和八年正月十一日

七七

元和八年正月十一日

七八

コト、元和五年是歲ノ條ニ、陸奥棚倉城主立花宗茂ノ封ヲ移シ、加増シテ、舊領筑後ノ地十萬九千六百餘石ヲ與ヘ、柳河城ニ居ラシムルコト、同六年十一月二十七日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔元寬日記〕三

(元和七年正月)

一 同十一日、略 同日、奥州棚倉五万石、丹羽五郎左衛門長重賜之、渠慶長五年之秋、與

長重石田三
成ニ與シ所
領ヲ沒收セ
ラル

石田、奉敵大權現、於越前大聖寺繩手、與前田利長合戰、石田被誅後、加州小松城被沒

收十万石、然今度賜棚倉、○下略、本書七年トナスハ誤ナラン、

〔轉封錄〕

(元和)

八年壬戌正月、丹羽五郎左衛門長重、自常陸古渡、遷陸奥赤楯、益三万石、爲五万石、築

城、

〔恩榮錄〕上

元和八年

正月十一日

加三万石 合五 奥州棚倉 丹羽五郎左衛門長重、常州江戶崎ヨリ

〔別本歷年雜志〕一

元和七辛酉年

正月十一日、丹羽五郎左衛門長重、奥州棚倉五萬石賜、是迄(マ)一萬石、○下略、本書七年トナスハ誤ナラン、

十六日、踏歌節會、

〔公卿補任〕五十

左大臣從一位(藤)同信尋、二十踏歌外辨、(内)

内辨近衛信尋

〔近衛家譜〕

號本源自性院信尋 同八年正月十六日、節會内辨、(元和)

〔涼源院記〕三

正月十六日、癸丑、雨降、午刻ヨリ天晴、○中略三毬打ノコトニカ、廣橋大納言今日之外

廣橋總光日
野資勝亭ニ
テ裝束ヲ著
ク

辨に付、拙子所ニテ可有裝束由候也、書狀并京諸白樽一ツ被送候也、則待申候由返札申候也、(廣橋兼賢)

乘燭時分廣亞將來臨、先吸物にて御酒進申候て、裝束著申候也、(信尋)近衛殿出門之由、(光長)竹屋辨告來被申候也、則參内、予も裝束著テ參内申候也、踏歌節會、晴、戊刻已前ニ陣儀始也、

陣儀

内辨著端座、近衛殿依先以官人令敷賦、杏ヲ仰、次外辨廣橋大納言(總光)・四辻中納言(季繼)・一上也中御門中納言(宣衡)・平相公卿(西洞院)・右大辨宰相(業光)・内辨ノ請益、依テ著仗座、次以官人

召外記、次内辨問諸司外任奏等、仰外任奏、次外記持參外任奏、入笥、有次内辨置笏、筥

外任奏

元和八年正月十六日

七九

上覽
仰詞

宣陽殿ノ儀

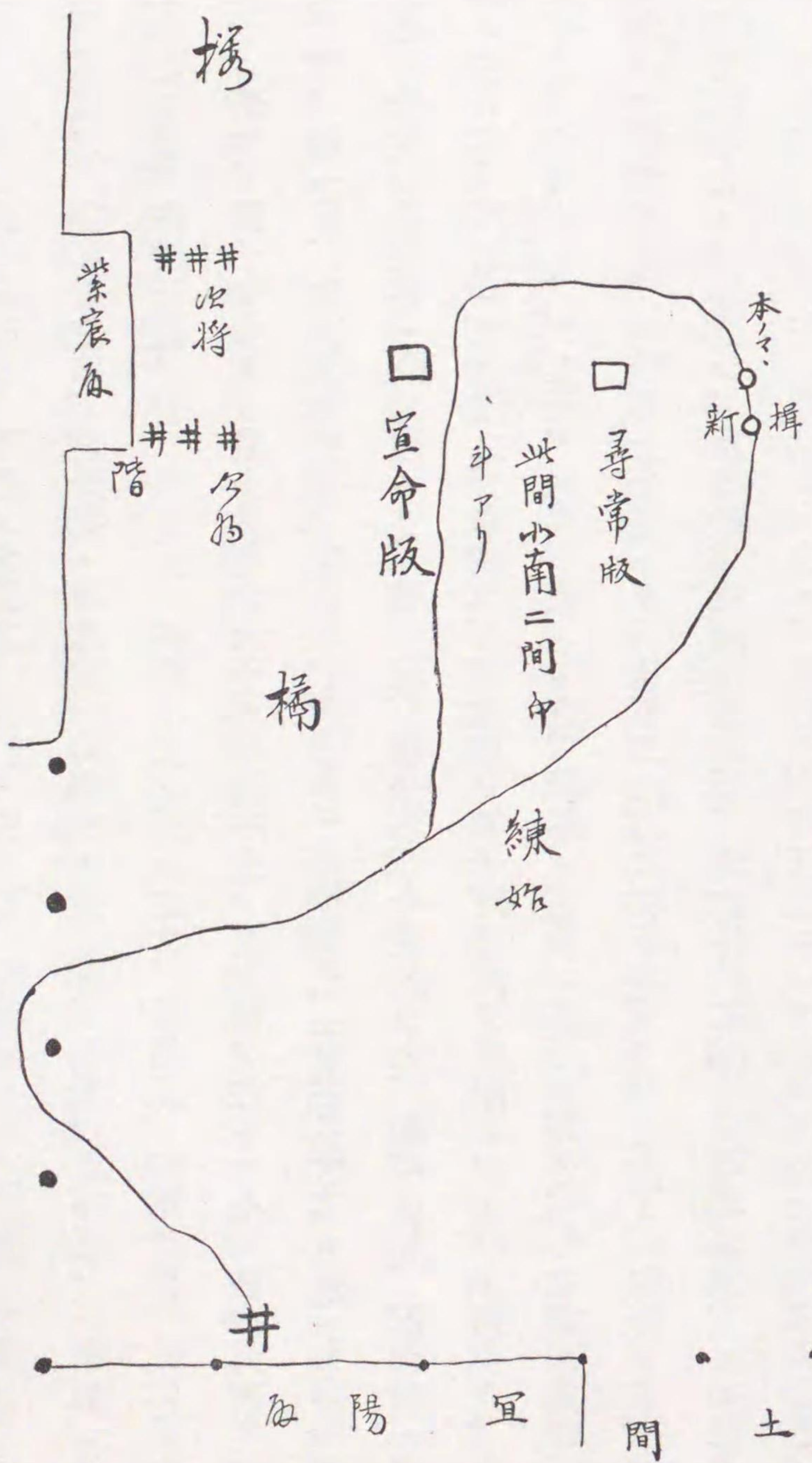
謝座
練座

元和八年正月十六日

八〇

ヲ引寄テ披見、高く取アゲズ、卷終テ目ス、外記退、次以官人招職事、奏外任奏、次職事
 奏畢返給、内辨笏ヲ置、笏ヲ引寄テ披見、今度上覽給テ、辨仰詞ヲ聞、卷畢テ職事ニ目ス、辨退、次召外
 記、返給奏、仰詞如職事、外記退去、次内辨向奥座、仰外辨、次諸卿起仗座、今度三木兩
 人居殘、次内辨召官人、令撤軾起座、内辨三木ノ座、時分至時、三木平伏、次參議起座、次内辨陣ノ後ニテ靴ヲ
 著、次次將引陣、次内辨著宣陽殿兀子、中央ノ間ノ北ニヨリ、兀子ヲ立、雨ヲチ際也、諸卿出外辨、輕ニテ上首召ミ
問、又式ノ管ヲ下セト仰、次内侍臨西櫺、次内辨立兀子深揖、次兀子立歸、一揖ノ入軒廊西第一間、西作
 合ノ東也、次中央ノ間ヲ進出、謝座、階ノ間ノ軒ヲ良ニ見テ練始、巽ニ進、次東行、練ノ
 間、次將中、家禮ノ衆、左冷泉中將・(爲懸)山科少將、(言總)次將ノ胡床ヲハナレテ、橋ノ木ノ陰ニ居
 左ハ東ヘ退也、

練了テ、軒廊中央ノ間ニ入テ、南面ノ練、カヘリミテ後堂上、次開門、官人申子細、次圍
 司著、官人申子細、次召舍人、二音、次少納言就版、西坊殿官人申子細、次内辨宣、大夫達召
 せ、少納言稱唯退、向外辨ノ第一揖、次外辨、公卿承明門ニ不入、月花門ノ南ノ廊ノ南ニ
 鴈列、無揖、次少納言、外辨出合一揖、此時外辨第一進出テ答揖、少納言退去、次外辨入承
 明門、庭中立標、異位重行、有揖、



正二位大納言・從二位中納言、同列ニ少ヲメリテ立、二位ノ宰相少ヲメリテ立、三位宰相
 大納言後ニ立標、
 次官人、

元和八年正月十六日

八一

群臣再拜

公卿御參列ト申し、次内辨宣云、敷尹、次造酒正授空蓋於外辨上首、次群臣再拜、

銀餽

又造酒正取空蓋、又群臣再拜、此度後ノ一拜、外辨ノ上首、乍居拜ニ一揖ヲ合、次外辨著

一獻

堂上座、總光卿端季繼卿與宣衡次餽餽、今度フンシユクモヨ、仰右大辨、三木下殿シテ催之、

國栖

復座、次飯汁物、仰三木、下殿シテ催之、復座、次一獻、仰參木、今度乍座、次國栖、内

辨下殿催之、御家禮之衆、總光卿・季繼卿・時慶卿・業光卿、内辨以前下殿ノ、軒廊ニ東

上南面ニ立、内辨下殿ノ時、各敬折、〔書〕内辨中央ノ間ニ立テ、召外記、國栖ヲ仰、則休息之

兀子ニ著テ、調子ヲ少聞、堂上休息之兀子、軒廊中央ノ間ノ東ノ柱ニヨセ、柱ノ外南ニ立

次二獻、如一獻、次御酒勅使〔召三〕、時慶卿、内辨後ニ進時仰ス、三木下殿ノ、外記ヲ召テ、取

交名、今度軒廊東第一間南面ニ立、召外記、取交名、今度始見之、如何ノ、軒廊第一間

西ノ柱ノ中、西面ニ立テ催之、本儀也、南殿南ノ簀子階ノ間ノ脇間ノ西ノ柱ノ西ニ立、作

法有之、如何ノ、〔按三獻之字落也〕次立樂、内辨下殿ノ催之、軒廊ノ兀子ニ著、暫聞之、作法如國栖時、

御家來之作法同前、内辨堂上先音トリ、次奏二曲、次坊家奏、〔白木〕立樂了、内辨下殿、〔家禮〕

同前、軒廊中央ノ間ニ立テ、取奏狀、次將有頼朝臣、取次作法如例、就弓場奏聞、ミミ昇

殿、次舞妓下殿ノ、左近櫻ノ良ノ方ニ、筵道ヲ敷、三返コレヲ廻、樂前大夫引導、筵道ノ

群臣再拜

銀餽

一獻

國栖

御酒勅使

立樂

坊家奏

舞

宣命

外ヲメクル、官務也、次舞有、先左右エンブ、其後各三曲、次内辨下殿ノ著陣、宣命・見

參祿法ヲ見、舞妓ノ拜ニ不逢、次外辨舞妓ノ拜有、〔西洞院時慶〕舞蹈也、平相公ハ兩段再拜ノ、舞蹈ノ

間ツクバテ待被申候也、舞妓拜過テ、平相公早出也、次内辨宣命奏過テ、堂上、次外辨昇

殿、次宣命使ヲ召テ、宣命ヲ給、中御門中納言〔宣衡〕内辨ノ後進、給宣命テ復座、次召右大辨宰

相、給見參祿法、給テ復座、次家禮ノ衆、内辨以前ニ下殿シテ、軒廊ニ立、次内辨下殿ノ、

宣命ノ拜有、外辨已下列立了、宣命使下殿、曲折ノ揖、無宣命拜、兩段再拜、宣命使版ニ

著テ揖、披見了、後ノ拜ニ一揖合、更一揖ノ退也、異位重行、内辨左大臣ノ後ニ總光卿列

立、次ニ如謝酒之時候、拜了、内辨已下向祿所退出、承明門ノ下祿所ヲカマヘ畢、

〔孝亮宿禰日次記〕七

正月十二日、己酉、晴、烏丸頭左中辨踏歌節會出御無之由有示、

十六日、癸丑、雨降、踏歌節會、奉行烏丸頭左中辨光賢朝臣、内辨左大臣、〔近衛殿〕外辨廣橋

大納言〔總光〕・四辻中納言〔季繼〕・宣命使〔宣衡〕中納言・西洞院宰相〔時慶〕・右大辨宰相〔業光〕・少納言〔西坊城〕・

次將左〔親朝臣〕・親顯朝臣〔北島〕・基音朝臣〔龜田〕・右重秀朝臣〔山科〕・言總〔久世〕・通式、大外記師生朝臣、左大

史孝亮〔兼樂前役、依中務也〕・少外記生職、史亮盛、少内記英芳、史生官掌召使等、同七日節會、畢雨

出御ナシ

西洞院時慶
早出

元和八年正月十六日

八四

降、

〔弘誓院亮孝記〕二

正月十六日、丑癸、雨降、踏歌節會、奉行藏人頭辨光賢朝臣、公卿左大臣、公、信尋廣橋大納言、總光・四辻中納言季繼・中御門中納言宣衡・平宰相時慶・右大辨宰相業光、少納言遂長、辨之、次將左爲賴朝臣・親顯朝臣・基音朝臣、右重秀朝臣・言總・通式、

〔踏歌節會〕○官内廳書
陵部所藏

〔端裏書〕
元和八正十六

踏歌節會」
元和八正十六

踏歌節會

内辨

〔近衛信尋〕
左大臣

外辨

〔總光〕
廣橋大納言

〔季繼〕
四辻中納言

〔宣衡〕
中御門中納言

〔時慶〕
西洞院宰相

〔業光〕
右大辨宰相
柳原

次將

左

上爲賴朝臣冷泉

親顯朝臣北畠

基音朝臣園

右

重秀朝臣庭田

言總山科

通式久世

少納言

遂長西坊城

元和八年正月十六日

八五

元和八年正月十七日

八六

〔端見返〕
〔奉行〕
〔鳥丸〕
光賢朝臣

踏歌節會任例、可被沙汰之狀如件、

元和八

正月十日

〔鳥丸光賢〕
頭左中辨〔花押〕

四位大外記殿

因幡守源朝臣爲重

美作守藤原朝臣慶泰

右件等人任符未出、

元和八年正月十六日

十七日、甲寅、舞樂御覽アリ、

〔涼源院記〕三

正月十七日、甲寅、晴、雪微ニチリ、風ハケシ、今日、如例年有舞御覽、○下略、三毬打ノコトニカ、

鶴庖丁

ル、本月十八日ノ條ニ收ム、

〔孝亮宿禰日次記〕七

正月十七日、甲寅、晴、禁中舞御覽、〔龜〕鶴庖丁有之、忠利參之、

十八日、乙卯、小三毬打アリ、

〔涼源院記〕三

正月十五日、壬子、晴、申剋方雨降、粥過テ吉書、左義長、二、如例年、

十六日、癸丑、雨降、午刻ヨリ天晴、三條殿若上來臨也、〔實秀室日野氏〕晚ニ歸宅也、今日侍從左義長ノ

竹ヲ東山ニテ切セ候也、主馬ニ申付候也、○下略、踏歌節會ノコトニカ、ル、本月十六日ノ條ニ收ム、

十七日、甲寅、晴、雪微ニチリ、風ハケシ、○中略、舞御覽ノコトニカ、ル、本月十七日ノ條ニ收ム、侍從左義長進上、

〔孝亮宿禰日次記〕七

正月十五日、壬子、晴、○中略、小槻孝亮亭三毬打ノコトニカ、ル、下ニ收ム、禁中吉書、三毬打、忠利參、

十八日、乙卯、晴、

追而、十七日可被進之由仰云々、宿禰拂底之間、先内ニ申入候也、

來十八日三毬打三本可令持參給之由、被仰下候、各得御意候也、

元和八年正月十八日

八七

吉書

宿禰拂底

元和八年正月十九日

正月十四日

忠利

八八

頭中將殿
頭辨殿
左衛門佐殿

以上雲客六十四人相催之、加忠利、六十五人也、

○春日社以下三毬打ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔春日社司祐範記〕

元和八年記
大和

一十四日、爆竹作之、竹從大柳生上之、

〔孝亮宿禰日次記〕

七

正月十五日、壬子、晴、三毬打如例、

○下略、禁中三毬打ノコトニカ、ル上ニ收ム

十九日、丙辰和歌御會始、

〔涼源院記〕

三

小槻孝亮

春日社

歌題

出御

講師

講衆

御製

正月十四日、辛亥、朝曇、少雨ソ、キ、晴候也、午刻以後雨ソ、ク也、○中略禁裏御會始之

御觸、三條每山有春、

十八日、乙卯、晴、午刻以後雪散、又雨少ソ、キテ晴、○通村中院へ明日御會始ノ詠草を遣申候、

則返札有、歌も直來候也、諸白一樽・鮑十五、中院へ遣申候也、○下略

十九日、丙辰、晴、○中略夕飯過テ、禁裏御會始ニ伺公候也、燭ヲトリテ始候也、

主上、先清涼殿ニ出御、次左大臣、左ノ方南式部卿宮、北、次文臺懷紙ヲ盛、山科少將上段ノ次

へ持參也、懷紙重候事、飛鳥井中將雅胤朝臣、講師中御門大納言、資胤講師頭中將、朝臣

發聲四辻中納言、季繼卿

講衆三條新大納言・予・廣橋大納言・三條中納言・伯二位、殿上人飛鳥井中將・高倉中將

・冷泉中將・綾小路少將等也、季繼卿歌ハ飛鳥井中將發聲、中御門中納言・清閑寺中納言

・日野中納言・平宰相・左大辨宰相・右大辨宰相・前宰相成・右衛門督時直・頭辨・右

衛門佐・北畠少將・菅少納言爲適朝臣・内藏頭・阿野侍從・白川侍從等也、座主宮・曼殊

院宮・青蓮院前大僧正詠進也、御會席ノ作法如例年、主上ノ御詠、

うすくこく遠近かすむ曙に見るもえましき春の山かな

元和八年正月十九日

八九

元和八年正月十九日

九〇

七返、宮・一上ハ三返也、

入御
酒肴ヲ賜フ

入御之後、清涼殿ニテ御酒アリ、折二合・ウスカワ・鯛エサン、先アイニテ一返、次五度ニテ二返、又五度にて二返、硯ノ蓋ノ肴出申候也、後マテ御酒之衆三條西・中御門大納言・予・廣橋大納言・日野中納言・廣橋宰相・右衛門督等也、令沈醉退出候也、

御會始不始已前、非藏人部屋ニテ有御酒、アイニテ五盃、廣橋大納言・白川・中御門父子・三條中納言、後ニ又日野中納言・廣橋宰相被來候也、

〔孝亮宿禰日次記〕七

正月十九日、丙辰、晴、禁中和歌御會始、忠利參仕、題如山有春、コトニアリ、〇本書、如山トナス、ハ、毎山ノ誤ナリ、

御製

うすくこく遠近かすむあけほのにみるもゑまましき春の山かな

〔京都御所東山御文庫記録〕甲百九十二
公宴御會始

同八正十九、毎山有春、

〔參議時直卿集〕

毎山有春公宴御會始、
正月十九日、

山くの春のけしきはおかしけにみする霞のたゝすまひかな

○月次和歌御會等ノ本年中ニカ、ルモノ、便宜左ニ合敘ス、

〔涼源院記〕三

正月廿三日、庚申、朝ノ間少雨ソ、ク、今日三條西殿^ト、來月ヨリ禁裏御歌會一日、實條、

九日、光廣、十六日、通村、三ヶ度御歌會可有之間、何レに成とも伺公可仕由、御觸候也、則

大タカニ日付名字ヲ書付持來候也、十六日ニ予名字ヲ書加申候也、通村トアル下ニ書申候、

又廿四日ハ御觸無之候へとも、伺公可仕由御觸候也、

二月二日、戊辰、晴、風猛、朝霰少散、略、中今日ハ稽古ノ和歌ノ御會にて、日野光慶中納言伺公申

候也、題ハ梅近聞鶯と申題也、中納言歌談合ニ來候也、

御製 聲なからうつすハかりにうへしより鶯ならず宿の梅かゝ〇下ニ收ムル後水尾院御
集ニハ、むめかえトアリ、

咲初るにほひととめて鶯や軒端の梅に先うつるらん 光慶

九日、乙亥、晴、午刻以後ヨリ夜入、雨微ニ二時ミソ、ク也、略、中今日御稽古ノ和歌御會

にて、冷泉中將・藤谷（爲賢）、詠草談合ニ來、御題ハ山寒花遲、

十六日、壬午、晴、略、中禁中御稽古ノ御歌會にて、伺公候也、御會以前、伊勢上人參内申

元和八年正月十九日

九一

二月以後每
月二日九日
十六日ニ和
歌御會ヲ催
サル

二月二日稽
古ノ和歌御
會
御題

御製

九日

十六日

元和八年正月十九日

九一

候也、進上十帖一本・千度御秋、御學問所にて、和歌御會アリ、御人數、予・中院中納言・北
畠少將・久我中將・小倉侍從・園侍從・岩藏侍從等也、
御題中院被出候也、

柳靡風懷紙一首

御製 花ならぬ柳か枝に吹と猶おもひきたるゝ露の朝風

資勝

おのつからなひくとみれば春風の吹音ゆるき庭の青柳

通村

長閑なる春の色よりなへて世のなひく姿をみする青柳

親顯

きたるゝハ姿なりとも置露を心してふけ風の青柳

通前

吹音ハ枝にしつけき春風をめにこそみすれ青柳のいと

公根

ふかぬまもなひく梢に風ミへてたへすきたるゝ青柳のいと

公久

吹かせに枝もなひきて淺綠春の柳の色そえならぬ

具起

打なひく柳のいとハ春風に吹くる度にむすほゝれけり

清書相濟、夜ニ入、讀上ハカリ有之、懷紙文臺ノ下へ取下之次第ニヨミアケラレ候也、北
畠少將也、ヨミ了テ、二ツに折、左ノワキニ置時、中院中納言御前ニス、ミ、御製ヲ取、
親顯ニ被渡候也、則披テ、文臺ノ上ニ置、ヨミアケラレ候也、
晝内ニノ番所にて、コハ飯にて御酒アリ、晚非藏人ヘヤニテ御振舞アリ、
三月二日、戊戌、晴、夜ニ入少雨ソ、ク、
略○中禁裏御稽古之御歌會有、光慶短尺二首、

時 雨

うつる日のかけもくもらて降に猶時雨や松の風もきくらん

寄野戀

人へいさ涙やいかていはた野のつゆかゝる身とたゝんうき名ハ

元和八年正月十九日

九三

御酒
御振舞
三月二日

月次和歌
鶏鳴ニ退出

十六日、壬子、時之雨降也、午刻ヨリ晴、○中略、下野日光山東照社奉幣使發遣日時、定ノコトニカ、ル、三月十六日ノ條ニ收ム
右陣之儀之内、中院中納言今日和歌御會伺公、御待候へとも、遅候故、被成御始候て可致
伺公由被申候也、退出候て、則伺公申候也、予手前殘被置、短尺之題、花風・不逢戀也、
燭取て後、御振舞有、歌出來て、詠草を上、其後令清書、奥へ上、各退出候也、御學問所
へも、伺公不申候也、御人數ハ、予・中院中納言・小泉○北畠少將（親題）・白川侍從・小倉侍從
・岩藏侍從・花園侍從等也、主上御用にて、各歌清書相待、鶏鳴之時分退出也、
廿四日、庚申、晴、今日和歌御月次有、清涼殿にて御座候也、題ハ靜見花虫寄虫、
八條殿・近衛殿御伺公、

五月十六日、辛亥、晴、今日禁裏和歌御會、故障申候也、

廿四日、己未、午刻以後雨ソ、ク、禁裏御會有、虫、○下略、曼殊院良恕親王法樂和歌會ノコトニカ、ル、二月二十
五日ノ條ニ收ム

六月廿四日、己丑、今日ハ和歌御月次御會有之、拙子ハ曉ヨリ腹中下申候、故障仕候也、

廿七日、壬辰、今日ハ御稽古ノ和歌御會にて、伺公仕候也、○中略、御衣御取置ノコトニカ、ル、六月二十八日ノ條ニ收ム、
御會も遅始候て、夜に入申候、御懷昏也、

七月廿一日、乙卯、晴、今日御稽古之和歌御會にて、午刻ヨリ參内申候也、御會御學問所
にて有、出題中院中納言、拙子卷頭（被力）可仰出候也、新秋露・寄秋月戀二首也、讀上岩倉侍從、

廿四日、戊午、晴、今日御月次和歌御會ニ伺公申候也、（智仁親王）八條殿・伏見殿・竹内御門跡・智
恩宮御伺公也、出題飛鳥井中將所勞にて無伺公也、初秋風・女郎花・漁舟火三首、懷紙也、
（院脱）
（良純親王）

八月六日、庚午、禁裏御稽古歌會有由也、光慶伺公也、

廿四日、戊子、○中略禁裏日次御會、午刻伺公申候也、（曼殊）万壽院宮・智恩院宮・三條大納言・
中御門大納言・予・廣橋大納言・正親町三條中納言・阿野中納言・清閑寺中納言・日野中
納言・平宰相・廣橋宰相・白川二位・藤右衛門督時直・頭中將・右衛門佐・北畠少將・
庭田少將・甘露寺辨・勸修寺辨・綾小路少將・白川侍從・阿野侍從等也、御當座三十首也、
山科少將・主上・竹門主・智恩院宮・三條西大納言二首也、予ハ題見月也、御會過テ後、
清涼殿北ノエンニテ御酒有、讀上無之、

九月六日、己亥、朝少雨、終日曇、夜ニ入雨降、今日禁裏和歌御會有、中納言伺公也、
題、（浦月）野寺也、

十七日、庚戌、雨少ソ、キ、午刻ヨリ晴、○中略又明日禁裏御會御延引之由申來候也、

元和八年正月十九日

九六

廿二日、乙卯、略○中 西三條亞相ヨリ、廿四日禁裏御會遅參不可然由、御□□也、
廿三日、丙辰、晴、和歌奉行より、明日御會御延引之由、申來候也、○下略、廣橋兼勝病ムコト等ニカ、ル、十二月十七日、兼勝薨ズル條ニ收ム、

〔資勝卿記〕一

十月廿四日、丙戌、晴、夜ニ入雨降申候也、略○中 今日禁裏御會御延引之由、申來候也、○下略

〔孝亮宿禰日次記〕七

七月廿四日、戊午、晴、禁中和歌御會有之、忠利參仕、

〔後水尾院御集原名〕春

梅近聞鶯

元和八二(三御當座イ) こそなからうつすはかりにうへしよりうくひすならす宿のむめかえ

柳靡風

元和八二(六) はなくらぬやなきかえたに吹も猶おもひきたるゝ露のあさかせ

〔後水尾院御集原名〕秋

槿不待夕

六月二十七

元和八八(六、御當座) はなよりもしハしをくるゝそれもなを夕かけまたぬ朝かほのつゆ

〔禁中御會〕

元和八年六月廿七日 禁裏御月次御會

螢知夜

御製

くるゝよりもえて涼しき螢かな夏の月なき庭のひかりに

待戀

待もうし心にしめぬ契ゆへよひすこしてハ人のとふやと

權大納言(日野)藤原資勝

ほのかにもあらハれ初て飛螢暮行ほとの色やわくらん

さりともとたのめて待もいたつらに更はてなハと思ふくるしさ

權中納言(中略)源通村

暮るよりおのれもえつゝうは玉のやみの螢やまとをわくらん

とふとても更てハあけん今ハたゝ中くゝあすの暮をまたハや

左近衛權少將(北畠)源親顯

元和八年正月十九日

九七

元和八年正月十九日

つゝあまるおもひを蘆の葉かくれに夜を時とも飛螢かな
更るをも猶さりととも待よひの心さはかす鐘のをとかな

右近衛權中將源通前(久世)

かけまたてくらぬをのか夜をしる八月をそきまの螢なりけり
しらせはや下まつほとはよひのまも千世を一夜の我おもひそと

右近衛權少將源通式(久世)

あつき日にあらそひかねてよるへもえひるへけたるゝ螢とふらん
をとつれぬ人をへをきてはてはたゝ待夜につらき鐘のをと哉

侍從藤原公根(小倉)

難波江の蘆まへはやくくるゝ日ををのか時とやほたるとふらん
いそかるゝ我心よりまつほとはまつよひなからあかつきのかね

侍從藤原公久(花園)

またきよりのれやよるをいそくらし入江の螢かけそみたるゝ
偽もあらしとたのむ夕暮の心たかはす人のとへかし

中院通村ノ
和歌

烏羽玉のよるのひかりへのかうへにありとみせつゝ飛螢哉
たのめしへけふならぬかとたとる也人待ほと更るつらさに

侍從源雅陳(白川)

暮るより光をみ〔せぶ〕て草むらにもゆる螢はよるそみたるゝ

この暮といひしなからもたのまれぬ人の心をなをそうたかふ

〔後十輪院殿中院通村御詠〕夏

夏風

元和八四十六、月次御會、
吹風へ松に木たかきこゑもあれとなひく若葉のうへにこそみめ
同、かせそ猶ふたおもてなる花に吹このてかしへに夏はつれなき

夏野

元和八四十六、月次御會、
あふひ草名をなつかしき一夜ねんすみれつしもおなし野原に

〔後十輪院殿中院通村御詠〕雜

夏旅

元和八年正月十九日

元和八年正月十九日

元和八四十六、内月次、
たひ衣朝夕すゝみ分そ行あつき日影の中やとりして

〔参議時直卿集〕

梅近聞鶯 禁中御月並二月二日、

おらせしの梅になれきく鶯の聲社花のみかきもりなれ

〔附録〕

〔後水尾院御集原名鷺集〕 雜

浦奈

元和八七二、

まつかせも秋にすゝしく音かへてうらめつらしき志賀のから崎

わかか浦やみちくる八重の塩風に奈もや波の音をそふらん

〔後十輪院殿中院通村御詠〕 戀歌

寄鳥戀

元和八六十、家當座、

まれにきてふすかとすれハ鳴こゑにとりあへすあくるみしかよもうし

同、

なへて世の別にも似す山とりのおのへへたてしよはのかへるさ

〔後十輪院殿中院通村御詠〕 夏

夏祓

元和八六十、月次私會具起亭、
水鳥の鴨の河瀬も色かへて今日ハみそぎのあさのしらゆふ

同、

あつさをもはらひやすつる大ぬさのよるせ涼しき波の夕かせ

〔後十輪院殿中院通村御詠〕 秋歌

初鴈連雲

元和八六廿五、

みねこゆるつはさハおなしそらなから雲にわかるゝ初鴈のこゑ

同、

秋かせのおのへの雲のみたれかとみしやそらめのはつ鴈のこゑ

〔涼源院記〕 三

八月十五日、己卯、晴陰不定、月曇申候也、早々に中院にて、(石清水)八幡法樂愚詠短冊清書候て

遣候也、其後又伊与大樽一ツ・コンキリ五本遣申候也、自午刻、中院へ参候也、精進振舞、

― 夜更歸宅、中御門黃門・白川二位・北畠少將・久世少將・岩藏侍從・印せい・伊益等

也、精進振舞二膳有、中酒七返、其後吸物にて、又御酒有、夜更歸宅申候也、

十月九日、辛未、晴、過夜曉寅刻、夢想、鶴ノ題ノ心アリト覺へ申候、

齡さへともふ宿においにけり君か齡の千よもかきらて

元和八年正月十九日

〔參議時直卿集〕

試筆 元和八年正月一日、

めくみある君か心をくみてしれととよみき給ふ千世の初春

元日雪をみて、色そひとつつけふはむ月に六の花

松有佳色 近衛殿御會始廿日、

いつまでもいつはの松の緑なるかけをみえかに年はつまし

郭公類 二月朔日、於中院初卯、(通村)

時鳥名のりもしけき曉や明つけ鳥の聲をかりても

月

影やなをみかきそまさる玉敷の庭にくまなき秋のよの月

二十日、丁幕府、具足祝及^レ比連歌アリ、

〔元和年録〕坤

(正月)二十日、御具足之祝、御連歌發句、

松の葉やあり敷にへん世々の春

紹之

〔柳營御連歌〕

○連歌叢書所收

元和八戌正月廿日

松の葉や有敷に經ん代々の春

紹之

二十二日、己未、秀忠、大澤基宿ヲ遣シテ、歳首ヲ賀シ奉ル、

〔涼源院記〕三

正月廿二日、己未、終日微々雨降候也、○中今日江戸將軍様と禁裏へ年頭之御使者參候由

承候也、大澤少將御使也、(基宿)後承候也、

〔孝亮宿禰日次記〕七

正月廿二日、己未、晴、自將軍、年始御使大澤少將今日參内也、忠利依召參之、自大樹御馬代銀百

枚、自大納言殿五十枚參云々、

〔本光國師日記〕三十

正月六日、大澤少將殿御上、廣橋前内府へ書狀遣ス、板伊州へも書狀遣ス、持明院殿へも

書狀遣ス、久右方へも書狀遣ス、織田丹後殿(長政)へ書狀遣ス、有樂様御遠行絶言語之由吊狀也、

元和八年正月二十二日

同武藏殿(尚書)へも状遣ス、休也・玄端・茂庵・千賀有藏・冲野長藏・福田長藏へ、六人へ折紙上ス、右三通之状ハ、極月晦日之日付也、殘ハ何も正月七日之日付也、大澤殿へ捻相添、もたせ遣ス、

大澤基宿退
京ノ後遠江
ノ所領堀江
ニ在リ

同日、大澤少將殿遠州在所(二月八日)、二月四日之状來、三月末迄在所へ逗留可申との書中也、此便宜、廣橋内府正月廿四日之返書來、

伊豫松山城主加藤嘉明ノ江戸ノ亭、火災アリ、

〔梅津政景日記〕十一

正月廿二日、一櫻田ニ夕火事出來、加藤左馬殿御壹人、自火之て無殘御燒被成候、一天氣吉、

〔リチャード・コックス日記〕 (歐文材料第一號譯文)

一六二二年二月二十二日〔正月二十二日〕○新曆三月四日ニシテ、元和八年正月二十二日ニ當ル、(徳川秀忠) 昨夜皇帝の宮殿の附近にて大なる貴族の邸宅燒失せり、彼の名はイオ若しくはエヨ○伊豫の國主加藤左馬殿なり、

〔涼源院記〕三

正月廿八日、乙丑、晴、○中(日野光應) 中納言來臨候、江戸加藤左馬助屋形去廿二日曉燒亡之由物語候也、○下略、中和門院參内ノコトニカ

廿九日、丙子、晴、江戸加藤左馬助屋形燒亡爲見廻中納言・加式部殿、人を下申候間、拙子も書狀遣候也、又唯心様(日野輝實)へも書狀進上、○下略

秀忠、放鷹シテ獲タル鶴ヲ、出羽久保田城主佐竹義宣・陸奥仙臺城主伊達政宗等ニ與フ、

〔梅津政景日記〕十一

正月廿二日、一從公方様、御鷹ノ鶴御拜領、即爲御禮、御登城被成候、御供致、それと上野殿・雅樂殿・太炊殿へ爲御使參候、一天氣吉、

正月廿三日、一御鷹ノ鶴御振舞有度由、御年寄衆へ御意被成候へハ、廿九日ニ御出可有由、次兵(島田利正)へ殿方御内儀候、一天氣よし、

正月廿四日、一來ル廿九年寄衆御出ニ付、進藤久右衛門・權右衛門・植田又四郎被召寄候、三人ハ可參由、七大夫(金剛、後喜多長能(忠之))ハ黒田右衛門殿之て御能御座候間、參間敷由、御包丁人市介、是も可參由、何も返事有、一天氣よし、

佐竹義宣

義宣年寄衆
ヲ招ク

庖丁人

獻立

小謠

料理人

正月廿九日、一晚御拜領之鶴御振舞被成候、御出之衆酒井雅樂殿・本多上野殿・土井太
 炊殿・永井右近殿(直勝)・阿部備中殿(正次)・酒井讚岐殿(忠勝)・板倉周防殿(重宗)・松右衛門殿(松平正久)・伊丹喜之助殿(康勝)・
 延壽院道三法印(曲直瀬正紹・今大路親清ノ兩人カ)・鳥居士佐殿(成次)・朝倉筑後殿(宣正)・板倉内膳殿(重昌)・米津勘兵(田政)・殿・久貝忠左衛門殿(正俊)・
 ・神谷縫殿(正次)、こん立之様子、木具御本膳ニ、金ノかわらけ・つほ・さら、二ノ膳ニ金ノか
 い炮・金ノ小桶、三ニ金ノ地かき向請有、御着色々、題ノもの三ツ、くぎやう貳十、削花・
 ふき花有、おり仁がう、後たんこひのうとん、其後御ゆつけ、未ノ刻と成ノ刻迄何も御座
 被成候、進藤久右衛門・同權右衛門・植田又四郎、小鼓うち壹人・笛壹人・太こ壹人・地
 謠壹人參候て、くれは(吳服)・盛久はやし二番有、其外御着、小うたい數々有、一天氣よし、
 同三日、一進藤久右衛門・同權右衛門・植田又四郎、廿九日の御禮として、御小袖三ツ(二月)
 々、被下候、笛ふき・小鼓うち・太こうち・地うたい壹人、此四人ノ所へも御小袖仁(マ)つ
 宛被下候、御使之ハ江尻軍兵(清次)へ・古谷掃部右衛門指越申候、一天氣よし、
 同六日、一夜ニ入雨ふる、一若君様御料理人磯野市右衛門(徳川家光)、御年寄衆御出之時被參候
 爲御禮、御小袖三ツ被遣候、禮ノ返狀有、使菊地新藏人、

〔譜牒餘録〕十七 松平陸奥守之七

伊達政宗

一(元和八年正月)同月廿二日、従台徳院様、内藤外記(政重)爲上使、御鷹之鶴政宗拜領之、即爲御禮、登城仕候、

〔寛政重修諸家譜〕七百六十二

伊達政宗(陸奥) 八年正月二十二日、上使もて、御鷹の鶴をたまひ、○上 下略

〔伊達山治家記録〕二十九

正月廿二日、己未、内藤外記殿上使トシテ、御鷹ノ鶴公へ賜フ、即チ御禮トシテ登城セラ
 ル、英勝院殿ヨリ御使トシテ、丸毛内匠殿御出、晚鳥居左京亮殿忠政・松平丹波守殿・
 久世三右衛門殿・道三法印・宗馭ヲ饗セラル、

〔細川家文書〕三

一其方へ御鷹之鶴・御兵粮拜領之由、御前衆へ禮申遣候事、○上下略、正月廿一日附、細川忠
月ノ條 二收々、利宛、同忠興書狀全文ハ、正月是

〔細川家記〕二十一 忠利一

一正月廿五日、
 一此御鷹之鶴二三日已前ニ被爲拜領候間、祝候而致進上候、被成御料理候ハ、可忝候、并
 子籠鮭五尺進上仕候事、○忠利ヨリ三齋
へノ書狀ノ内、

細川忠利

元和八年正月二十六日

一一〇

(元和七年)
十一月廿一日

土井大炊助

利勝(花押)

本多上野介

正純(花押)

酒井雅樂頭

忠世(花押)

成瀬隼人正殿

竹腰山城守殿

〔天英公御書寫〕

○梅津本

○上略、江戸城普請ノコト、家光、川越ニ放鷹ノコト、秀忠、西丸移徙ノコト、徳川忠長、榊原忠次、黒田ノ亭ニ移徙ノコトニカ、ル、二月十八日、正月二十三日、五月十九日、正月十日ノ條ニ收ム、黒田筑前子之右衛門所へ廿六日ニ祝言候、大柿之甲斐守殿之御娘を御城へよはせられ候、御城より被遣候、○下略、江戸城普請ノコト等ニカ、ル、二月十八日ノ條ニ收ム、
元和八年 正月廿日
(佐竹義宣) 御名乗御居判

〔梅津政景日記〕 十一

取子

佐竹義宣相
馬利胤ノ亭
ニ赴キテ行
粧ヲ見物ス

(正月)
同廿六日、一松平甲斐守殿御娘、公方様御取子ニ被成、御城と黒田右衛門殿へ御祝言有、

申ノ刻、屋形様(佐竹義宣)之も爲御見物、相馬大膳殿(利胤)へ御出被成候、一朝四ツ時迄雨ふる、それと

天氣よし、

〔本光國師日記〕 二十

九

(元和七年三月七日)
一同日、黒田筑前殿と捻來、右衛門佐殿縁邊ノ儀被仰出候之付而、公方様へ御祝儀申上候吉

日之儀、尋之來ル、則返書并吉日別紙之書付遣ス、案左之有之、使黒田勘十郎と申者也、

御祝言御禮被仰上吉日、

一三月十日、壬戌、張、

右

三月吉辰考之、

右引合一重之折之書テ、返書相添遣ス、使者ノ名ハ黒田勘十郎ト申也、

〔寛政重修諸家譜〕

四百二 十五

黒田忠之(元和)八年、これよりさき、仰によりて大久保相摸守忠隣か女に婚を約すといへとも、故ありて離婚し、のち台徳院殿の御養女(松平忠良女)を娶るへき旨仰をかうふり、正月二十六日、

元和八年正月二十六日

一一一

黒田忠之初
メ大久保忠
隣ノ女ト婚
ヲ約ス

元和八年正月二十六日

一一一

婚儀を整るにより、來國俊の御太刀、吉光の御脇指をたまひ、家臣等にも時服・白銀等を恩賜せらる、○寛永諸家系圖傳 忠之傳所見ナシ、

〔寛政重修諸家譜〕

五十 松平

忠良甲斐守

女子 母は長女酒井家次女におなし、台徳院殿の御養女となり、松平筑前守忠之黒田に嫁す、

〔郡文書〕

坤

一源姓長政嫡男松平右衛門佐忠之、生國筑前國那珂郡福岡也、

一元和七辛酉年正月廿六日、從台徳院様、松平甲斐守息女、酒井備後守・松平石見守被副興、

右衛門佐被下、此時國俊御腰物・吉光之御脇差拜領仕ル、○本書七年トナスハ誤レリ、

〔幕府祚胤傳〕

三

秀忠公征夷大將軍、淳和獎學兩院別當、源氏長者、隨身兵仗宣下、

御養女

松平久松、甲斐守忠良女、爲御養女、松平筑前守忠之被嫁、

〔黒田家譜〕

十四

家康女龜姫
加納殿

忠良ト家康
秀忠トノ關
係

元和八年、長政五十五歳、忠之二十一歳、忠之、前年元服の時、公命によつて、大久保相摸守忠憐マ、の智に成給ふ、忠之の室に約し給へるは、實は相摸守の子加賀守の息女なり、加賀守早世によつて、相摸守の息女とす、東照宮の御息女加納殿の御むすめ加賀守に嫁して生給ふ所の息女なり、忠隣、息女の婚嫁を行はんとて、其装具の用意甚盛なりしとかや、然るに大久保氏故有て流罪に行はれしかば、義絶すべきよし公命有て、其事やみぬ、その後松平甲斐守忠良の息女を公方秀忠公、御養子になされ、正月二十六日忠之に嫁娶せしむ、息女今年十七歳、忠良は久松佐渡守俊勝の孫、因幡守勝光の子なり、勝光の母、俊勝の内室は、水野右衛門大夫忠政の御息女也、初徳川廣忠卿に嫁し給て、家康公を御誕生あり、故有て御離別の後に、俊勝に再嫁して、勝光を生給ふ故、勝光は家康公の異父同母の御弟なれば、忠良は秀忠公の御いとこなり、江戸御本丸より輿を出させ給ふ、酒井備後守・松平石見守を輿添とし給ふ、長政の宅まで來られける、長政自身輿を請取給ふ、此時秀忠公より、忠之へ國俊の御太刀、吉光の御脇指を下さる、また秀忠公より、長政の家老・物頭まで、残らず白銀・御小袖をたまはる、扨從・臺所の司等に至るまで、御小袖を下されける、長政も婚禮の儀式結構し、金銀を用ひ給ふ事、甚ゆたかなりしとかや、

〔黒田長政事蹟〕

元和八年正月二十六日

一一三

黒田長政忠
良女松平氏
ノ興ヲ迎フ

元和八年正月二十八日 是月

一一四

八年、秀忠、松平忠良ノ女ヲ養ヒ、忠之ニ嫁ス、長政、親ク新婦ノ興ヲ迎フ、
二十八日、^乙中和門院、^中參内セラル、

〔涼源院記〕三

正月廿八日、乙丑、晴、^{○中略、加藤嘉明ノ江戸ノ亭火災等ノコトニカ、ル、本月二十二日ノ條ニ收ム、}今晚禁裏ニ始テ御幸候也、
北ノ御門ヨリ、

是月、豊前小倉城主細川忠利ノ父三齋、^忠興、江戸ニ新亭ヲ營ム、

〔細川家文書〕三

已上

其地我々新屋敷作事之儀ニ付、吉住半四郎下候間、申候、

一極月廿三・廿五・晦日之書狀、何も相届披見候、方々之返事如書付請取候事、

一其方・^(六九)新發智無異儀著、公方様・^(磯井氏)御臺様、御禮被申上、仕合無殘所候由、珍重存候事、

○細川光尚秀忠及比同室淺井氏ニ調スルコト、元和七年十二月十四日細川忠利江戸參觀ノ條ニ見ユ、

一鹽引三尺給候、喜悅候事、

一藤泉^(藤堂高忠)之返事、此方へ直之來候事、

忠利ノ子光
尚秀忠及比
同室淺井氏
ニ調ス

土井利勝
井上正就

一越前宰相殿于今其地へ無御越候由、如何成行可申候哉、替儀候者、態可承候事、

一其方へ御鷹之齋・御兵粮拜領之由、御前衆へ禮申遣候事、^{○秀忠、放鷹シテ獲タル鶴ヲ、諸大名ニ與フルコト、正月二十二日ノ條ニ見ユ、}

日ノ條

一^(土井利勝)大炊殿・^(井上正就)主計殿、別而御肝煎之由、是又禮申遣候事、

一公方様、西丸へ被成御移、大納言様ハ川越へ被成御座候由、得其意候事、^{○秀忠、西丸移徙ノコト、家光、}

川越ニ放鷹ノコト、五月十九日、正月二十三日ノ條ニ見ユ、

一内之申候、其地作事手傳之儀、其方へ被連候弓・鐵炮・長柄之者など之可被申付候、其

分て不足候者、^(吉住)半四郎申次第、小倉より可被下候、さ候ハねハ作事成不申候、可被

得其意候、恐之謹言、

正月廿一日 宗立^(花押)

^(押紙)「元和八年江戸」

内記殿進之候

〔細川家記〕十五

忠興九

一元和八年壬戌正月、江戸御屋敷ニ御作事被仰付候ニ付而、忠利君より中津に被仰上候御書

元和八年正月是月

一一五

愛宕下
木下延俊ノ
亭

之内、
一愛宕之下御屋敷、地形高候間、引さけ可然候由、左近被申上候處、左近次第ニ可然様之
と被仰越候様之被申候、木下右衛門殿長屋之地形ニ、一尺六、七寸高ク御座候、うき土之
而御座候間、五六寸ハひきく可罷成候、一尺高分ハ不苦様、我等ハ存候、其上土を引候
て、すて場もおく、事之外可爲御造作と奉存候事、

同廿一日、吉住半四郎被差越候節、忠利君之御書之内、○書狀略ス、上ニ掲グ
ル細川家文書ニ同ジ、

〔本光國師日記〕三十

一同日、(正月廿九日)細川忠興返書遣ス、自筆之而認遣ス、廿八日之日付也、案左之有之、

○中略、江戸城修築ノコト、日光山東照社修理ノ
コト等ニカ、ル、全文ハ二月十四日ノ條ニ收ム、

一尊老様當年ハ當地へ可被成御下向之由奉得其意候、併緩之と御國元之御座候而、御養性
被遊候様之可被仰出かと存候、於御下向ハ、節之可得尊意候間、拙老式ハはや御下を
待かね申候、誠之朝夕御床敷さ計て候、

一當地御拜領之新御屋敷御普請有之躰之御座候、其近所節之罷通候、扱之所以下見事成御
屋敷、御仕合御手柄之而御座候、○中
略

正月廿八日

金地

三齋尊老様
尊答

末次政直、平藏商船ヲ呂宋島ニ派ス、

〔英國印度事務省文書〕海軍記録集 第三十五號 (歐文材料第二號譯文)

一六二二年十一月二十三日○新舊十二月三日ニシテ、より一六二二年七月五日○新舊七月
十五日ニシ
テ、元和八年六
月七日ニ當ル、に至る英蘭聯合防衛船隊の航海日記

略○上

英船はるす
ぐろーヴ号
まるぐえれ
す島ヲ出航
ス
むーん號同
島ニ來著ス

一六二二年二月二十四日、○新舊三月六日ニシテ、元和
八年正月二十四日ニ當ル、本日、我がバルスグロウヴ號はマル
ヴェレス島を出帆して北に向ひたり、そはパンナム號本船隊ノ旗艦ナリ、と共に海上を遊
弋せんが爲めなり、又本日、ムーン號○いざりす船ニシテ、は北方より來りてマルヴェレス
本船隊ノ副旗艦ナリ、島に來著せり、

二十四日より三月二日○新舊十二月一日ニシテ、元
和八年二月一日ニ當ル、まで、我等は海上を巡邏して追跡活動を行へ
り、

三月二日、本日、我等は一隻の日本のジャンク船に遭遇せり、同船は(肥前日野江城主松倉豊後守重政カ
豊後殿立)に長崎の

ばるすぐろ
ノ印船
遭ス船
朱印状
檢ノ點

割算
れしゆてやへ

元和八年正月是月

一一八

知事たる平藏殿(長崎代官末次政直)に屬し、マニラに向ふ所なり、

三月三日和八年二月二日ニシテ、元日本、日本のジャンク船の船長が我等の許に乗船し來り、

日本文の皇帝(徳川秀忠)のゴシエネ御朱印即チ異國を携行せり、我等はこれを一見の上、同人を釋

放してマニラニ向はしめたり、同人はわが船長への贈物として葡萄酒一樽・鮪一樽・ビス

ケット一壺を持參せり、該船長の名はタウギ・スキアモン殿、彼の商人の名は(濱田小左衛門カ)フアマダ・

コサモ殿にして、彼の通譯は(五郎右衛門カ)グロヤモン殿といへり、

略○下

攝津國武庫郡瓦林ノ住人毛利重能、京都ニ於テ、割算書ヲ刊行ス、

〔割算書〕

夫割算それわりさんと云ハ、壽天屋邊速しゆてやへれんと云所に、智惠萬德ちゑまんとくを備そなへれる名木有、此木に百味ひゃくみ之含靈かんれいの菓

一生一切人間の初、夫婦二人有故、是を其時二に割初より此方割算と云事有、八算ハ陰、

懸算ハ陽、争陰陽いんやうに洩事あらん哉、大唐にも増減そうちげん二種算と云事有、况我朝いはんやにをひてをや、

懸算・引算馬と撰出正實法と號、儒道佛道醫道何れも算勘之專任、

割算目錄之次第

八算同發	一	見一同發	一
歸一倍一同發	一	四十四割	一
四十三割	一	小一斤聲	一
糸割	三	掛 <small>か</small> て吉分	三
絹布割	三	升算積 <small>ますつものり</small>	十二
金割算	四	借銀借米	四
米賣買 <small>うりかい</small>	六	檢地算 <small>けんち</small>	七
普請割 <small>ふしん</small>	五	町見様	二

已上拾六ヶ條小數五十五

八算之次第

- 一一 天作五
- 一二 逢二進一十
- 三一 三十一

元和八年正月是月

一一九

元和八年正月是月

三二 六十二

逢三進一十

四一 二十二

四二 天作五

四三 七十二

逢四進一十

五一 加一

五二 加二

五三 加三

五四 加四

逢五進一十

六一 加下四

六二 三十二

六三 天作五

六四 六十四

六五 八十二

逢六進一十

七一 加下三

七二 加下六

七三 四十二

七四 五十五

七五 七十一

七六 八十四

逢七進一十

八一 加下二

八二 加下四

八三 加下六

八四 天作五

元和八年正月是月

八五	六十二
八六	七十四
八七	八十六

逢八進一十

九一	加下一
九二	加下二
九三	加下三
九四	加下四
九五	加下五
九六	加下六
九七	加下七
九八	加下八

逢九進一十

右八算のこゑかくのことく割申候、若聲をわすれたる時、二のたんに二二天作五と云ハ、

十匁の物二ツに割候へハ五匁なる、又三のたんに^{三三十一カ}三三十一といふハ、十匁を三ツにわり候へは、三匁つゝにして一匁ハあまり申候によりて三十一と云也、四のたん、五のたん、六の段、七のたん、八のたんといふとも此心也、但八の段の時七匁有を八七八十六と云時に八十七か八かとわすれ申候時、八を八と六十四といふ時に七匁と六分たり不申候、此六分を下へさけて又下算くわへ、八のこゑにて割申候、いつれの段もかくのことく仕候也、

見一之次第

置不置時者、見一無當作九一と云、此心ハ百目を十一人にわり候へといふとき十人には十匁つゝにて候へ共、十一人と云時九一に作ハ、拾人に九拾目として、一人分ハ殘十匁の内にて引申候時、一匁のこり申候、二十一も、二も、三十一も、二も、四十一も、二も、五十六八十八七と云とも右の心得同前也、

歸一倍一之次第

引不引時ハ、歸一倍一と云、此心ハ右作九一と仕時に、十二人にわる時二人分下の拾匁にて二人引申候時たり不申候時、上の九十目の内十匁下へさけて八十目と二十目になし、扱下の二十目の内にて二人分八匁つゝ十六匁引申候、是も二十の段も、三十のたんも、四

見一同發

發歸一倍一同

十のたんも、五十の段も、六十のたん、七十、八十、九十の段と云共、右の心にて同前也、見一の段を引そろはんと云、又惣まくりとも云也、

四十四割

金子四十四割次第

一二 加下十二

二四 加下二十四

三六 加下三十六

四九 加下四四

逢四十四進一十

四十三割

銀子四十三割次第

一二 加下十四

二四 加下二十八

三六 加下四十二

四九 加下十三

逢四十三進一十

小一斤撃

小一斤之次第

一退 六二五 二二 二五

三一 八七五 四二 五

五三 一二五 六三 七五

七四 三七五 八天作五

九五 六二五 是小一斤と云へ、百六十目一斤の物を何程という時、代を如此割算也、

糸割

唐目を日本目に直次第

一唐目一斤へ、百六十目有、日本目一斤へ二百五十目有、唐目何百斤成共有時、日本目になをす時、六四のこゑをかけ申候時日本目になり申候、斤より下に二五をかけ申候時、何百何十目としれ申候、又日本目か何百斤なりとも有時、唐目之仕度と云時へ、右の六四にて割申候時、唐目之成申候、斤より下へ一六を懸申候時、何百何十目としれ申候、是陰陽也、

かけて吉分

割算に懸てはやき分

一十二半に割時八のこゑにて懸申候、又十二半をかけ申候時八にて割申候、これはやき算にてかくのことくよし、

貳つに割物ハ五のこゑを懸申候、二ツをかけた(き)いに五にて又わるもよし、
 一二十五に割物ハ四のこゑを懸てよし、二十五を懸申候物ハ、四のこゑにてわりてもよき、
 かくのこゑにてかけてもよし、

絹布割

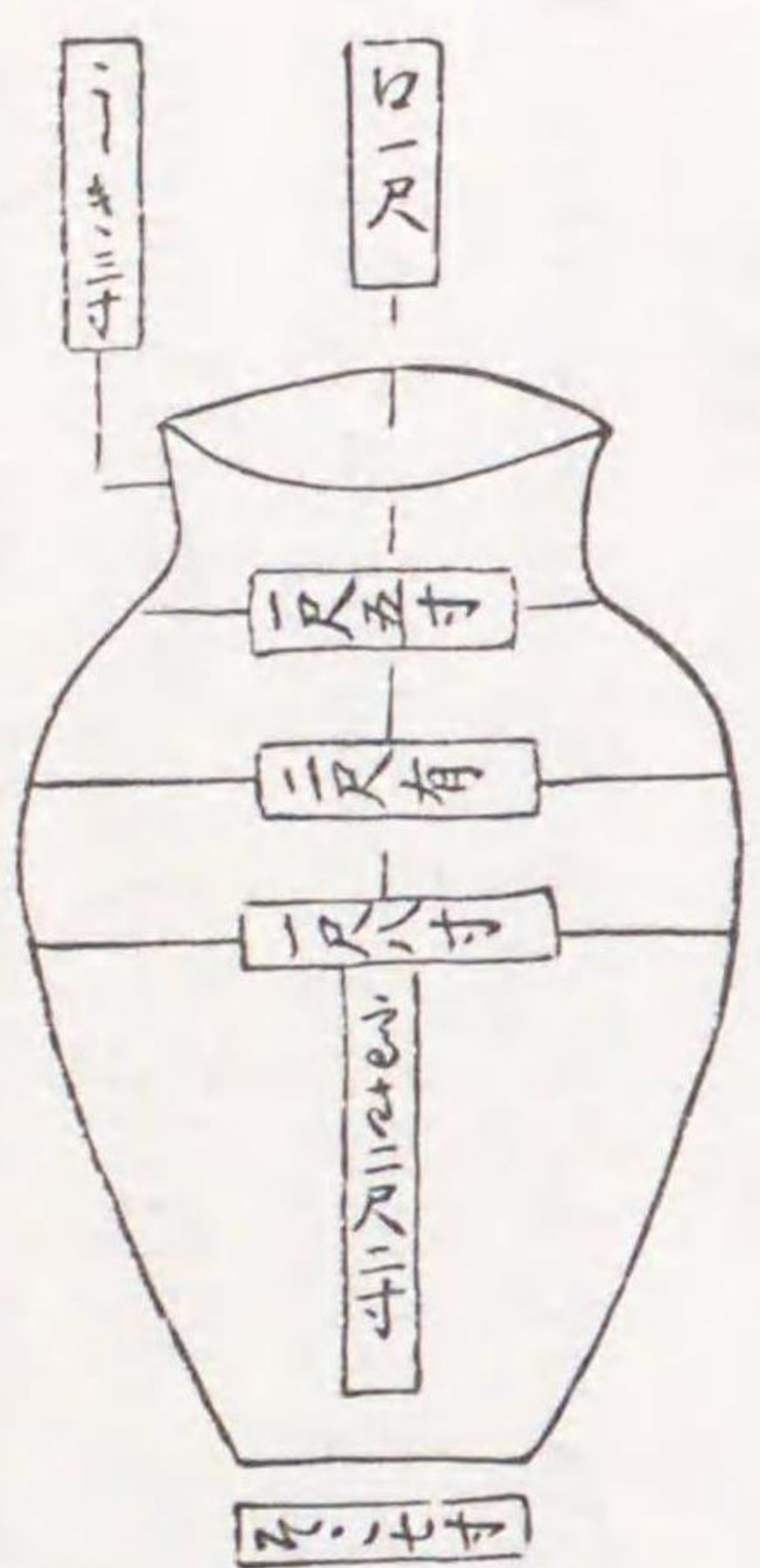
絹布の次第

一ぬの・きぬ・うめん・つむぎ・はふたゑハ、一たんの代をきへめて、何尺成共かい申候
 尺を中ニ置、きれ有ハ代を懸、一たんの長さの尺にて割といふ也、
 一又何尺成共かね有時ハ、かねの目を中ニをき、かね有ハ、惣の尺をかけ、惣の代にて割
 と云、此二ツの算陰陽也、是はいつれのわりにもよき也、
 一糸・わた(綱)・つなそ以下にいたる迄、代有ハ惣の目をかけて惣ノ代にてわると云算よし、た
 とへハいと八貫三百五十目有、此代銀壹貫七百五十目といふ時、いと五百三十五匁かい申
 候時、五百三十五匁とをき、壹貫七百五十目をかけ、九三六二五ニ成申候時、いと目八
 貫三百五十目にて割申候、百十二匁一分二厘六毛に成申候、是五百三十五匁の代也、

升積算

物に升かす入次第

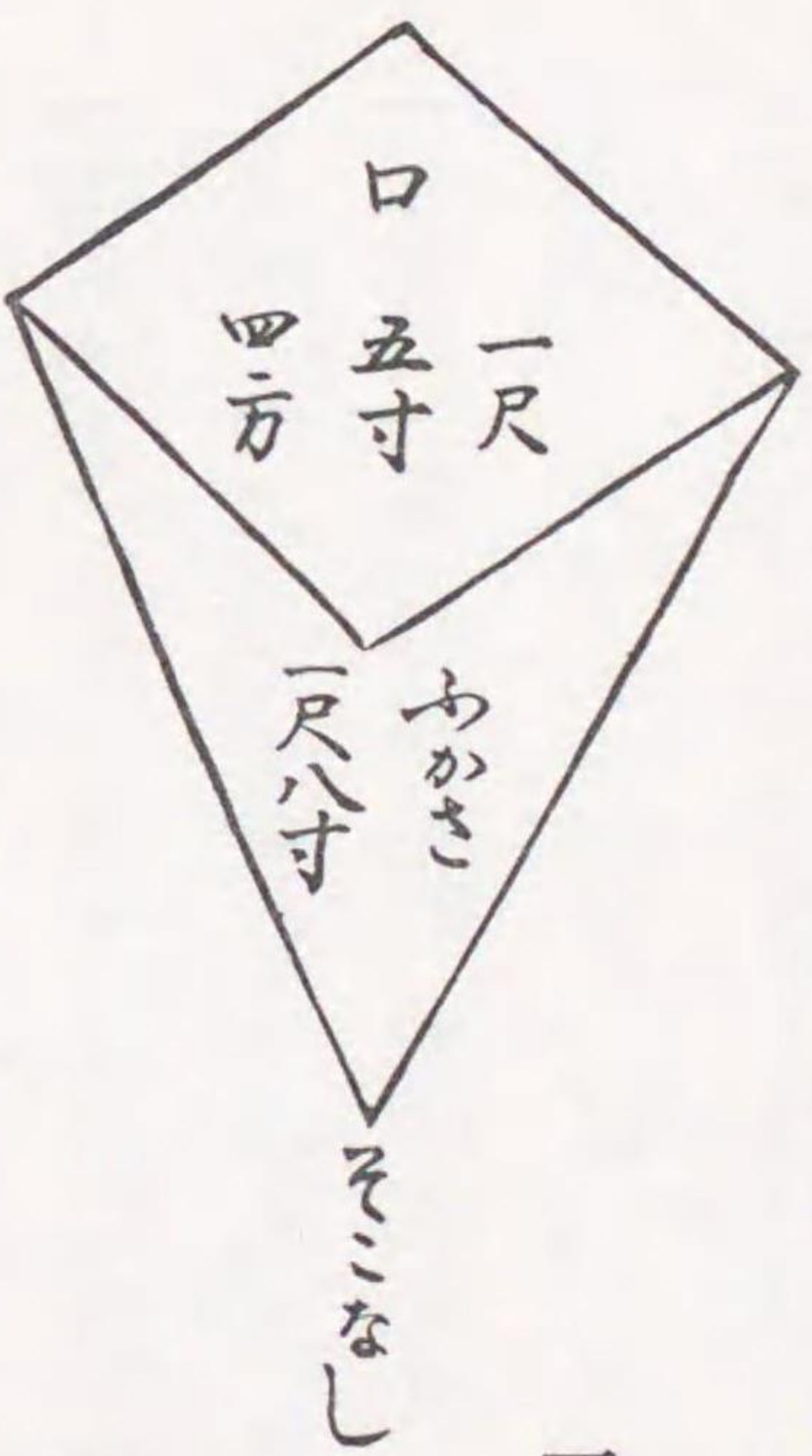
一京升ハ口五寸四方、深二寸五分有、さしわたし兩ニをき、かけ、ふかさかけ、六二五有、
 是一寸四方の物六十二半有也、
 一四角成物に升かす入申候ハ、たつ(縦)・よこの寸兩ニをき、懸、高さ懸、さて十六を懸、升
 かす成也、
 一丸き物ハさしわたしの寸兩に置、懸、高さかけ、十六を懸、さて八をかけ申候時、升か
 すに成也、
 一おけハ口のさしわたしとそこ(底)のさしわたし一つに置合、又二ツにわり、その算兩ニ置、
 かけ、さてたかさかけ、十六を懸、八をかけ申候時、升かすに成申候也、
 一三角ハ一方の寸兩に置、懸、高かけ、十六を懸、四十三を懸、升かすに成、うろこかた
 共云也、



一つほの分ハかくのことくいく所にても寸を取申
 候、則つほのかたに右つほを見て寸を四ツ所に
 てとり申候、扱かたの寸一尺五寸を兩ニ懸二二
 五になる、二尺兩ニをき、懸、四に成、一尺八
 寸を兩ニをき、かけて、三二四になる、七寸を

兩之置、かけ、四九になる、四口合九九八になる、これ四ツに割、二四九五有、扱をか
さ二尺二寸を懸、五四八九に成、十六を懸、八をかけ、升かす七斗二合五勺九才之成申
候、口一尺と三寸のたかさに十六と八を懸、三升八合四勺、右合七斗四升一合、

一右のことくつほのさし渡の寸とられざる時、廻の寸を取てその寸を三一六にわり、さし
渡之成申候、かくのことく仕候也、



一右口一尺五寸と兩之をき、懸て、ふかさ一尺八寸
を懸、十六をかけ、さて一ツとをき二九六にてわ
る時に三三七八三に成、是を右算に懸時、二斗一
升八合九勺才入、

一丸き物、右のことくしりとかりたる、右の算と同前にして、右の外之八を懸申候時、升
かす之成也、

一玉のことく丸き物を四方の物之なをすハ、玉のまはり五尺有、四のこゑにてわる時一二
五に成、これ一尺二寸五分四方たかさも同寸なり、一二五と兩之をき、二度懸、さて十
六をかけ、升かす三斗一升二合五勺入申候也、

一玉のことく丸きさしわたし一尺有物ハ、一寸四方物のかす之して、大かた百有時ハ五十
に仕候なり、あらし算也、こまかにする時ハ一寸四方の物百ハ、四十九三分二毛九糸有、
かくのことく也、

一玉のさしわたしの寸一尺あれハ、まはり三尺一寸六分有、さし渡二ツにわり五寸有、ま
はり三尺一寸六分二ツ之わり、一尺五寸八分有、是に右の五寸をかけ七九之成、これに
よりて丸き物之七九を懸、八をかけてもよし、

金(銀)かねかへの分

一金子三百八十八匁有、此金の内百三十二匁、四十五匁の位なり、四十五之割、二枚九兩
三三三之成、二百九匁七十三匁の位也、七十三之割、二枚八兩六三之成申候、四十七匁、
五十七匁の位也、五十七之割、八兩二四五之成申候、三口合六枚六兩二下八有、右の金
三百八十八匁を割申候時、大判一枚之付五十八匁六分かへ之當也、

一金子銀かへ申候時、八兩かへの九兩かへと云ハ、金一匁之銀子八匁又九匁の事也 金を
をき、八兩かへの時ハ八をかけ、九兩かへの時ハ九を懸申候時、銀目之成申候、
一銀子、よきかねに、あしきかねをかへ申候時、内引といふハ、二わりと云時、あしきかね之

八を懸申候時によきかね成申候、一わりと云ハ九をかけ、二わりと云ハ七〔脱アルカ〕を懸申候、
一同外引と云時、二わりと云時ハ、十二にわり、三わりと云ハ十三に割也、是うちそとなり、

借銀

借銀利足の次第

一壹文子と云ハ、百目一ヶ月に銀子一匁ツ、の利と可心得、二文子と云ハ、百目一ヶ月に銀百目〔符カ〕二匁ツつもの利也、二匁とをき月のかすをかけ、さて本銀にその算をかけ申候也、

一田舎ハ月きりにかさす、一年何わりとかし申候、是ハ三わりといふ時ハ、本を置、三を懸申候時に、利ふんしれ申候、本共にしる時は、〔十〕一三をかけ申候、何年成共、如此年のかすほとかけ申候也、

一たのもしと云ハ、たとへハ十人有ハ百目つつもちより、九百目有、そのとうにんは出さす、かくのことく、次の月より百目ハ八匁つもの利をそへ九月にてすミ申候、九月の利七十二匁の利足、此利何わりとあたると云時、一より九迄をき合四十五有此四十五にて七十二匁をわる時一分六りんの月子とあたると也、但人かすおほきほと利そくやすくあたり申候、一大工作れう高下の算と云は、上の大工千人、中の大工千人、下の大工千人有、此銀三匁

目と云時二わりさかりの次第也、一壹貫目、一八百卅三匁三分、一六百九十四匁四分四厘、これを三口合二貫五百廿七匁七分四厘、三貫目を右の合にて割申候時に、上の大工一貫百八十六匁八分一厘、中の大工九百八十九匁四も、下の大工八百廿四匁一分七厘六毛、右二わりにしてかくのことく、何わりと云共かくのことく也、

米賣買

米の賣買の次第

一銀一匁ニ米三斗五升と云時ニ米百五十三石五斗有、此かねといふハ三五ニわり申候時、銀四貫三百八十五匁七分一厘ニ成申候、同銀十匁ニ三斗五升かへの時ハ、銀三貫五百七十五匁有、此米何程といふハ右のかねニ三五をかけ申候、米百廿五石一斗二升五合にな
る、何種有ても如此、〔田舎〕み中ハ米一石を銀何十目と云、たとへハ一石ニ付て二十八匁といふ時、かね三貫五百七十五匁有、米何程といふハ、右廿八にてわる時、米百廿七石六斗七升八合六勺ニ成申候、かくのことくも有、

一同二石廿八匁の時、米三百五十六石五斗有、此かね何程と云ハ、右廿八を懸申候時、銀九貫九百八十二匁ニ成申候、大小共に如此、
一江戸ハ小判にて何石かへといふ、たとへハ一兩ニ二石八斗五升と云ハ小判何兩成共をき、
二八五をかけ申候、是江戸のさう〔相場〕は也、

元和八年正月是月

一三三

一壹兩より下ハ分くたき、米くたきと云事有、かねの所之あらハしをき申候也、

檢地の次第

一たつ・よこのけん兩をき、かけ、扱三にて割申候時何段いくせと成、せより下ハ三にてわらす、何十歩何と云也、

一丸き田中のさしわたし兩にをき、かけ、さて七九をかけ申候時、歩に成、さて右のこと

くに三割申候時、何段いくせと成申候、

一同丸き田を何間之何間と書付時、指渡の間を長さにし

て、又さし渡しの間之七九を懸て、そのさんをはゝに

書付申候、

一此よこて二ツ合廿一間五尺有、此廿一間之六のこゑを

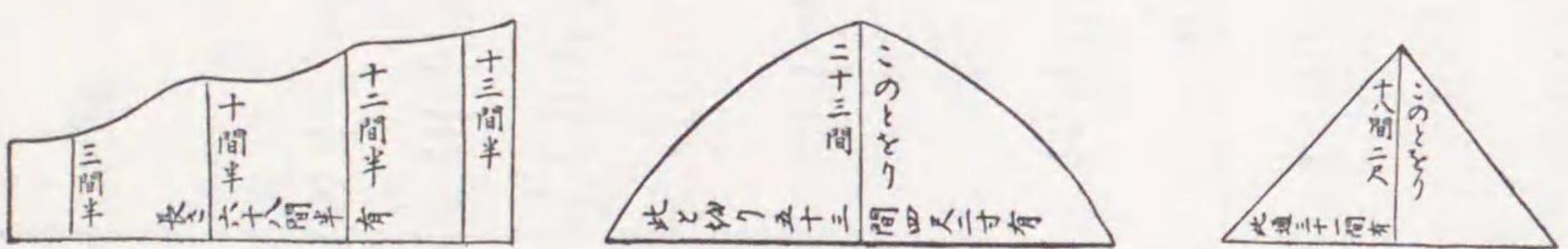
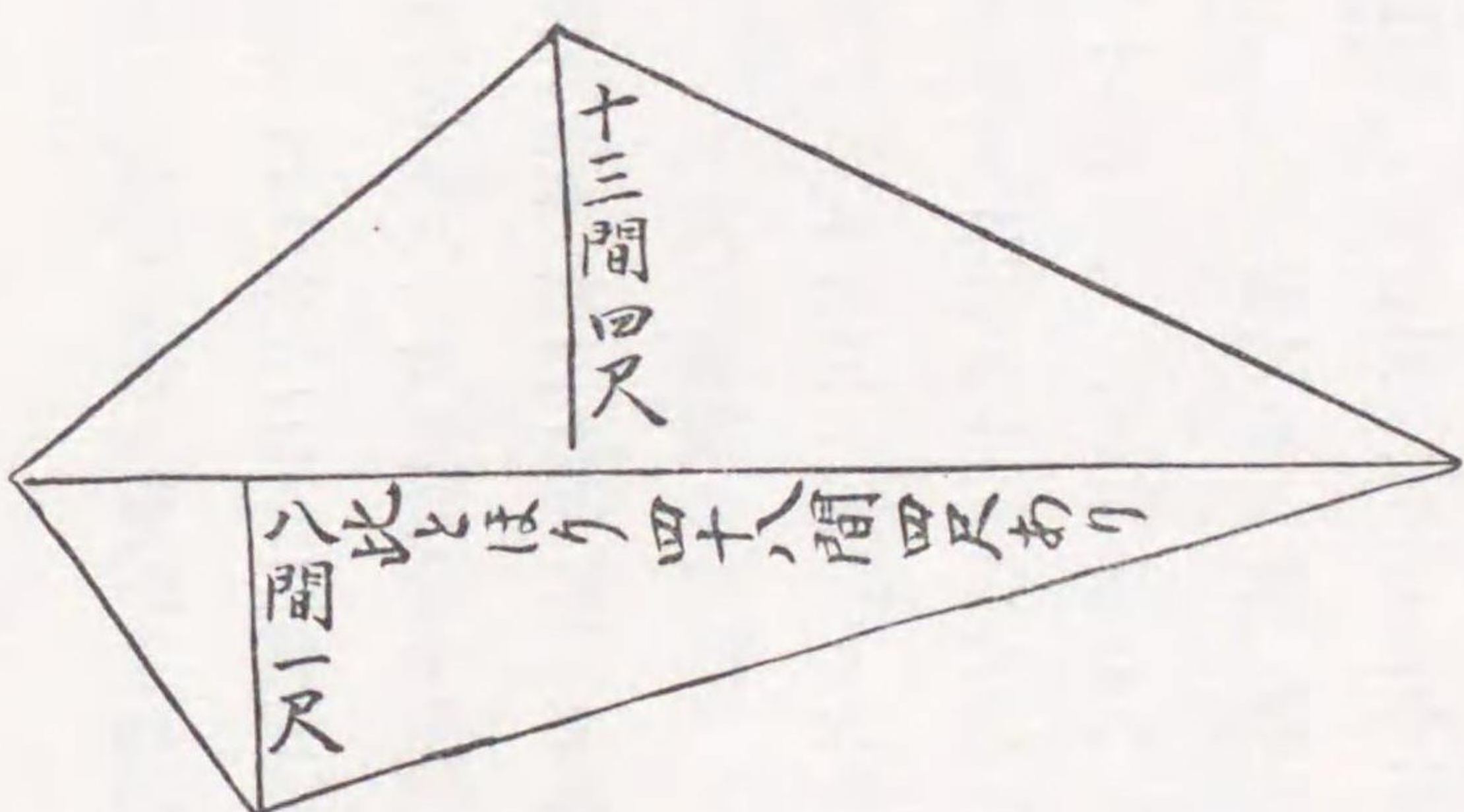
懸申候時一三一に成、二ツ之わり六五五之成、扱長さ

四十八間四尺有、同四十八間之六のこゑを懸時、二九

二に成時、右六五五を懸申候時、一九二六之成時、

六にて二度わり申候時五百三十一歩二八有、三にて割

時、一段七畝二十一歩之成申候これ也、



元和八年正月是月

一三三

一是うろこかたと云、此中の、十八間二尺有十八間之六をかけ、一一之成申候、是を二之わり申候時、五五之成、扱長さ三十一間をかけ、一七下五之成、六にてわり申候時之二百八十四歩一六六之成也、

一うろこかた共見へすかくのことく成有、五十三間四尺二寸此四尺二寸六のこゑにて割時、五十三間七之成申候、三分一すて三分二入申候、是十五に割時、三十五間八之成申候、扱二十三間をかけ申候時八百二十三歩四に成申候、三にて割時之二段七畝十三歩四之成申候、如此なり、
一かくのことく成田有、いく所にてもけんを打、一ツにをき、そのかす程之又割、是をき合て四十間有、又四ツ之割十間之成、長さ六十八間半をかけ、六百八十五歩有、三にて割二段二せ二

元和八年正月是月

一三四

十五歩有、いろ／＼のなりとも有、いづれも四角成やうに見つもあり、いてたる所ひき、入たる所へもひきならし申候事せんなり、

普請割

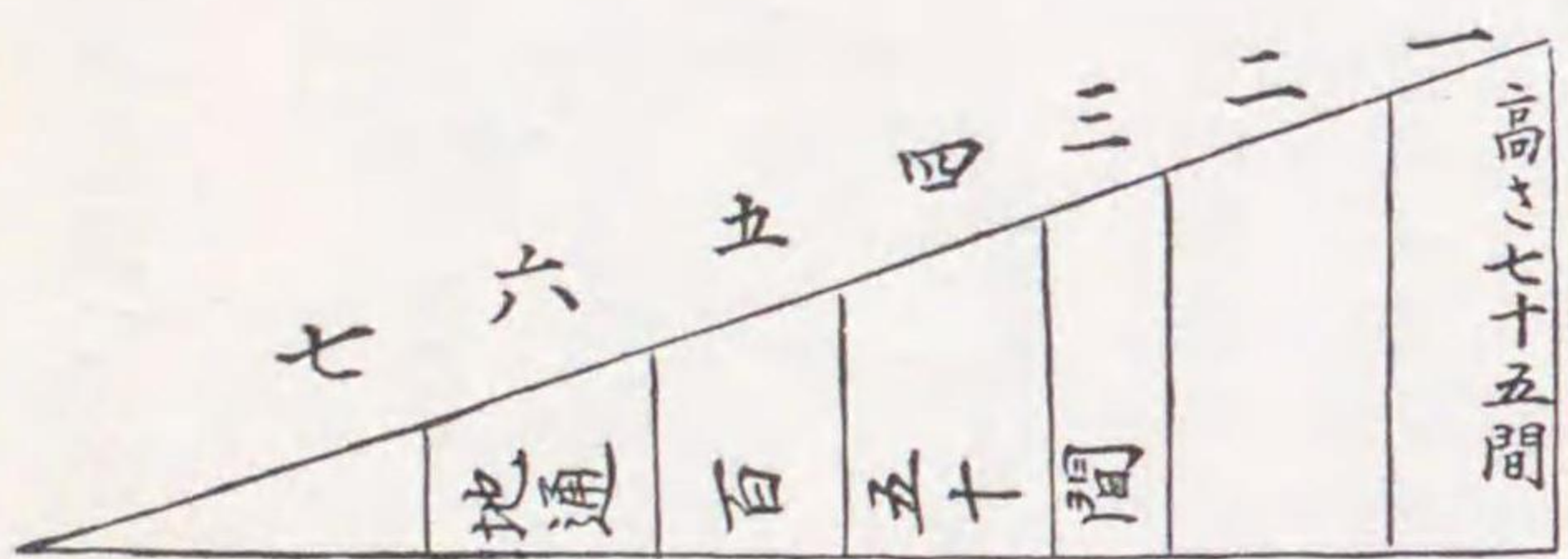
普請割の次第

ほり口十間、そこ八間有、一ツにをき十八間、二ツに割九間有、ふかさ六をかけ申候時、五十四坪有、長さ六百七十三間有、右五十四坪をかけ申候時、三万六千三百四十二坪有、米高二百五十七万二千二百石有、右坪割付申候へ、坪を置、米高にて割申候時一万石之付て百四十一坪二分八厘七毛六糸にあたり申候、右米高一人つゝの分、

- 一番 四十三万六千石
- 二番 六十八万石
- 三番 二十一万三千石
- 四番 五十二万石
- 五番 三十二万五千石
- 六番 三十万七百石
- 七番 十万七千五百石

此衆へ右のめあすにて割かけ申候、

一間を打わたし申候へ、右のことく十間と八間を一ツして、又二ツに割、九間成申候、ふかさ六間をかけ、^{五十四カ}四十八坪成申候、一人にわり付申候坪かす、何ほどにても中をき、^{五十四カ}四十八にてわり申候時、その人の間かすしれ申候、かくのことく割也、
一土成共くりいしなり共坪成へ、たつ・よこの間を兩をき、かけ、高さ懸、坪成申候、ふしん割へ六尺一間、檢地へ六尺五寸一間也、



- 此とをり十三間一尺八寸二分有、
- 同廿三間五尺一分、
- 同八間九寸七分有、
- 同二十四間三尺六寸九分有、
- 同廿間一尺九寸二分、
- 同廿九寸五分、
- 同三十間三尺九寸八分、

のほりさかの割かくのことく也、

元和八月正月是月

一三五

元和八年正月是月

一三六

右の割へかんわりと云て、さたまりたる割へなし、たゞし(式正)きちやうのなをしと云割有、
是は口傳也、



一丸き山成共川なりとも、かくのことくまりの間
を人かすに割付、中のくいよりなわを引わたし申
候、これ御(後光)かふわりといふ割なり、普請割いろく
あり、

町見様

町の見やうの次第

一むかひ目つけの所に一丈の物有、それを目つけにして、又手前をへかいなをのへてわか
目と手さき一尺二寸有程にのほし、ゆひに尺のかね(根)をもち、それにてさき一丈の物のね
よりさきまで見つけ申候時、手にもちたるかねたとへ一分半有時、一分半と三のこゑ
をかけ申候時、四分五厘と成申候、是にてさきの一丈の物をわり申候時、二二三と成、
これハ二百二十二間有としるへし、さきに一丈とみる物なき時ハ、人のせいにこれも何
成共尺にさたまりたるものをめつけにして、手前のかねにて割申候時に、何間に見申候
也、

攝津國武庫
郡瓦林ノ住
人

一高を見るハ、手前右のことくにして、ねもとよりうへまであて、その手前の足に三の
こゑをかけ、その寸をさきの物よりわか見申候所まで何間有としり、その間に手前の三
をかけたる寸をかけ申候時、何十何丈何尺としれ申候、如此也、

右はんきにおこし世間と在之と云共、割の次第廻遠にしてわけ難聞と付、拙子知音富小路
通讚州寺町に市兵衛尉と申候仁所望申候間、忝改作直右はんきの分大形書付畢、此陰陽二
ツの所、工夫を以無不割云事、此外開平と云ハ、平に四方になす算也、開立法と云ハ四方
高さも同寸と箋(さ)のことくになす算也、開圓法と云ハ、玉のことく丸になす算なり、何れも
かやうの算共、數多有と云共、筆紙に盡しかたし、口傳有、算用算勘に泄事なし、士農工商
琴基書畫(吹雅子)ふきはやししつめの藤布はたにいたるまで、算に洩事あらん哉、右作直悉改事
ハ攝津國武庫郡瓦林之住人、今京都に住、割算之天下(毛利)一と號者也、

元和八年初春

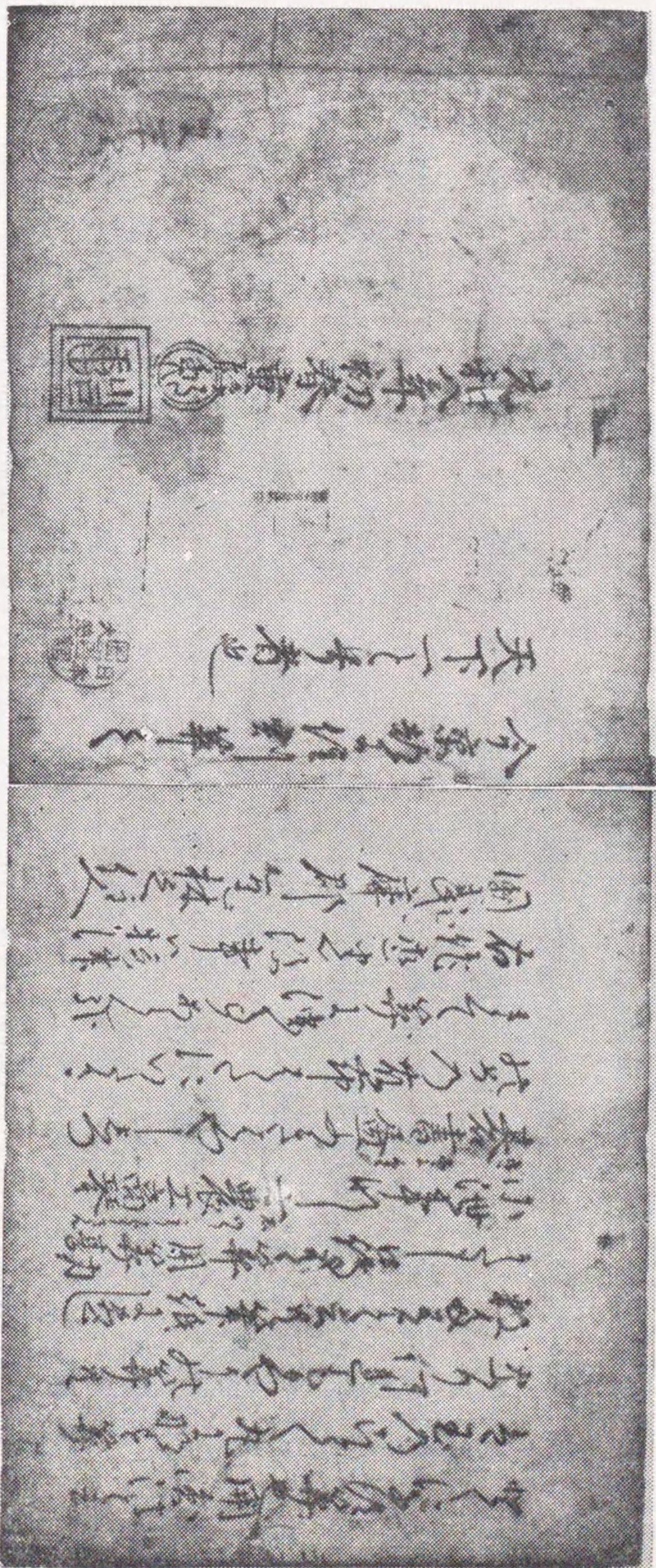
重能印

○本書、日本大學圖書館本・東北大學圖書館本ニ據リ、茲ニ、其全文ヲ掲グ、

〔割算書〕○日本大學
圖書館所藏

元和八年正月是月

一三七



〔参考〕

〔荒木先生茶話〕

毛利勘兵衛
重能

古來の算師は、毛利勘兵衛重能と云へり、大坂城中の人也しが、一統の後、江府に浪人なりしとかや、

〔算家譜略〕

重能、毛利勘兵衛、大坂ノ人ナリ、豊臣家ニ仕ウ、大坂亡後江戸ニ居リ、算法ヲ指南ス、

〔數家人名誌〕

出羽守
重能渡明ト
ノ説
歸除濫觴ヲ
著ス

毛利重能 稱勘兵衛、天正年比ノ人也、叙從五位下、稱出羽守、豊臣秀吉公ニ仕テ明ノ朝ヘ數ヲ學ニ遣ハサル、歸朝ノ比ハ大坂落城ニ及テ江戸于浪人ス、宣明曆ヲ持來ル、歸除濫觴ヲ著ス、

元和八年二月六日

二月^大盡
丁卯朔

六日、^壬春日祭延引、尋デ、之ヲ追行ス、

〔公卿補任〕^{五十}

上卿阿野實顯

〔弘誓院亮記〕^二

二月十八日、^甲晴、^略今日春日祭也、上卿阿中納言^{實顯}參向、

〔春日社司祐範記〕^{元和大和八年}年記

御戸開精進料

一十八日、^{天氣快然}戌刻、御戸開上役神宮預延豐、當職老躰難成、次座沙汰之、精進新十疋ノ代十

合貳斗遣之、從神主モ同前也、^{祭方御供、飛鳥田迄也}

一曉天、上卿御參社、阿野中納言^{實顯}殿、御宿奥館也、

一不參故、神前式不記之、

酒殿送酒
送物饗

一酒殿ノ送酒如例、社司四升、^宵氏人二升、同、

一送物饗、社司氏人平均ニ二坏ツ、^{宵・曉}分也、

一上卿御幣一本、殿番神人持來之、

〔春日社司延通記〕^{元和大和八年}社頭御神吏記

一十八日、春日祭執行、委細別記ニ書之畢、

〔春日祭歷名部類〕^{元和}

同八年二月十八日、^{式日}甲申、祭、延引、

上卿權中納言^{實顯}、辨不參、

〔春日祭上卿已下參行歷名部類〕^{元和}〇春日社記錄三所收

同八年二月十八日、^{元和}申、上卿權中納言實顯

〔春日祭上卿御參向之記〕^{元和}〇春日社記錄五所收

一同八年壬戌二月十八日 延豐

阿野中納言

〔阿野家譜〕

實顯^{元實}、同八年二月十八日、春日祭上卿參向、

〔附錄〕

〔涼源院記〕^三

元和八年二月六日

元和八年二月六日

一四二

二月十八日、甲申、晴、朝飯過て、吉田ノ春日へ參詣、ソレヨリ諸神勸請社へ參詣申候也、
歸ニキヨシノ荒神へ參詣申候也、略○下

安藝廣島城主淺野長晟・肥後熊本城主加藤忠廣・播磨姫路城主本
多忠政ノ嗣子忠刻、江戸ニ參覲ス、是日、長晟、江戸ニ著ス、

〔梅津政景日記〕十一

淺野長晟江
戸下著ヲ佐
竹義宣ニ通
知ス

二月七日、一淺野但馬殿昨日御登之由、御使有、御筋氣之由候て、御直ニ御返事なし、一
曉（長感）ノ雨、日暮迄ふる、風吹、夜天氣よし、

同八日、一淺野但馬守殿一昨御下之由、昨日御使參候ニ付、其爲御禮、御使者ニ參候、田
中淡路と申人を以申上候、御客來ニて、不掛御目ニハ候、一朝（多）おひる迄天氣よし、晚曇
ル、夜ル雨ふる、晴、

加藤忠廣
本多忠刻

二月十五日、一禮日ニ御座候間、御登城被成候、一加藤肥後殿、本田中務殿御下、御出
仕之由申候、一天氣吉、

〔本光國師日記〕三十

一二月十三日、（毛利秀就）松平長門殿へ返書遣ス、○中略、江戸城修築事始ノコトニ淺野長晟
カ、ル、本月十八日ノ條ニ收ム、淺但州下著、（加藤忠廣）加肥

州近日又下著と申遣ス、

〔本陣日記〕一

元和八壬戌

戊二月六日御泊、
一本多中務大輔様

銀壹枚

十日、幕府、喧嘩口論ノ場・罪人處刑ノ場及ビ失火ノ地等ニ集リ
見ルコトヲ禁ジ、又、傳馬・撰錢ニ關スル制ヲ定ム、

〔東武實錄〕八

是日仰出サル、御制法、

定

一喧嘩口論之時、（刑）到其場、一圓不可出向事、（懸合）

一公儀違背之族自然有之而、被行死罪刻、（時）被仰付輩之外、雖爲一人、至彼所、不可懸合事、（懸）

一侍屋鋪火事之節、其家中之者、并親子兄弟之外、（付）至其所、不可懸集事、（懸）

附、町中火事有之時、（役人之外奉公人）奉公人上下共ニ一切不可出合事、（合）

右之條ニ被定置訖、若有違犯之族者、速（ナシ）ニ可被處嚴科、依仰、（ナシ）執達如件、（之旨堅所被仰出也、仍執達如件）

元和八年二月十日

一四三

忠刻遠江濱
松ニ泊ス

侍屋敷ノ火
事
町中ノ火事

元和八年二月十日

元和八年^(ナシ)戊二月 日 ○傍註ハ、細川家記ニ
十一忠利一ニ據ル、

一四四

一駄ノ荷量

駄賃

人足賃ハ馬ノ半分

定

一御傳馬駄賃之荷物、一駄ニ付四十貫目事、

一江戸より品川迄上下之荷物、壹駄ニ付、ひた錢三十四文、板橋へ三十九文、歸馬之駄賃、

右同斷事、

附、人足賃者、馬之半分たるへき事、

一御定之外、増錢取もの有之者、過錢として、家壹軒ニ付、ひた錢百文ツ、并其町之年

寄五貫文可出之、但當人者五十日籠舎たるへき事、

一御傳馬駄賃荷物、宿中馬持次第たるへき事、

一駄賃馬多く入候時、其町より在之馬をもやとひ、荷物遅之無之様ニ、風雨之時も可出
事、

右條之於相背者、其町之年寄とも可爲曲事者也、仍如件、

元和八年戊二月日

撰錢ノ制

定

一大かけ

一われ錢

一かたなし

一ころ錢

一新錢

一なまり錢

右六錢之外、ゑらふへからず、若えらふもの、おしてつかふもの有之者、其町過錢として、年寄五貫文、其外家一軒より百文宛可出之、然者、金子一兩ニ四貫文之賣買たるへし、自然背御定之旨、高下之賣買仕もの有之者、其賣買錢金双方より出之、其上過料右同斷たるへき事、

元和八年戊二月日

〔秀忠公御制法〕

元和八年二月十日

一四五

金子一兩ニ
四貫文ノ賣
買

元和八年二月十日

定

一御傳馬駄賃之荷物、一駄ニ付、四拾貫目之事、
一江戸より品川迄上下之荷物、壹駄ニ付、ひた錢三十四文、板橋へ卅九文、歸馬の駄賃右
同斷之事、

附、人足賃、其馬の半分たるへき事、

一御定之外、増錢取もの有之ハ、過錢として、家壹間ニ付、ひた錢百文宛、并其町之年寄
五貫文可出之、但當人ハ五十日可爲籠舎事、

一御傳馬駄賃荷物、宿中馬持次第たるへき事、

一駄賃馬多入候時、其町より在この馬をもやとひ、荷物遅々無之様ニ、雨風時も可出之事、
右條々於相背者、其町年寄共可爲曲事者也、仍如件、

元和八年戊二月

定

一大かけ 一われ錢 一かたなし 一ころ錢 一新錢 一なまり錢

右六錢之外、ゑらふへからず、若撰もの、おして遣ふもの^{〔然カ〕}在之ハ、其町爲過料、年寄五
貫文、其外家一軒より百文宛可出之、物者、金子壹兩ニ四貫文之賣買たるへし、自然御
定の旨代背^{〔カ〕}、高下の賣買仕もの有之ハ、そのうりかふ錢金、双方より可出之、其上過料
右同前たるへき事、此旨於相背者、其町一町と爲過料、家一間百文宛可出之、并其所代
官爲過料、五貫文可出之、此旨堅可申付者也、

元和八年戊二月八日

(安藤重信)
對馬
(土井利勝)
大炊

○安藤對馬守重信ノ歿年ハ前年六月二十九日ニシテ、右制法發令ノ日時、未ダ詳ナラ
ズ、今姑ク東武實錄ニ據リテ、玆ニ掲グ、

是ヨリ先、越前北莊城主松平忠直、疾ニ依リ江戸ニ參觀セズ、幕
府、近藤用可ヲシテ、忠直ノ疾ヲ問ハシム、是日、用可、歸途相
模大磯ニ於テ、落馬シテ卒ス、

〔天英公御書寫〕

下
○梅津本

今時分御暇も可被下かと推量候處に、當月中などに御暇可被下躰ニハ無之候、御城之御普

元和八年二月十日

忠直江戸ニ
参観セズ
忠直江戸不
参トノ巷説

元和八年二月十日

一四八

請二月朔日有由、年内ハ沙汰候カ、于今御手付も無之候、はや人足ハ集り候へ共、御普請ハなく候、越前宰相殿御煩氣之候とて、御下なく候、依之御使者も被遣候、四五日以前御使者も被歸候、何と御挨拶候哉、一圓沙汰もなく候へ共、御普請御手付なく候間、町せつ色ノ取きた候、此儀於議定ハ、御暇も暫ハ出間敷候、先度申遣候舟板、去年之板之
おとり候ても、爲取可申候、檜山之内こがけの山、跡之とめ候、尙以よく申付、相立べく候、野代之居候者、又山近所之者之も申付、下草にても、とらせ申間敷候、謹言、

○江戸城普請ノコト、本月十八日ノ條ニ見ユ、本

元和八年
二月十日

(佐竹義宣)
御名乗御居判

〔梅津政景日記〕 十一

(二月) 同十二日、一越前へ爲御上使御出被成候近藤縫殿殿、越前方御歸候とて、太磯にて落馬、御はて候由、道琢物語之付、石見殿へ無御心元由御使之参候、御取亂之候間、武田佐次右衛門と申者之申置、罷歸候、一ひる天氣吉、夜曇ル、

〔本光國師日記〕 三十

(三月十一日) 同日、近藤石見殿を捻來ル、子息縫殿死去、忌之儀尋ニ來ル、則返書遣ス、服九十日、

義宣近藤秀
用ヲ用問ス

近藤用可藤
澤ニテ卒ス
トノ説

忌
暇廿日と申遣ス、廿日過候へハ、社参も出仕も不苦と申遣ス、

〔東武實錄〕 八

二月十日、近藤縫殿助用可卒ス、
上使トシテ、越前ノ國ニ赴キ、歸路ノ時、相州藤澤ニ於テ落馬シ、是ヲ痛テ、遂ニ卒ス、

〔越前福井松平家譜〕 二

越前守忠直

一元和八年壬戌正月、長々病氣之躰之而、東武に参勤無之之付、病氣爲尋、近藤縫殿助北莊に参著、

〔美作津山松平家譜〕 二 (忠直)
二世西殿公

元和七年辛酉、公二十有七歳、

公、頃年疾アリテ、朝覲セス、是春、疾少シク癒ルニ因テ、江戸ニ趣カントシテ發途シ、今莊驛ニ至リ、滞在數日、又關ヶ原驛ニ至リ、疾ヲ護シテ逗留連月、竟ニ進ンテ東スル事能ハス、使者ヲ立テ、之ヲ江戸ニ報シ、駕ヲ旋シテ、北莊ニ歸ル、將軍、近藤縫殿助
越前ニ由緒アリ
ル故、特ニ此
人ニ命ス、
ヲ使トシテ、疾ヲ問ハセラル、公、世子仙千代ヲ名代トシテ、江戸ニ至ラシム、
九月二十九日、北莊ヲ發ス、時二年七歳、

元和八年二月十日

一四九

忠直子仙千
代ヲ名代ト
シテ江戸ニ
至ラシム

元和八年二月十日

一五〇

元和八年壬戌、公二十有八歳、

春、公、又疾ヲ勉テ東觀セントシ、出テ關ヶ原ニ至リ、滯留數月、復東スル事能ハス、秋、

遂ニ北莊ニ還ル、○松平忠直、參觀ノ途、美濃關ヶ原ニ淹留シ、
遂ニ國ニ歸ルコト、三月五日ノ條ニ見ユ、

〔寛永諸家系圖傳〕七十 近藤

近藤用可
世系

用可ひでもち石見守、

用可もちよし五左衛門、
縫殿助、

用行もちゆき八兵衛、のち五
左衛門と號す、

用一もちかず縫殿
助、

履歷

用可 遠州濱松ゑんしゅうはままつに生れ、同國井谷どうごくのやに住す、はしめ越前中納言秀康卿あつげんのひでやすきやうにつかへ、子息直忠〔忠直〕の

ときにいたりて、番頭となる、元和元年、めしいたされ、遠州濱松におゐて、台徳院殿に拜

謁したてまつり、父秀用とともに、大坂御陣に供奉す、五月七日、御合戦の時、天王寺口

におゐて、高名す、御歸陣のち、台命をかうふり、秀用にかはりて、足輕のもの五十人

をあつかる、同八年正月、上使をうけたまはり、越前にをもむき、歸るにをよびて、相州

大磯にて落馬し、二月十日に死、歳四十一、法名道安、

法名道安

〔寛政重修諸家譜〕八百四 近藤

用可ひでもち石見守、從
五位下、

用可もちよし五左衛門、
縫殿助、 近藤石見守用和か祖、

〔寛政重修諸家譜〕八百四 近藤

用可もちよし五左衛門、
縫殿助、

用行もちゆき八兵衛、五
左衛門、 近藤主殿頭用爲か祖、

用治もちはる初、用一、
縫殿助、

女子 都築彌左衛門爲次か妻、

女子 由良市兵衛貞長か妻、

女子 松平越後守家臣嶋田左平太某か妻、

某某彦市郎、野
武右衛門、

用可 近藤石見守秀用か二男、母は本多庄左衛門信俊か女、越前中納言秀康卿及ひ松平三

河守忠直に歷仕す、元和元年大坂御陣のとき、父か請むねあるにより、めされて御麾下

に列し、遠江國濱松にをいて、はしめて台徳院殿に拜謁し、父とともに従ひたてまつり、

元和八年二月十日

一五一

秀康及び忠
直ニ歷仕ス

秀忠ニ仕フ

元和八年二月十日

一五二

五月七日、天王寺口にをいて、首二級を得たり、のち父か領知の内にて、五千石餘をわかちたまはり、父にかはりて、鎧炮の足輕五十人をあつかる、そのうち采地を遠江國引佐・長上・龜玉・敷知四郡のうちにつさる、八年、上使をうけたまはり、越前に赴き、歸路のとき、相模國大磯にをいて落馬し、二月十日死す、年四十一、法名道安、神田の靈山寺に葬る、のちこの寺を本所にうつさるゝのとき、彼地に改葬す、妻は松平（光長）越後守家臣小栗美作某か女、

○用可、大坂役ニ秀忠ノ軍ニ從フコト、元年四月十日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔元和年録〕

坤

一二月六日、近藤石見守（秀用）、於小田原死去、八十 ○本書、石見守秀用、トナスハ、誤ナラン、

若狹小濱城主京極忠高ノ代官多賀越中守、物成・夫子米・浦方ノ魚等ニ就キテノ條規ヲ定ム、

〔三善文書〕

○越前若狹古文書選所收

申出覺

物成

めはらひ
むしろつけ

かん米

夫子米

小入木米

買わた

一當秋物成之儀ハ、當年立毛之様子ニより可申付候、別ニ相替儀無之候ハ、村々去年之物成御納所可仕候、何程立毛悪く候ハ、其村々ニ應し、さしおき可申候、乍去少も如在仕所ハ、くせ事ニ可申付候事、

一口米之儀、其村々物成之高に應し、暮に一度ニ、石ニ付て四升宛之算用に出し可申候、年貢米計候ハ、其時々舛數之請取を可遣事、此外少もめはらひ（建付）・むしろつけ有ましく候、たはら之儀、大かたにふるひ明候て、計可申候事、

一あわから出し米之儀、をりと迄之（駄賃）たちん、石に付て町升四升宛此方々可遣候沙汰にて、かん米之儀ハ、これより相究可申出候、其上にかん米たち申儀於有之者、百姓之辨ニ可成候事、

一夫子米、當年々惣躰として八木、中納（符カ）納升を以貳拾石宛、村々・丹生浦・早瀬共ニ今迄出し來り候米高に應し割符候て出し可申候事、

一小入木米、當年より想躰（惣）、今迄出し申付候早瀬・丹生浦共に、中納升を以、米拾石宛相立可申事、

一村々より毎年之買わた（總）、當年々壹分もかひあけ申ましく候事、

元和八年二月十日

一五三

元和八年二月十日

一五四

胡摩
餅米
大豆

一 胡摩之儀、高百石ニ付てごま五斗宛、年貢米之内ニ計可申候事、
 一 餅米之儀、高百石(種)ニもちい米貳石五斗宛、年貢米之内ニ計可申候事、
 一 大豆之儀、其村之畑方ニ付大つにて貳拾石宛、年貢米之内ニさこなしに計可申候、其外(豆)ニまめはかり候て、年々相場次第ニさこ入て計可申事、
 一 一村へ使等ニ遣候者、少も百姓とまかなひ申ましく候、めし(飯)をたへ不申候て不叶様子ニ候ハ、百姓より引かへめしたへさせ候て、其使之さ(指紙)しかみを取置、年貢之算用ニ相立可申候、此外少も何角申て、たへ申者於有之ハ、此方へ可申上候、急度可申付候、下代共同前之儀ニ候ニ付、さい(催促)そくに罷越候者共、賄之儀十月廿日以前ハ、此方より算用ニ相立可申候間、是又指紙取置、又日記ニも付置候て、年貢米之算用ニ可仕候、廿日より後之さいそくにハ、其村未進ニ應し賄可申候、飯米之儀、壹人ニ付て、一日ニ町升ニ壹升宛ニ可仕候事、

年始八朔

一年始・八朔禮錢之儀、年頭ニハ何ニても有合ニ可申上候、八朔之儀ハ如今迄たるへく候事、一 今迄うせ走申百姓、同村より我等へ奉公ニ出申者共ニよらず、いかやう之科有之候共、ゆるし可申候間、早々其在所々へ立歸候様ニ可仕候、左候ハ、二年諸役可令免除候、

日本之神偽無之候事、

一 佐柿にてはい木仕、飯米之儀、拾束ニ付て町升壹升宛可遣候、米之儀ハ、今までの如くに候事、

人足飯米

一 新莊(使)にて仕申人足飯米之儀、壹人ニ一日ニ付て町升一升宛可遣候、し(自然)せん春より七月中迄之間ニ不遣候ハ、算用次第ニ、七月ニ可遣候事、

浦方魚

一 浦方さかな之儀、あかり之有之外ハ、一切取申間敷候、入候てかひ申さかな物之儀ハ、世上へうりかい、其時々相場半分ニ買可申候、不及申に、年貢米算用可仕候、た(差)ししさ(鱒)は(鮭)しいら(鮭)はまち之儀ハ今迄之ことく其年々應し算用可有事、

以上、

右之條ニ申上者、少も相違有間敷候、自然下代等非分之儀於有之者、百姓かたより有様ニ此方へ可申上候、急度曲事ニ可申付候、若隱候て不届之儀不申上候ハ、重て聞付次第、其村之百姓曲事ニ可申付候、此上者、田畠等念を入作毛仕へく候、如在申者候ハ、成敗可申付候、尙多賀内藏丞かたへも、右之通かたく申渡候間、可成其意者也、

元和八年壬戌二月十日

元和八年二月十日

一五五

元和八年二月十二日 十四日

一五六

十二日、戌幕府、江戸參觀中ノ肥後熊本城主加藤忠廣ヲ、江戸城ニ
饗ス、

〔リチャード・コックス日記〕（歐文材料第三號譯文）

一六二二年三月十三日（二月十二日）○新曆二十三日ニシテ、元和八年二月十二日ニ當ル、

オランダ人と我等とは許可證を得るため我等の通譯を宮廷（江戸幕府）に遣はしたり、されど従前の如

く徒らに美辭を受けしのみにて何等得る所なかりき、尤も彼等（通譯）の言によれば、皇帝（徳川秀忠）の委員

會は本日肥後（加藤忠廣）の國王を迎へて之を款待し、之が爲め我等の許可證下附に支障を生じたり、

されど明日は之を下附すべき由なり、

十四日、庚辰、權中納言日野資勝ヲシテ、後陽成天皇宸筆源氏物語ヲ

書寫セシメラル、

〔涼源院記〕三

二月十四日、庚辰、朝より雪霰降、午刻時分晴、又晚降也、餘寒甚シキ也、○中略 禁裏ヨリ源

氏夕顔ノ本寫候て可進之由被仰出候也、料紙四半、寫本ハ後陽成院ノ宸筆候也、御本六半、

表紙ハゴシ紙、外題追遙院筆也、（三條西實隆）トニカ、ル、本月十八日ノ條ニ收ム、

幕府加藤忠
廣ヲ饗應ス

外題ハ三條
西實隆ノ筆

○中院通村ヲシテ、源氏物語ヲ進講セシメラル、コト、七年二月八日ノ條ニ、日野資
勝・西洞院時慶等ヲシテ、源氏物語ノ詞ヲ書カシメラル、コト、同年四月三日ノ條ニ
見ユ、

幕府、徳川家康ノ七回忌祭儀ヲ下野日光山ニ修セントシ、堂塔

以下ヲ増建シ、又、公家衆・門跡等ノ之ニ會センコトヲ奏請ス、

〔孝亮宿禰日次記〕七

正月廿八日、乙丑、晴、大外記同道、竹林坊日光法事之事言談、

二月十四日、庚辰、晴、雪下、大藏省兵庫來云、日光御法事公家衆・役人衆等參向之事、

自江戸申來云々、

〔義演准后日記〕二十

二月廿日、雨、○中略 供養法ノコトニカ、東照權現當七年、仍御法會、於門跡者、梶井

富・青蓮院大僧正兩人、於著座者、内大臣以上可有御下向旨、從江戸飛脚到來云々、然者

九條殿下可有御下敷之由風聞、其外役者可爲如先年云々、

〔本光國師日記〕三十

（正月廿九日）（細川忠興）
一同日、三齋へ返書遣ス、自筆之而認遣ス、廿八日之日付也、案左之有之、

元和八年二月十四日

一五七

江戸城本丸ノ作事

元和八年二月十四日

一五八

日光ノ廟堂
塔石垣等ノ
普請
秀忠ノ社參
アルベン

正月二日之尊書、同廿八日、於江戸拜見仕候、新年之御慶、雖事舊候、彌御満足、可被任尊意候、一去年八月十二日、九月十五日之書狀、被成御披見之由、大慶之奉存候、一當地彌相替儀無御座候、上様御機嫌能被成御座候、御心安可被思召候、一當城御本丸御作事、近之事始可有御座由之御座候、いまた定日ハ無御座候、今明日中之治定可有之由之候、○江戸城普請ノコト、本月十八日ノ條ニ見ユ、一貴國御無事、第一尊老様御息災被成御座候由、萬之目出度奉存候、○細川忠利、江戸ニ參觀スルコト、七年十二月十四日ノ條ニ見ユ、一尊老様、當年ハ當地へ可被成御下向之由、奉得其意候、併緩之と御國元之御座候而、御養性被遊候様之と可被仰出かと存候、於御下向ハ、節之可被尊意候間、拙老式ハはや御下を待かね申候、誠之朝夕御床敷さ計之て候、一當地御拜領之新御屋敷、御普請有之躰之御座候、其近所節之罷通候、扱之以下見事成御屋敷、御仕合御手柄之而御座候、○細川三齋、江戸ニ新亭ヲ營ムコト、正月是月ノ條ニ見ユ、一日光之も、御廟・堂塔以下御建立、石垣等舊冬ハ御普請被仰付候、日光近所之て知行拜領之御衆、右之役被仕候由之候、○幕府、日光山東照社與院・廟塔等ヲ修營スルコト、七年十一月六日ノ條ニ見ユ、當年四月、第七年之御當り被成候、其以前之出來候様之と被仰出候、定而御社參可被成かとの、下之て沙

汰御座候、○日光山東照社祭儀ニ秀忠臨ムコト、四月十七日ノ條ニ見ユ、一拙老義も、去年八月之罷下、于今相詰申候、日光之御會式相澄み候者、見合御暇申上、可罷上と存候、○崇傳、京都ヨリ江戸ニ下ルコト、七年八月十二日ノ條ニ見ユ、猶後音之追之可申上候、恐惶謹言、

正月廿八日

金地

三齋尊老様 尊答

端書 當地方之へ御狀被遣、可爲御取籠所之、拙老方迄御懇書、萬之忝奉存候、從是節之可申上處之、御用多間、御披見も御六ヶ敷可被思召かと、遠慮仕、無音之罷過申候、萬之後音之可申上候、以上、

右之返書、(細川忠利)細内記殿へもたせ遣ス、

〔天英公御書寫〕○梅津本

○上略全文ハ二月十八日、又日光之も石垣の御普請年内より在之事候、○下略、正月廿日江戸城普請ノ條ニ收ム、

〔門主傳〕○華頂要略十四所收 圓智院一品法親王諱尊純

二月十六日、來四月、東照宮法會參勤之事、從關東申來之由、(板倉重宗)從所司代言上、

青蓮院尊純

元和八年二月十四日

一五九

十八日、甲申、新上東門院三回忌御法會ヲ、京都般舟三昧院ニ修ス、

〔孝亮宿禰日次記〕七

著座ノ公卿

二月十八日、甲申、晴、於般舟院、新上東門院三回忌御追善被行、〔茶〕曼茶羅供、著座〔三條公廣〕轉法輪大納言・正親町三條中納言、殿上人三人、〔實基〕油小路一・藏人小槻忠利・鹽小路新藏人、

〔涼源院記〕三

廣橋兼賢著
座ストノ説

二月十四日、庚辰、朝より雪霰降、午刻時分晴、又晚降也、餘寒甚シキ也、○中略、日野資勝、源氏物語ヲ書寫スルコトニカ、明日、般舟院之て、新上東門院第三回忌之付、中納言・廣相公著ル、本月十四日ノ條ニ收ム、座之由也、三次を供之遣申候也、

十八日、甲申、晴、○中略、春日社參詣ノコトニソレヨリ三條中將殿へ參候也、昨夜兵庫むすこ坊主相果候付、今日若上年違とて持參候也、藤向も參候也、寶慈院も同心、祝儀過て、三條中將殿、般舟院ヨリ御歸候也、今朝拙子所にて裝束候也、晚之中将殿御振舞有之候也、晚之歸候て後、ヤトヲ又見廻之遣候へハ、〔轉法輪三條公廣・實秀〕三條大納言殿兩人、若上ヲ御見廻候て後、藥ヲ參候由也、一段と心能由申來候也、

〔弘誓院亮孝記〕二

二月十八日、甲申、晴、○中略今日、新上東門院三回忌御佛事於般舟院被行、〔茶〕曼茶羅供、著座權大納言〔公〕廣・權中納言、〔實〕有

幕府、江戸城天主臺及ビ諸口ノ石壘ヲ築カントシ、先弓頭阿部正之ヲ普請奉行ト爲シ、越後高田城主松平忠昌・肥後熊本城主加藤忠廣・安藝廣島城主淺野長晟・上野高崎城主安藤重長等ヲシテ、助役セシム、是日、事始アリ、

〔本光國師日記〕三十

一九月十五日、〔細川忠興〕細三齋老へ書狀遣ス、案左之有、

○中略、崇傳、江戸ニ之クコト等ニカ、ル、書狀全文ハ七年八月十二日ノ條ニ收ム、端書○中來年御當地之御本丸、御作事之由候、此中ハ御さしづ以下之御沙汰之候、御作事

中ハ、上様ハ西之丸へ被爲成、大納言様ハ忍へ、〔德川忠貞〕宰相様ハ稻毛へ可被成由之御座候、猶此地之様子共、各々可被仰入候間、可被爲得其意候、○下略

〔本光國師日記〕三十

元和八年二月十八日

本丸作事ノ
風説

元和八年二月十八日

一六二

同日、三齋へ返書遣ス、自筆之而認遣ス、廿八日之日付也、案左之有之、

略○上一當城御本丸御作事、近之事始可有御座由之御座候、いまた定日ハ無御座候、今明

日中之治定可有之由之候、○下略、全文ハ本月十四日ノ條ニ收ム、

一二月九日之朝、藤堂和泉守殿へ水戸宰相様御成、御相伴之參ル、勝手へ井上主計殿・永

井信濃殿・青山大藏殿各御籠、御酒之所へ、座敷へ御出、於其席、主計殿・信濃殿被仰

候、御本丸御作事始之御吉日之儀、書付上ケ候へと被仰出由候、則書付上ル、案左之有之、

御作事始之吉日、

一二月十八日、甲申、取水、房宿、

右大明日、三寶吉日、上白虎頭日、

以上、

如此書テ、奥之日付モ名判モ不書也、

右中高一重二折之して書而、御城へもたせ上ル、上包モ中高一枚也、清兵へ使、主計殿

・信濃殿へ御城之て渡し申候由也、

一二月十三日、松平長門殿へ返書遣ス、諸白大樽三參候禮申遣ス、當地御城之御普請御作

崇傳作事始
ノ吉日ヲ勘
申ス

佐竹義宣漆
ヲ進上セン
トス

秀忠西丸ニ
移ル

加藤忠廣
須賀忠英
野長晟等
助役ヲ命ズ

事、近之御事始可有之由を申遣ス、○下略、淺野長晟・加藤忠廣、江戸ニ參觀

〔天英公御書寫〕○梅津本

其元へ下候者、三日之内ニ江戸に使者を可相上候、御城御作事之御普請、てんしゆなども

御立替候間、うるしを進上可申候間、いつものことく、桶を貳貫目入、まけさせ候而、五拾

桶拵候而可指置候、桶之も、又まき候なわなと、好之念を入申付、拵させ可申候、先うる

しを入候事者無用候、下候上可申付候、うるし百十貫目程調候而、可指置候、其元之それ

ほとなく候ハ、近所へ人をこし、所望可致候、俄之下もしれず候間、先申付、こしらへ

可申候、今月廿日、大納言様へ彦次郎を出仕させ候、廿三日之者、大納言様之ハ河越へ御座

被成候、○家光、川越ニ放鷹ノコト、御城御作事之付而、公方様西丸へ、二月始御移被成候、

甲斐之宰相様者、榊原式部殿之屋敷へ御移被成候、是ハ佐渡殿屋敷か御屋敷ニ成候、其作

事出来候間之事ニ而候、黒田筑前子之右衛門所へ、廿六日ニ祝言候、大柿之甲斐守殿之御

娘を、御城へよはせられ候、御城より被遣候、○秀忠ノ養女松平氏、黒田忠之ニ嫁

相替儀も無之候、御普請せられ候衆、加藤肥後・蜂須賀・淺野但馬、是へてんしゆ之石垣、

又越後殿・伊与殿、其外御普代衆五萬石・十萬石とり、此近所之衆者大略てつたい普請被

元和八年二月十八日

一六三

元和八年二月十八日

一六四

義宣歸國ヲ
念願ス

仰付候、又日光之も石垣の御普請年内より在之事候、○日光普請ノコト、本月十四日ノ條ニ見ユ、何之もかもハす
た、下度計之念願之而候、けつかう也、江戸之久之罷有儀、何ともてきなく存候、謹言、

元和八年
正月廿日

御名乘御居判

〔天英公御書寫〕○下
梅津本

人足ハ集リ
シモ普請ニ
著手セズ

略○上 御城之御普請、二月朔日有由、年内ハ沙汰候か、于今御手付も無之候、はや人足ハ
集り候へ共、御普請ハなく候、○中略、全文ハ本月十日、幕府、近藤用可ヲ越前北莊
元和八年
二月十日

御名乘御居判

〔天英公御書寫〕○上
梅津本

略○上 御城御普請も于今御手付無之候、○中略、全文ハ三月五日、松平忠直、江戸ニ赴カン
トシテ北莊ヲ發シ、尋テ國ニ歸ルノ條ニ收ム、

元和八年
二月十三日

御名乘御居判

〔天英公御書寫〕○下
梅津本

普請著手延
引推測ニ困
ム

略○上 于今御城御普請御手付も無之候、人足などふらくとして、唯逗留候由にて候、何た
る御積にて候哉、一圓不知候御事候、○中略、全文ハ三月五日、松平忠直、江戸ニ赴カン
トシテ北莊ヲ發シ、尋テ國ニ歸ルノ條ニ收ム、

元和八年
二月十九日

御名乘御居判

城ノ近邊ニ
石ヲ聚ム

〔天英公御書寫〕○中
梅津本

略○上 御城之御普請之儀、御城者于今御破無候得共、御城近所迄石を寄候て、ことく敷御
普請にて候、○中略、全文ハ年末雜載
信仰、土俗ノ條ニ收ム、

元和八年
三月朔日

御名乘御居判

〔天英公御書寫〕○下
梅津本

五月ニ入り
テナホ普請
ニ著手セズ

略○上 秀忠、江戸城中、能樂張行ノコト、于今御城へハ御普請之御手付なく候、十一日之時分西
ト等ニカ、ル、五月一日ノ條ニ收ム、

元和八年
五月四日

御名乘御居判

此前御鷹之事也、故ニ略之、

源左衛門下之時も申越候、御暇之而於下者、大炊殿ニ可進候間、能馬を相尋可爲上候、馬
苦勞馬之者有之間敷候間、誰成共、奉公人之持候を取候而、可爲上候、上方衆九月、十月
中に下など、風聞候之間、左様之候ハ、十月之末敷霜月始之時分は、御暇も可出かとの
風聞にて候、來年之御上洛相延候得者、亦江戸之御普請有之のよし候、加藤肥後・淺野但

元和八年二月十八日

一六五

關西諸大名
九月十月頃
參觀ノ風聞

奥州諸大名
ニモ普請助
役下命ノ風
聞

元和八年二月十八日

一六六

馬、此衆者當年大坂之御普請不被爲候、○大坂城倉庫造營ノコト、六月是月ノ條ニ見ユ、此衆先御得促之由にて候、御普請場廣、間敷も有之事之候間、定與衆にも可被仰付なと、風聞にて候、左様ニ候者、石垣ハ不成候共、切立普請敷、又ごろうたなと入候普請敷、兎角手前なとも御普請せず候てハ成間敷候間、大方來年者御普請あたるへく候、御上洛之御供し候よりハ、ばく／＼おとりノ事候、謹言、

〔附箋〕
元和八か七月十八日

御名乗御居判

〔相州文書〕

足柄上郡
關本村寂乘寺所藏

以上

幕府大手門
及ビ臺所ノ
用材ヲ寂乘
寺ニ徴ス

一筆申入候、大手御門并御臺所大引物、關東中山ニ在ニ無之候、就其關本寺〔寂乘寺〕内有之、此以前木印打候松木之内貳本、御用候間、守屋左太夫・大鋸喜左衛門尉、無相違、御きらせ可有候、恐々謹言、

元和八年

伊丹喜之助

四月五日

康勝(花押)

松平右衛門佐

正久(花押)

永井信濃守

尙政(花押)

井上主計頭

正就(花押)

土井大炊助

利勝(花押)

本多上野介

正純(花押)

酒井雅樂頭

忠世(花押)

關本

寂乘寺

〔竹腰文書抄〕

元和八年二月十八日

一六七

江戸城御殿
取足ノ
板子ノ
注文
材

元和八年二月十八日

江戸御城御殿取足ノさへら板子注文

一萬五千枚ハ、長七尺、は、壹尺三寸、
あつき四寸五寸

以上

右之御材木入札之而、ね段相極申候間、木曾山へ可被仰付候、以上、

元和七年

酉八月十日

御奉行所

鈴木近江(長次)

(裏書ナルベシ)
表書之御材木、木曾山にて入札を以、鈴木近江申付候間、右之注文之木數程出させ可被成候、不及申候へ共、注文之外、木壹本も取不申候やう之、堅可被仰付候、以上、

伊喜之助(伊丹康勝)

松右衛門(松平正久)

永信(永井尚政)

井主計(井上正就)

土大炊(土井利勝)

本上野(本多正純)

竹腰山城守殿(正成)

成瀬隼人正殿(正成)

江戸城御殿
材木ノ
注文

江戸御城御殿御材木之注文

中ノ繪

一千九百五拾三本 長貳間壹尺木 六寸角

一千五百六拾貳本 長貳間半木 六寸角

同 同 長貳間半木 八寸角

同 同 長三間壹尺木 八寸角

同 同 長三間壹尺木 九寸角

同 同 長三間貳尺木 壹尺角

同 同 檜木數合四千九拾三本長さはいつれも京間、はななくれハ注文之外、
寸法かねこさしつめ、うけ取可申候、

松材木

まつ
一貳拾本

長三間半木

壹尺貳寸角

元和八年二月十八日

元和八年二月十八日

同	一貳拾九本	長三間半木	壹尺角
同	一貳拾五本	長三間木	壹尺貳寸角
同	一貳百本	長三間木	七寸角
同	一百五拾本	長三間木	六寸角
同	一六拾本	長貳間半木	壹尺貳寸角
同	一貳百本	長貳間半木	六寸角
同	一五百本	長貳間半木	四寸角
同	一五拾五本	長貳間木	八寸角
同	一三百七拾本	長貳間木	六寸角
同	一六百八拾本	長貳間木	五寸角
同	一五拾本	長三間木	は、壹尺三寸、 あつさ六寸、
同	一七拾本	長三間木	は、壹尺五寸、 あつさ三寸、

松木數合貳千四百九本長さはいつれも京間、はなくれハ注文之外、寸方ハかねさしつめ、うけ取可申候、
右之御材木入札之而、ね段相究申候間、木曾山にて可被仰付候、以上、

元和七年

酉八月十日

御奉行衆

鈴木近江(長次)

裏書
表書之御材木、木曾山之而入札を以、鈴木近江申付候間、右之注文之木數程出させ可被成候、不及申候へ共、注文之外、木壹本も多ク取候へぬやう之、堅可被仰付候、以上、

伊喜之助
松右衛門
永信濃
井主計
土大炊
本上野介

竹腰山城守殿
成瀬隼人正殿

元和八年二月十八日

元和八年二月十八日

〔端裏書〕
江戸御天主御材木之儀ニ、山村七郎右へ遣留

一筆申入候、面談之而如申候、江戸御天主御材木之儀之付而、杣取其元へ指遣候、貴殿も案内者御差添、手依能所之而本切仕候様之、被入御念、可被仰付候、將亦杣取小屋などの儀之付、爰元之而も以使申入候間、先年之ことく之可被仰付候、不能御分別之儀へ、重而可被仰越候、恐惶謹言、

十月四日

竹山城守

山村七郎右様

以上

態以書狀申上候、然者木曾山より江戸御天守之御材木出申之付、拙者儀も罷越、御手傳衆と相談可仕よし被仰出、木曾へ罷越有之儀之候、就其美濃御給人帳上ケ可申由之候間、則書上申候、其御帳之くより組之内平右組ハ伊奈へ、拙者江戸へ不參候以前之被遣候間、則引のけ、甚兵衛組ハ、那古屋へ御付之衆稻右近殿など一所之書上申候へは、御普請衆之所へ書入候へとの儀之候間、重而帳を書直シ上申候、甚兵組之内へも、御普請當り申分之候

岡田善同木
曾ニ赴ク
美濃給人帳

竹腰正次天
主閣用材ノ
伐採ニツキ
山村良安
テ山旋ヲ託
スニ

間、其御心得可被成候、江戸御奉行衆様へ自然御理も御座候へんかと存申入候、拙者共右之不申上候かと思召候へは、如何之候間、扱御内儀申入事之候、恐惶謹言、

八月廿日

岡田將監

り (花押)

成瀬隼人様

竹腰山城様

志水甲斐様人御中

〔端裏書〕
角倉庄右衛門所へ江戸御作事材木ニ遣留

急度申入候、江戸御作事御材木之注文與一請取被參候處、于今御材木過半不罷出候故、御作事出来不申候、不成儀を何とて請負被申候哉と不審候、先月之水之而不出材木ハ、當年中之ハ出間敷と存候、右材木之内何程途中迄罷出候哉、委可被申越候、材木早之下候様之と、江戸も切之申來候間、様子相尋候、與一方京都之被居間、其方へ申遣候、恐之謹言、

十月四日

竹山城守

元和八年二月十八日

材木過半搬
出セラレズ

搬出木材數
ヲ注進スベシ

元和八年二月十九日

〔參考〕

〔御當家記年録〕^五

今年改築江城殿主臺石壁、角石等西國諸大名進上之、淺野但馬守長晟・加藤肥後守忠廣役之、同有本城殿舎營作、老臣及御近習中名等勤手傳役、此時大納言家御座於本多美濃守忠政宅、^{○下略、家光川越ニ放鷹ノコト、秀忠西丸移徙ノコトニカ、ル、正月二十三日、五月十九日ノ條ニ收ム、}

京都四條河原ニ勸進能アリ、

〔舜舊記〕^四^{二十}

十八日、^{○中略、}次四條川原勸進能女大夫、^{右京ト云、女名也、}予見物也、式三番、^{奈良禰宜、}脇能海士右京大夫、鉢木・定家・酒傳童子・角田河・クズ・橋辨慶以上七番也、

十九日、^{西、}幕府、前下野天明城主佐野信吉ノ罪ヲ許シ、配所信濃松本ヨリ江戸ニ召還ス、尋デ、信吉、江戸ニ卒ス、

〔元和年録〕^坤

二月十五日、佐野修理御國御免之而、從信州歸參、

〔寛永諸家系圖傳〕^{八十} 佐野

世系

天德寺法印

信吉のよし修理大夫

定綱さだつな吉兵衛

直次なをつぐ喜三郎

信吉ノ養父

天德寺法印

豐綱が二男、昌綱が弟、宗綱討死ののち、豐臣秀吉につかへ、佐野莊を領知す、宗綱か娘を養子として、信吉に嫁し、佐野の家督をゆづる、

信吉ノ履歴

信吉 實は富田左近が子にして、宗綱か婿なり、十四歳のとき、秀吉につかへ、佐野の家督をたまはり、從五位下に敍す、そのうち台徳院殿につかへたてまつり、慶長五年、關

關ヶ原陣ニ上杉景勝ノ押トナル所領ヲ沒收セララル

原陣のとき、嚴命くだり、諸將をもつて長尾景勝を押たもふ、信吉其隨一たり、同七年八月、ゆへありて所領を沒收せられ、信濃の松本に屏居す、元和八年二月十九日に、め

信吉ノ實父

して江戸にかへる、同年七月十五日、五十七歳にて卒す、法名源忠、^{○本書、蟄居ヲ慶長九年ノ誤ナラン、}信吉が實父富田左近將監水西、幼少より織田信長につかふ、信長薨して後、秀吉につかへ、秀吉の親族官位にすゝむ次に、水西も從五位下に敍す、其後秀吉の命によ

りて、麾下先手の組頭となる、慶長四年に卒す、

元和八年二月十九日